

川柳塔

昭和六十二年一月二十五日発行
創刊大正十三年二月一日発行
通卷七二九号



日川協加盟

No. 729

二月号

NEW FORMAL COLLECTION



泣いて笑って……
夜を通り過ぎたら
また陽がのぼっていた。
男のロマンと
フォーマルと。

OSK JEFF
ORIGINAL DESIGN

株式会社 **オーエスケー**

〒540 大阪市東区南新町1-13
☎ 06(941)8015

時実新子句集

『有夫恋』

解説 田辺 聖子

作品 十七の花嫁なりし有夫恋

飛行機の降りる角度は愛に似る
古箏筒むかしのお手紙がわんさ
何だ何だと大きな月が昇りくる
靴の紐男の帰心見えていたり

外六百五十句

☆現在、八面六臂の活躍ぶりの著者の来し方を集約して見せる短詩川柳ドラマ。

☆作品は超一流の評価を持つ著者、装丁は「サラダ記念日」と同じ菊地信義氏。

☆「今度の旋風は川柳の番である」西尾棗主幹の念願が実現するか。

定価 一、〇〇〇円

全国の書店でお求め下さい

発行所 朝日新聞社

伐採音

西尾 葉

川柳塔誌十二月号に、短歌の俵万智、俳句の松本恭子に続いて、川柳からもペストセラの句集の出現を願ったところ、日を経ずして時実新子氏の句集「有夫恋」が旧臘十二日に朝日新聞社から発行された。洵に欣ばしいことである。第一版は既に売り切れで、新春十日に第二版が出るのとこととで前途の明るさを見通して愉快である。どこまで伸びるか知らないが、川柳発展、川柳の何たるかを知ってもらうためには、洵にその功績や大といわねばならない。

田辺聖子さんが「珠玉にして七首の句集」という一文を献じている。例えば

嘘のかたまりの私が眠ります
伴せを言われ言訳せずにおき

五月蘭生みたい人の子を生まず
茶碗伏せたように黙っている夫
靴の紐男の帰心見ていたり

愛咬やはるかはるかにさくら散る
ののしりの果ての身重ね昼の闇
ふたたびの男女となりぬ春の泥

何だ何だと大きな月が昇りくる
まだ咲いているのは夾竹桃のバカ

れんげ菜の花この世の旅もあとすこし
明日逢える人の如くに別れたし

入っています入っていますこの世です
鬼と暮らして鬼のふんどし洗いおり

わが胸で伐採音の絶え間なし
—— 私たちもそれぞれ、自分たちの胸の

伐採音を聴くのである。この句集が人々に愛され喜ばれてほしいと私は希うものだ。

という言葉をもって結んでいる。

川柳塔社の同人のKも二十冊程注文し

て、重いから二冊三冊ともって定価で頒けて宣伝している。私も矢張り、そうし

て教室の川柳家にやると、「え？これが川柳？」と驚かれた。「我々が唯今やっている川柳とは趣きを異にしているが、之も川柳である。川柳の中には、こういう新傾向の句もあるのだ」と言って取り敢えず読むことをすすめている。

ふるくとも僕には仁義礼智信 路 郎
で育った自分達には

妻をころしてゆらりゆらりと訪ね来よ

新 子

の句には、道德観のある明治生れだからすぐには馴染めないが、これにはこれ

の良いところがあるようだ。

それにしても、短歌と言ひ、俳句と言ひ、川柳と言ひ、女性にやられたとは面白い。

嘘をまらめて書斎けうとし 路 郎
人恋し灯ともし頃を桜散る 太 祇

先人の句の美しさも参考にして欲しい。



座右の句

人恋し人わずらわし波の音

(栞)

私の句

裁かれているのだろうか寒すぎる

河瀬芳子

川柳塔 二月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

伐採音	西尾 栞	(1)
国東半島への旅	田中正坊	(2)
川柳塔(同人吟)	西尾 栞	(4)
自選集	東野 大八	(30)
■川柳太平記(Ⅱ) 川柳の群像 森田一二	阿達 義雄	(34)
■連載 誹風柳多留廿六篇研究(三十四丁)	黒川 紫香選	(36)
俳諧あづまからげ(下)	水粉 千翁	(38)
水煙抄	吉田 笑女	(40)
秀句鑑賞	同人吟	(43)
水煙抄	吉田 笑女	(57)
63年度路郎賞・川柳塔賞候補作品中間発表		(58)

国東半島への旅

田中正坊

年末から新年にかけての四日間を北九州への旅ですごした。何かと小うるさいお正月を旅に逃避したいという長年の願望と、磨崖仏で知られる国東半島を訪れたいという希望が合致するツアーを見つけたからである。

十二月三十一日朝、私たちの乗った「さんふらわあ」号は別府港に到着し、バスで国東半島に向かった。九州の東北端、瀬戸内海に突出するほぼ円形の半島で、平安朝時代以降仏教文化が開いた土地である。六郷満山とよばれ、国東六郷には二十八山・六十五ヶ寺があり、六万九千三百三十八体の仏が祀られているという。

初めに訪れたのは熊野磨崖仏。鬼が一夜で築いたと伝えられる自然石の乱積石段をあえぎあえぎ登ると、岩壁に不動明王像と大日如来像が刻まれている。ユーモラスな表情のお不動さんは高さ八米で日本一大きい。次にお詣りしたのは、藤原時代作の木造阿弥陀如来座像はじめ九体の仏像を祀った真木大堂と、堂内一面の壁や柱に彩色壁画が描かれた国宝の富貴寺大堂で、天念寺を経て半島の円心部

愛染帖……………	橘高薫風選 …… (61)
〈女性コーナー〉 茴香の花……………	八木千代選 …… (64)
62年度愛染帖賞・茴香の花賞受賞のことば	
節分……………	布施幸子 …… (68)
美しき風趣いっばいの大八宅川柳屏風完成……………	東野大八 …… (69)
初歩教室……………	阿萬萬的 …… (70)
「負担」……………	石川侃流洞選 …… (72)
一路集「霜」……………	稲田豊作選 …… (72)
「飾る」……………	山下みつる選 …… (73)
柳界展望……………	
本社一月句会……………	
各地柳壇（佳句地10選／神夏磯道子）……………	
■ 2月各地句会案内 93	■ 編集後記 95

座右の句

感受性強くて淋しいことばかり

（岩田美代）

私の句

真実を探し続ける時刻表

吉川 一郎



に位置する両子寺を巡拝した。

明けて一月一日は、ホテルでお屠蘇を祝った後、このツアアのハイライトで七か所に大小六十余体が彫られた白杵石仏群を拝観し、原尻の滝や戦国の山城の名残りをとどめる岡城址なども見学、翌二日は小雨の降る中、湯布院を経て全国八幡宮の総本社として知られる宇佐神宮をひきもきらぬ初詣の人波にもまれて参拝した。

全く地理にうとく、白杵も国東半島にあるとばかり思いこんでいた私だが、この旅を通して、かつて畿内と大陸との接点にあった当地の文化について認識を新たにすることができた。ここには磨崖仏だけでなく、さまざまな石仏や国東塔、鳥居などの石造文化財があり、仁王像も石に刻まれている。この石の文化は、民俗の巨石信仰とも結びつき、大陸の仏教文化との接触によって発展をとげたものとみられる。

さらに、半島の要の位置にある宇佐神宮とのかわりも見落とせない。六郷満山の寺々はいずれも八幡神の化身である仁聞菩薩の開基とされ、両子寺の奥之院には本尊である十一面千手観音の両脇に宇佐の二神像が配されている。宇佐の祭神は応神天皇、比売神、神功皇后だが、この比売神こそ、日本史の曙に登場する卑弥呼その人であると思うのは、私の新年のロマンだろうか。



西尾 葉選

仙台市 川村 映輝

姿勢のよき褒められ迎える八十四

老いの道テールランプが見えてきた

一病を手術二病残りけり

会長十年梯子外され下りられず

広瀬川歩けば民話語り出し

叙勲沙汰わが人生の総決算

岡山県 土居 耕花

坊さんの車は少しボロがいい

右の手はあんまり物を知り尽し

病室の主におさまる無精髭

むつつり屋のナースの痛い注射針

胃カメラにへいへいと禁酒する

円高の話が出ない焚火の輪

大阪市 西出 楓 楽

漢方の効き目出るまで待ちきれぬ

飽食の果てに玄米麦ごはん

心配りの中に自己満足もある

安全牌握り退屈しています

寝すごした五分に今日をたたられる

返事せぬ返事の中にある怖さ

丸ごとの鮭まぼろしでない歳暮

世直しへ妻を連れだす投票日

熱かんの酒へ文句のないふたり

欲ふかい顔を写したご神体

欲すててなお捨てきれぬ預金帳

あつたかい部屋で二月をやりすこす

和歌山市

控え目に生きたと思う胡瓜揉み

冬が来る前に笑顔を貯めておく

針千本女は女なりの罪

牛尾 緑 良

幸せよごはんの湯気を囲んでる
美人とは思えぬレントゲン写真
一本目の白髪誇りが少しある

下関市 石川 侃流洞

父権暴落均等法の仕業だな
ゴキブリへ小笠原流は間に合わず
暖房へ蚊の残党が攻めに来る
子を叱るついでに僕も叱られる
噂好きの女へ火種盗まれる
住み馴れて旅立ち遅れた燕の子

倉敷市 稲田 豊作

老いの身に火急の用はトイレだけ
ふところの寒い男が猫背なる
老いにつれ円くなる人尖る人
たまさかの老いの自慢の鼻折るな
見くだして来る奴一本背負い投げ
幕近し生涯端役に甘んじて

富田林市 藤田 泰子

お荷物にならないようについてゆこ
君の名はと聞く人があり新年会
ポケットにまだ使わずにある切符
男性を飾ることばに愛妻家
それからは秋の誓いは信じない
逆も又真かもとつても憎い人

兵庫県 遠山 可住
落葉掃くふれあいとなる風の精

定年へまだ張り替えが効く障子
無風という自由があつた風見鶏
娘が嫁つた毛糸のつづき編んで冬
初孫のたよりはまだかちぎれ雲
豆を撰る指を休めず送り出し

松原市 谷垣 史好

果報かな三男三女枕辺に (母の死)
悲しみは白い脚絆の旅支度()
本のこと知らぬ本屋の女店員
皮ジャンの気分いささかアナキスト
紙おむつ有難しとも憎しとも

竹下さんへ
裏門の守衛にこんな目を見たよ

兵庫縣 辻 文平

長いのにまかれひたすら繰る念珠
絵心がなくても弾む雪の白
明日こそあしたこそはと爪を切る
ひとかけらの愛語金婚譜がめぐる
追伸を謎に包んだ花言葉
国訛り互いに本音の言える距離

米子市 林 瑞枝

追憶の視野に野菊が咲いている
わが夫の笑顔が窠場から匂う
珈琲はモカに決めてる円舞曲
あやとりの橋を渡ってきた出逢い
おもちゃ屋の兵にも朝の陽が覗く

たった一つの火種を抱いて冬籠り

和歌山市 福本英子

太っ腹の腹を時どき借りに行く

少し残る女へ小紋の柄を選ぶ

奥さんのある人と行く御堂筋

車間距離きつちり守ってついて行く

長寿日本医院は多額納税者

声かけて引つ込みつかぬ戎橋

島根県 堀江正朗

あきらめもゆとりの耳になって古い

音で描く空想の絵の素晴らしさ

追いつけぬ音に盲人あせらない

美しさ捉える五感一つ欠け

今なりのファイトに燃える深呼吸

タイミング合う嬉しさよ僕と子と

桜井市 岩本雀踊子

父の形で大きな軍手干してある

おくられた情に釘がうってある

働ける仕合せ知ってる母の指

囲炉裏火の自在に吊るす民話など

目の鱗一枚はがした夜長かな

裏側がぬれてる悲しい鬼の面

松原市 玉置重人

めでたくもなしさりながら初春の風

ポーナスの悲哀人人人に酔い

ポーナスの噂に街が混みはじめ

順番に刑を待つてる歯科の椅子

喫煙の自由をうとんじないように

ある不運跳ねているのは売った株

松江市 恒松叮紅

追憶へ無惨に枯れる風物詩

シクラメン少女の乳房まだ丸い

九十の母が覚えていた勅語

釘を打つ音にも吉と凶の音

重文の屋根裏鳩の居住権

追憶をたどると駅の時刻表

京都市 都倉求芽

木枯らしへ氏神さまの杜も古い

少しずつ嘘を真実に磨きあげ

アンケートに注文つきたい欄がなし

散髪に時間喰われた十二月

ロボットのミスを人間の所為にされ

犯人に言わせば美女とは猪口才な

京都市 松川杜的

一言も喋らず山茶花散りました

天神さんの小径を歩く犬連れて

亡母在ませば百歳菊薫る

八十路から見れば六十路も新人類

姑と娘のいつも真ん中に僕が居る

草紅葉ここは野仏座る位置

米子市 林荒介

ふる里の水が美味しい皿小鉢

自伝を書いては峰打ちの数乱のかず

友達の畑で穫れた蕎麦の味

胃の奥の暗がりに栖む河童の忌

蟹気楼ポケットベルは乱である

河童には河の匂いが疎ましい

竹原市 小島 蘭 幸

龍の眼よ我も不惑となり候

猫を抱いていたのはおとこ都会の灯

力瘤妻には見せたことがない

NHKが来るので少し本を読む

ブラックコーヒーが好き真夜中のエンピツよ

侍になろうと思わない不惑

倉吉市 渡辺 独歩

神の森身内にしたい人が住む

繻子の帯解かすジョークが見当らぬ

ちっぽけな的には引かぬ梓弓

行楽で疲れた体は社で癒す

置手紙書いてみたい日の少女

最大のジョークは閻魔の前で言う

唐津市 久保 正敏

人妻と飲むと時計が喋り出す

お月さまあの娘が好きと言いません

生きて行く支えの恋に嗤われる

生きている限り余生は俺にない

ゴキブリに内面如夜叉を見せつける

傾けばすぐ戻される水平器

寝屋川市 稲葉 冬葉

障子張り替え姑になる日が近い

鳩の百羽も飛ばそうか祝い膳

未亡人寡婦なんとも言いなはれ

特賞がころがりこんだ暮れの街

母と娘に笑顔がもどる初春の街

奥さんが逃げてお隣静かなり

倉敷市 野田 素身郎

ちよつと美人で被写体になりたがり

後遺症今朝も電車に乗り遅れ

シャッターチャンスまた人通りに阻まれる

犬の散歩実は飼主の散歩

退院の準備ができた日の微熱

岡山県 嘉数 兆代賀

生きている証しよ祈ること多し

孫台風荒して去って冬景色

亡父の打った釘がわたしを離さない

血の絆もつれの解けぬままに冬

枯葉舞う避けて通れぬ道ばかり

和歌山市 西山 幸

亡父の眼と亡母の眼がある冬景色

幸せに遠い離人形ばかり

こつこつと無を溜めている玉手箱

私に記念日がないカレンダ―

目も耳も口も塞がず春を待つ

熊本市 有働 芳仙

夫婦でも見られたくない時がある
ぎっくり腰ですかとみんな何故笑う
横糸が一つ抜け二つ抜け物忘れ

「記念日」の活字が売れて除夜の鐘
暴落のみかんの顔がいじらしい

八尾市 宮西弥生

むき合えば同じ情の冬の旅

眠っても眠っても眠り足りない十二月

賀状ではない絵葉書が来る女文字

流されて流れて春の海に出る

十二月働いただけの疲れなり

弘前市 波多野 五楽庵

舟が来てアイヌ言葉が訛り出す

叱つたり宥めたりする聴診器

ドラマだと思いきんでる避雷針

鯡にはとつても弱い蕁麻疹

指揮棒を迷わせているメトロノーム

松ノ江 柳楽鶴丸

還暦やこれから馬鹿になつて生き

秘密を知つてそれから自閉症

男の料理ダイナミックに盛り付ける

暦を無視してマネキン脱ぎ捨てる

死ぬる迄消せぬ男の火種

宇部市 平田実男

母闘病(二句)

点滴のお蔭と知つてる淋しい目

長男のボーナス嫁の手から受け
ポケットベルほつておきたい日もありき
手造りと言えば疑う目が嬉し
自信ある爪を子にだけ見せる鷹

倉敷市 小野克枝

変身の人形春へ歩き出す

動きたい足に魔法をかけられる

相談できる明るい二つ屋根

笑わせて泣かせて幕が降り辛い

直線を歩き過ぎたかすぐよろけ

島根県 堀江芳子

夫の背な流すと疼きだす軍歌

こだわりを捨てた笑顔に負けました

広辞苑いずも訛りは知らぬだろ

とうさんの声が大きい日の安堵

忙しさからも生き甲斐湧きあがり

和歌山市 内芝登志代

なんにもない事がいちばん倅せか

ふり出しに戻れば自分の道が見え

入院といえは癌かと噂され

夕焼のような終焉願つてる

抱き上げて我が児の匂い血のにおい

島根県 小砂白汀

ばんざいをさせて両脇くすぐられ

老眼鏡ひたいへ掛けるものでなし

からくりは飽食暖衣の底にある

噂とは姿を見せぬウイルスか
ちり紙とご幣どちらも白紙です

大阪市 津守柳伸

控え目な仕草ボンコツ自覚する
絶対には風邪は引けないパスポート
寒月へ見果てぬ夢を露天風呂
無精卵抱いてインコの瞳がいとし
状差しが溢れ去年を振り返る

大阪市 黒田真砂

遠巻きで勝手言ってる他人様
美しい別れになったぼたん雪
心にしこり抱いて厨の朝の冷え
打ちとけた仕草で温い京言葉
時々は怠けてみたい主婦の朝

岡山市 時末一灯

愛憎の糸がほぐれて落葉道
無人駅春のホームの去り難く
山なみの懐深く過去が棲む
師走とて走ってもみる寝てもみる
目薬をさして夢からさめている

柳井市 弘津柳慶

残り香を抱いて旅の終りにし
いたずらの記憶残した傷の跡
処方箋へ悪い予感が走り出し
軍人があこがれた遠い過去
あこがれた先生ついに嫁に行き

高槻市 辻白溪子

胡麻豆腐精進料理だから旨い
棘のある言葉は優しい方が利く
木の香る和室で待たすおもてなし
女秘書断る電話を委される
ふるさとが同じで団地助け合う

平田市 久家代仕男

ストレスは持ち越しにせぬラッパ節
ジャンケンで妻と影踏みでもしよう
物腰が静か苦情を言いそびれ
グルメから帰り銀めし山盛りに
学究に日本お金の出ぬところ

奈良市 宮口笛生

風邪などをひいておれない十二月
十二月の雨が一日狂わせる
病院の正月重患だけ残し
元日の午後ポストまで行ってくる
三ヶ日過ぎた途端のお葬式

島根県 西村早苗

ふたありの会話雪が解けている
腹を見てもう反対は出来ぬ父
頼み事らしい客間の低姿勢
約束だけはいつもしているおつきあい
女からあくびもろうた立ち話

堺市 中川滋雀

朕惟フニ回顧の裏に風化する

約束を守って下手な嘘もつき
避けて出て行ったに待たせて貰います
焼香の列から挟んできた小耳
新聞代チラシの目方も入ってます

伊丹市 檜谷 寿馬

おもしろいこと無いかとおもしろい顔が言う
お喋りを真ん中で聞く渋い柿
単身にポン酢の味が酷し過ぎ
ネクタイの黒が現世を引き締める
一步入れれば終の住みかが満つ京都

倉吉市 奥谷 弘朗

シベリアの飯盒に追憶つめてある
着飾って出たい若さがまだ残り
追憶の歴史を語る傷のあと
金廻り良い時だけの身内にて
いい本を読んだ手ごたえ瞳がきれい

浜田市 中川 幸一

勤勉は罪悪なりと週五日
近所では紳士の顔は崩せない
百薬の長を信じて肝硬変
昼酒がとつてもうまい妻の留守
組の音が知らせる低気圧

美禰市 安平次 弘道

銭よりもわが生きざまを子に残す
遠い過去忘れてくれぬ尾髭骨
飽食の皿を裁いて食べ残し

ジキルからハイドへ核をもてあそび
セピア色の過去にいくさの傷がある

堺市 高橋 千万子

展示会以上によかった東京の庭
学歴もコネも通用せぬ土俵
この酒を飲んでこの場は酔うたふり
餅はもうつくものでなしおどらせる
手編みセーター妻の監視の目を感じ

東大阪市 森下 愛論

出張のたんびに酒が強くなり
結納がすんで素顔の日が続き
化粧前です女は不愛想
肩の子が空の弁当持たされる
女にも酒にも飽いた頃に死に

守口市 羽原 静歩

好きなことたつぷりやって叙勲され
ポンコツの瞳にふるさと遠くなり
赤髭も偽医者もいて冬の朝
天国も黄なる彩かやゴッホの黄
シクラメン冬の心をあたためる

大阪市 江城 修史

十二月ひとりひとりにある歩巾
落丁に似た人生の昏れかかる
力のかぎり生きました夢も見ました
楯となる妻の両手にある歴史
歳月の証よ古希の坂を行く

和歌山市 松原寿子

なお慕い忍の一字を深く彫る
どうにもならぬ炎を抱いて日記帖

言葉ひとつ瘦せて積木がくずれ出す

もひとりの私へ鞭をあて直す

愛でありたい恋でありたいのも夢か

米子市 小西雄々

マネキンも驚く高級品が売れ

ほどほどの夫婦が好きなヤジロペー

陽の匂い吸わせた布団姑へ数く

犬釘とレールへ虹が見えはじめ

口ぐせへ妻さからわず飯を盛る

米子市 石垣花子

気がつけば余白が見えて来たノート

行列に野犬一匹まぎれこみ

鼻声のあなたに弱い父である

ちぎり絵に和紙は妥協をしよう

あした咲く程は山茶花散っておく

米子市 野坂なみ

身繕いして順を待つ初春のバス

伸縮自在ゴムの若さを大切に

忘れっぽい辞書が机に置いてある

夕ぐれで巢の温もりを思い出す

夕暮れてわたしの菊が咲き残る

米子市 田中亜弥

寝ぼうして火種なかなかつきません

言うだけは言って最後は母が決め

無人駅のカラスを友にして歩く

日の丸の下が似合うよ福寿草

笑顔なら父母の笑顔が一番だ

米子市 政岡日枝子

追い風よ君の力も弱ったな

間を置いて君平熱で話そうよ

ミヨちゃんに僕は泣かされてばかりいる

その後の父はうさぎ小屋から出て来ない

足元の小さな倅せから拾う

鳥根県 榊原秀子

故里の寺の櫓が売れたそな

子の幸をいつも聞きたい母の耳

かくし味ほどのなさけが身に沁みる

無表情きつちり並ぶビルの窓

一人居が病んで前歴さぐられる

鳥根県 榊原みどり

すっぱりと疲れを落す里のお湯

孫の手がいつしか届く棚の上

湯豆腐を囲む家族の丸いひざ

心の灯ぬくめおうてる旅まくら

行き届く嫁の看護に手を合わせ

竹原市 森井菁居

目の前に迫る五十路の急な坂

古伊万里の分からぬままに安らぎぬ
青い鳥求めてエンジンキーを入れ
セールのドラマ刻んでいるグラフ
名刺刷り替え挽回のプログラム

名古屋市

越村 枯梢

余生何年おつりのように数えて見
俺だって仏に成れるなんまんた
女好きとうから私が知ってます
落ち葉焚き凍った愛を取り戻す
玉子豆腐俺の入れ歯を知っている

藤井寺市

吉岡 美房

冬の夜の長さに合わせ本を買おう
木守柿過疎の父から日が暮れる
焼いも屋御堂筋から横にそれ
忙しい師走毎晩飲んで来る
肩書がとれて自前のうまい酒

今治市

矢野 佳雲

分校を分校にする雪が降り
ノラになる時を狙うてまだなれぬ
胸ぐらは取らぬが妻がやりこめる
家内には言えぬ入れ歯の外しよう
よく飛んだものとゴキブリ振り返り

大阪市

河井 庸佑

先生の声が聞こえる赤いペン
先生を困らす質問考える

作戦という退却にひっかかり
教室の手抜ききっちり出る結果
自分だけみじめになっている短気

大阪市 本間 満津子

火曜日から又お帰りは午前さま
カルチャーへそれからちよっと水曜日
木曜日公休の娘と昼御飯
天気予報金曜日から下り坂
バラバラに食べる土曜の晩御飯

大阪市 神夏磯 典子
(道子改め)

夕食がまだ終らない上気嫌
芝居好きという言い訳もっている
少しだけ心配かけるのも薬
胃袋の疑い晴れた青い空
誰とでも仲良くなれる白い花

和歌山市 若宮 武雄

反撥の力残して負けておく
長男も四十八かよ辰の年
快くなつて病へ捨てた日を数え
長生きを願ってくれた羽根布団
他所並の量でありたいゴミ袋

尼崎市 春城 武庫坊

猫二匹舁に住んで海の貌
舟の無い港の町に鳴る霧笛
熱爛のコップ軍手のままで受け

夢を買う列に並んでくしゃみする
尻馬に乗ると駆け出す暮の風

町田市 竹内紫鏑

観劇によれば社長に忘れられ
後半世肺活量は測らずに

片鱗を見せる折なく趣味の欄

小使室の跡は無人の複写室

軍隊に行かずスポーツ歴光る

西宮市 林はつ絵

ノーベル賞夢でなかった土台石
オイオイと泣くのは余裕できてから

煮つころがし独りの膳に馴れてくる

長病みの友のジョークに救われる

雪あかり逢うてはならぬひとに逢う

西宮市 奥田みつ子

あくる朝泣き顔となる目玉焼
亡姑の部屋片付ける手がまた止まる

本心をかくそうとして猫を抱く

名案は事を運んだその直後

叱られた思い出亡父の鼻眼鏡

西宮市 西口いわゑ

鏡台へ幾歲月の女遍
化粧ポーチすこし不倫にあこがれる

三ドルの絵皿を買った港町

子猫三匹嫁入り先を探さねば

十二月広告塔も寒かりし

唐津市 仁部四郎

トゲを抜くハガキを広くもてあまし
居酒屋で覗かせてやる所得税

千鳥足苦手な道を遠回り

スカートは赤く女子大冬休み

寄付集め校長低い線を出し

和歌山市 垂井千寿子

般若心経心の声を写す筆
ぎんなんへ思い出違う嫁姑

水子にも供える花へ陽をもらおう

掌の中の大事な星をあたたためる

十指まだ亡父と亡母とに生かされて

和歌山市 山川克子

井鉢かたい話は嫌いです
正直に話せと言うから話したの

手柄にもならんが言うて女歴

そして朱に交わる事も処世術

諦めよまだ諦めぬ男運

和歌山市 桜井千秀

息とまる程の凶星も躲さねば
廻転の早さで拗ねる脳細胞

質問の野暮さで印象つけておく

きついお仕置き出来ずに犬に舐められる

点と線そして始まる物語

寝屋川市 江口 度

誘惑へ尻尾振らずについていく

石段に信仰心を試される

おむかいの主人も布団をあげている

文化人少し左に針路とる

夫婦して明け暮れ何か探してる

寝屋川市 柴田 英壬子

血管へ言いわたされた二kg減

義理人情ふと考えたのが油断

横顔のしわも年輪初かがみ

筆記具を豊富に揃え筆不精

晩年運まだ幕切れは考えぬ

寝屋川市 平松 かすみ

三世代住んできつちり福は内

平和です男の首のペンダント

消しゴムで消せぬ言葉を選びました

老眼になってやさしくなる歯科医

さりげなくバラを持たせて壁の裸婦

鳥取市 森田 熊生

みんな仲間で丸い地球に住んでいる

腹立てていてもともかく十二月

内輪から出た火の粉とはまだ知らず

落書きもいたずらも好き子が育つ

空っぽになって弁当じやまになり

鳥取県 松下 たつみ

雑草のいじらしい程根が深い

石に水かけて背のびのない日課

情報グルメの店の主は無口です

やらせの耳打に菜の花が咲く十二月

それなりの幸あり一人山降りぬ

鳥取県 土橋 螢

この世の中に龍の落し子として生れ

年ひとつ重ねただけのいのちなり

雪達磨初春へ小さくなつてゆく

太陽に蔭ひなたなし雪達磨

雪礫君のうしろに投げてやる

鳥取県 新家 完司

山茶花が咲いたら姉の七回忌

寂しそうな壺に山茶花活けてやる

公園の鳩とわたしは仲が良い

この世へはちよつと花見に寄つただけ

静かだと思えば雪が降っている

鳥取県 中原 汲香

古稀生きて今自分史を噛みしめる

水割の味も憶えて古稀の春

舞わせれば百歳までも老母は舞う

さすがだと思える齢が見えて来る

耳よりな話路地から拾ったぞ

大阪府 大塚 節子

むし寿司の湯気が師走の足を止め

御平癒も目出度く新年祝賀の儀

袋帯重いと思う年齢となり

解く帯のぬくもり手にもありものおもい

熱燭を好んだ父も人肌

大阪市 町田 達子

さりげない優しさ貰う冬の旅

山茶花の道浮きうき手話の恋弾む

飛ぶように論吉師走の風に舞い

バーゲンの服を洗いと褒める女

賀状だけと言う故里のおつきあい

羽曳野市 榎本 吐来

ひらき直った後を戸惑う五十肩

父と子の会話が重い雪もよい

心ないグルメを啗う鯛の口

山茶花に暮の帳尻見詰められ

真実をひとつ拾った港の灯

羽曳野市 佐野 白水

ウォーキングここにも大師の杖の跡

ウォーキング芭蕉の句碑をしかと読み

真剣に石段数えるウォーキング

冬ごもりの蛙驚く地価高騰

冬ごもりの蛙よ地代はろてんか

羽曳野市 田中 隆二

十二月試行錯誤はしておれず

貸借りの帳尻合わず十二月

ふる里へ帰って来いとつるし柿

背伸びした分だけ陰口多くなり

ひとり酒単身赴任まだ続く

富田林市 田形 美緒

飾らないもてなしに酔う北の宿

還暦を飾る無遅刻無欠勤

使う日があるかも知れぬ元の氏

お使いに出して夫婦の謀りごと

お月様今宵は連れがありますの

富田林市 片岡 智恵子

焙り絵の向うに青い嘘がある

飾らない人でころに持つ敬語

戦わずして勝つ法に忍の文字

罪の糸解けぬまんまの旅三日

夕やけへみんなで唄う子が来ない

松原市 北野 久子

姉妹で飲むには惜しい四畳半

聴こえない妻の行く先疑わず

運強い男に買わずジャンボくじ

嫉妬と苦いコーヒー飲んでいる

音の無い暮らしへ強い眼が欲しい

松原市 佐藤 藤子

ベレー帽とてもきれいな目をしてる

談山神社もみじに恋をしたわたし

冬枯れの泡立草にある虚ろ

真実を隠す三つの嘘をつく
清潔な部屋は説得力がある

岸和田市 福浦勝晴

遮断機の向こうも寒い冬の貌

衣食住足りてモラルは地に墜ちる

無人駅誰を待つやらカナナ燃ゆ

死に方もいろいろ餅を喉に詰め

さ夜更けて名もなき虫のソロを聴く

岸和田市 古野ひで

骨抜きにされて飼い犬愛される

酒とろり人生語る老いふたり

人生の終章飾る趣味の花

ひとり居の宵寝なんとも佗し過ぎ

御見舞の花束入口でひと呼吸

高知県 赤川菊野

お喋りがサンバのリズムでやって来る

好い事は何んにもないが死ぬもせず

白昼夢さめて師走の風の中

産声のにぎりこぶしにある未来

柏汁を一緒に食べて好きな人

豊中市 田中正坊

笠智衆うなずくだけで芸になり

重吉が舞台にかけているいのち

知恵の輪が抜けない父の太い指

蜜柑から見ればレモンは少し気障

旧友逝く
会者定離 大正琴はもう鳴らさず

尼崎市 奥山美智子

団欒の炬燵で明日を弾ませる

柿ひとつ逢いたい人へ熱れ残る

ひと言を言う術もなく暮れかかる

わきまえた女の酒に溺れよう

喝采を望まぬ靴が脱いである

高槻市 河瀬芳子

仏の花の水を忘れて風邪をひく

流れ雲わたしを頼りにする家族

寡婦という暗くて軽い冠よ

口いっぱい入れて笑うでない柘榴

流木も使いようなり華道展

八尾市 宮崎シマ子

言い負けて言葉が喉でさわぐのみ

方便の嘘さえ出せぬのどぼとけ

譲ってくれた人も座つてほつとする

母と同じ事して言う年迎え

珍しい人来て冬の酒となり

松江市 舟木与根一

小春日へ人のながれも緩くなる

追い越したと思う父の背をながす

呆けそうな安楽椅子が用意され

サンタクローズ信じてよい子早寝する

大田市 藤田 軒太楼

心中に期することあり貝となる

決断を早めるように星流る

戦友会思い出痛む今日を生き

世直しへ清く包んだ今朝の雪

今治市 越智 一水

般若心経書けば書くほど無に返り

座して掌を合わせば心に花が咲き

人生の春長男に嫁が来る

春ですとランドセルが運ぶ風

笠岡市 松本 忠三

やさしさが祖父の眼鏡の奥にあり

炬燵から腰を擡げぬ生返事

能書はいらぬ駄目なら駄目でよい

妻の留守男の威厳捨て切れず

岡山市 川端 柳子

春の海プツンと琴の糸が切れ

年内の仕事にしたら許可が下り

月光の中で力んだわがお城

小鳥も金魚も家族で会話きこえます

鳥取県 川崎 秋女

笑い袋二つ縫い上げ初春を待つ

もう二月まだ二月の人の貌

ばあさんというから豪華な花にしよう

柚子熟れて柚子煮る二月の台所

京都市 山本 規不風

唐津とはそれからご縁が深くなる

不整脈の心音に悠々として狼狽

頼母子講師走に勧めに来る夫婦

辰年の暗剣殺はまん東

奈良市 天正 千梢

候文しかと拝読いたします

成人式引算も少し出来

逃げ言葉広辞苑でさがしてる

答などいらぬ用意出来ました

松山市 谷 信夫

お好み焼食べてみたいな連れがない

快便のトイレの窓に柿が熟れ

許せない事もゆるして年あける

山茶花の散りしく庭の去年今年

玉野市 小谷 仙山

台所から真っ先に初光り

三ヶ日だけでも吹けよ南風

年の順と神も仏も決めてない

泥の海今日や昨日の事でない

浜田市 佐々木 裕

大地踏む扁平足の底力

手拍子を打つが奴だけ黒い肚

聞き役に徹してくれる友がいる

さすっても撫でてでも笑わぬ猿すべり

貝塚市 行 天 千 代

齒科内科お医者のはしご草臥れる

此の秋は紅葉どころか医者通い

亡き夫の分まで生きて傘寿来る

離婚する判こ一つでもう他人

七尾市 松 高 秀 峰

初詣心配そうな顔はなく

本当に働き蜂の遊び下手

人事異動お歳暮にも左右され

風雪もなんだ男の生きる道

河内長野市 井 上 喜 醉

出世せぬ案山子で人生日向ほこ

都合よい時だけ兄弟それっきり

決断の邪魔にはならぬのど仏

実年のグルメで旅は色気抜き

檀原市 岩 井 本 蔭 棒

悪徳の舌にまんまといのち金

故郷の駅を素通りして名士

鈍くさい一頭おいて群が散る

薬効は鼻で聞いているコマージュナル

和泉市 西 岡 洛 酔

還暦の二月生まれで寒がりて

人情の涙に触れた北の旅

善人のピエロで今日もやじろべえ

血圧も物価も上がる冬敵し

鳥取県 金 川 満 春

忘れませ勝つて来るぞはもう要らぬ

出しやばりが火元で隣組くるう

消火器で消せぬ火種がある悩み

ほのぼのと友情続く年賀状

鳥取県 森 山 盛 桜

戦争の最前線で鳩を飼う

コーランも剣も少女によく似合う

決心をしてから軽い女下駄

月下美人が萎まぬ内のプロポーズ

鳥取県 中 原 颯 人

とんどとんど童子の唄を揚げ幕に

おっぱいふたつ抱かれる胸に抱く胸に

忘れっぽい男よ愛にたらちねに

風を囀にして少年の歌びとに

鳥取県 中 原 み さ 子

亡母招く向こうの岸は遠すぎて

病床へメロンが届く薔薇届く

逢うことへためらいを持ち病みあがり

ふらり旅に傷口いやす湯があふれ

鳥取県 羽 津 川 公 乃

銀行の素顔シャッター閉めてから

参加者にひとり嵐を呼ぶ男

へそくりが貯まると口が軽くなる

新聞に包んでくれたプレゼント

鳥取県 江原 とみお
春さきの乱気流には気をつかう

身内から高野聖が離れない
首になるときに貰った感謝状
行楽の足をみつめている如來

鳥取市 両川 洋々

無い袖は振れぬと決めて鼻毛抜く

世界中敵に回してドルを貯め

野晒しの貨車よ汽笛で目を覚ませ

乗りそこねたのはノアの箱舟かも知れぬ

鳥取県 広本文子

あっぱれな席へ袴が結ばれる

ほんのりと敵はコロンをつけている

それからと何度も言葉つなぐ母

自画像に心化粧を急がねば

出雲市 板垣 夢酔

出られては困る愚妻にいつも折れ

金の無い父だが愛はたとある

遠くまで電気カンナの主張音

春眠の神をかしわ手もう起し

出雲市 園山 多賀子

聞き上手話し上手の掘炬燵

追憶の虹はだんだん瘦せていく

桐一葉神経痛が足に来る

宍道湖の七珍守る署名する

出雲市 小白金 房子
衣装箱女心を折りたたむ
大根を洗う頬っぺも十二月

○印多い師走の稼ぎ時

作業着を洗って勤労感謝の日

唐津市 田口 虹汀

煩惱を捨てりや人間ロボッタ

煩惱が人生七味唐がらし

一日一善いろはかるたを噛みしめる

修羅に居て母の化粧をまだ知らぬ

唐津市 浜本 義美

全快の声は浄土で聴くと決め

晩酌が待たるいのちまだいとし

猪口でよしコップでもよし縄のれん

焦っても流されている十二月

尼崎市 春城 年代

貸した櫛返って来ない未練など

招き猫の手に責任はとれませんが

憎さ百倍なんてことは口にせず

山茶花の垣におさな恋があり

米子市 青戸 田鶴

新しい暦に嵐こぬように

草もみじ枯野ひと時いろどって

十二月締めると痛い交際費

追憶はみんなきれいな絵にかわる

嫁からのプレゼント待つ古炬燵
米子市 菅井 とも子

団らんの夜思い出す蟹の味

厄年を抜けて今年の夢を追う

塗り箸をみやげに白虎隊のはなし

米子市 寺 沢 みどり

潔白を主張して咲く苺の花

暦繰る当り障りのないように

夕陽にも角度わたしの背が温い

日記書く少女の部屋に音がない

米子市 澤 田 千 春

いつわりの言葉が見えぬ鱗雲

風船をとばそう北の窓あけて

溜息を聞いてしまったあかね雲

大声で笑える友を大切に

和歌山市 堀 端 三 男

締めくくり落語にさえも落ちがあり

男一匹渦中に活を得ることも

招待状祝儀予算に組んである

腹芸のうまい古老が町に居る

和歌山市 福 井 桂 子

孝行をしたくて帰るお元日

万歩計きょうは何処までいったやら

あれこれと妬心へ薪くべにくる

信じてもいいのね水仙が匂う

和歌山県 寺 田 裕 美

みかん採る昨日も今日もあさっても

くもの巢の意地破れない通せんぼ

他人の花ばかり見てきた旅づかれ

よく出来た嫁で小さくなった母

神戸市 仲 どんたく

埋立地野鳥は地価を考えず

裏側に芸術があるビルの顔

竜頭の清水で漱ぐ初詣で

百八つまだ生きている生きている

神戸市 山 口 美 穂

お互いに考えてみようと逃げられる

冗談でもその一言がうれしくて

心に残る言葉イヤリングも聞いていた

少し酔うてしあわせな夢の中に居る

姫路市 大 原 葉 香

難しい事は知らぬが今日も生き

言いたい事妻も耐えてるらしい顔

のぞかれていますかも知れぬ正座する

盲人の笑顔はいつも上を向き

姫路市 丁 坪 サワ子

ウーマンリブ古稀から花のステージへ

巢立つ子へ鬼の面付け送り出す

石橋を叩いて杖が折れただけ

物価倍目減りへ命余って来

岡山県 岩道博友

吉報の男にハンドルの手が狂い
検査日の医者への足が躊躇する
紙すきの手に倅せの言を添え
天領の家の苔にも古詩を持つ

岡山県 二宗吟平

逝く逝くも歌と踊りで行く姿勢
趣味語るときだけ活きる私の目
他人さまに優雅と見えるアヒルです
老人の寄って話題は眠れない

岡山県 小林妻子

子育てへじいちゃん発言権がない
今年こそそんな希望の風の中
盃のおかげで本音聞きました
末っ子の嫁この雪の解ける頃

岡山県 山本玉恵

あの人から届いた白の夢ごよみ
七人目の敵が優しい掌をくれる
孤にこもる私に嬉しい糸電話
生き抜いた事は語らぬ束ね髪

寝屋川市 宮尾 あいき

太陽は気まぐれ師走を小春日に
義歯カツラああ偽りの多い世や
子を寝かす狸寝入りを子が真似る
遺産なら文句言わずにもらう腹

寝屋川市 岸野 あやめ

初詣で今は健康祈るだけ
名刺など持たぬ女の金遣い
成金になって教養まだ買えぬ
芋教師そうは言うても温かな

大阪市 西森花村

予感では青い眼彼女産みそうで
切れる前光るアタマも電球も
アホかいなアホでよろしい五十年
賢夫人団地サイズの子供産み

大阪市 北勝美

雨降りを目出たい日にする大安日
父の自負節くれ指が語らない
弱いから涙流すと限らない
アーケード益々狭い十二月

大阪市 藤田 頂留子

節分で胃薬ほしい宮の鳩
居る時になかなか出てこぬ探し物
弾丸よりましかパチンコ ビリヤード
もち上げてけなしてその気にさせる紅

大阪市 古川 美津枝

雑念を払い名画の中にいる
桃の花約束でしたのあなた
かけこんで鯛茶ちそうになる師走
ひれ酒にごたく並べている平和

大阪市 板東倫子

一株のNTTが遺産です
それぞれに貸借対照ある人生
亭主殿言語明瞭意味不明
健康なことがひけめになる見舞

大阪府 坂口公子

折りかけた筆にはずみの灯がともる
興奮をしたからとは言わせません
習慣へ逃げは打てない三ヶ日
福耳で寒い話を聞いてくる

島根県 松本はるみ

ちよつと待て貴方になんて傷もある
伏線がやつとわかつた雨の中
宅急便あわてたような声でくる
ガソリンも車も酒も多すぎる

島根県 松本文子

他人事のように噂をやりすごす
百叩きされても老母を背けない
未来図は別な所に置く父子
誰からも振り向かれずに墓へ行く

島根県 石田清泉

着飾って土に帰ってゆく枯葉
逃げ足の早い二月についてけす
万国旗戦いすんで垂れ下がり
追い越した車が待ってる赤信号

高槻市 竹内花代子

手作りをあげて楽しむ老いの趣味
へそくりの貯金に規約の多い印
習い事その気になった六十路坂
老母が来て同居老人取り消され

高槻市 川島諷云児

主義主張通した後の自己嫌悪
傷心の俺に影だけついてくる
美しく老いたい妻のコンパクト
笑う日もあると信じる定期券

宝塚市 丸山よし津

出たがりの毛皮ないてるぬくい冬
草一本許さぬ祖父の右軍手
アドリブで責任もなく生き延びる
あつけ無く三十で決まる娘のはなし

福岡県 横地雅風

農魂をじつとさせない冬を出る
弱点を握っていつしか威丈高
待たされる宿命健康保険です
近遠視夫婦で庇い合う活字

枚方市 宮川珠笑

飄逸な夫支える妻の皺
結納に娘ばなれを強いられる
席立てば誰もボスとは見てくれず
いたわられ無視され恩師老い給う

大和高田市 岸 本 豊平次

知恵熱を出す程賢くなったのか

兼農が週末を待つコンバイン

内輪ごとお茶がさめたと嫁は立ち

話好きの家で大工が捗らず

箕面市 坪 田 紅 葉

風邪で寝てやつと自分を取りもどし

湯豆腐を囲むメンバー一人かけ

ないものがほしいきままな老いの愚痴

だらりの帯柳の水にゆれている

岸和田市 清 野 こ う

木枯らしに弄ばれている落葉

訛ある言葉にヘルパー故郷を聞く

無口なじいちゃんに孫がよくなつき

ボケという名前で可憐な花をつけ

西宮市 瀬 尾 六郎太

そういえば居なくなつたね赤トシボ

タンポポは偉いもんだよ風車つき

新嘗の感謝も忘れグルメ族

喫茶店寄り集まれば人事談

羽曳野市 中 村 優

第九のタクトが音痴をきざみ込み

まむし酒たつぷり墓へ掛けてやる

新年のムード作りに赤い富士

後手後手の土地の議論が耳を抜け

倉吉市 野 中 御 前

追憶のどの頁にも母がいる

身の内に煩惱一つ棲んでいる

少年を見ればはにかむさくらんぼ

ロボットに火種はとられないように

兵庫県 脇 田 米 朝

観光の価値で植えてる千枚田

散りざわを見ろと銀杏に教えられ

とんちきで地べたに足がついてない

忍耐の不足分だけ背が伸びる

吹田市 茂 見 よ志子

言いようと聞きよしの差で変る風

木枯らしと押し問答の竹箒

還付請求 領収書が見あたらぬ

入園と入学がある胸算用

諫早市 原田メイシユン

もうチョットと云ったところへ人が来る

叱ったが後味悪い夜の床

独り者門限がない梯子酒

芦屋市 竹 中 綾 珠

股の部品取り換えてから痛み取れ

リハビリの痛み他人にはわからない

カンナ燃え病室のぞく物思い

羽咋市 三 宅 ろ 亭

旧正に賀状再び通覧する

常識では言えない常識持つ男
報恩講院主に増えた顔のシワ

川西市 松本 ただし

一病をぶら下げている坂の道
連中と言える友あり喫茶店

この辺で話戻そう砂時計

堺市 柿花 紀美女

枯葉燃す老いにはたのし一仕事

賀状だけ続け師の恩遠くなり

喜びもわずらわしさも血の絆

広島県 田村 新造

伏竜のままで終るかそれもよし

冬近し瀬戸のさよりのすだれ干し

ナナハンを飛ばすと瀬戸に陽が沈む

福岡市 吉川 一郎

昨日に少し気になる嘘がある

試行錯誤重ねて苦い酒となる

夫婦劇いつもお金で幕があき

倉吉市 渡辺 菩句

十日目も夢にヴィーナヌ出て来ない

橋渡り切ったら莫迦になれそうで

おじいさんと呼んだのはあの冬の雲

海南市 三宅 保

茶柱にすぎる気持が負けている

落ち込むと広角レンズ出してみる

風船を持った片手に夢がある

倉吉市 淡路 ゆり子

曆から拾った運になやまされ

三猿を大事と思う日が暮れる

なかなか優しい眉は描けぬもの

奈良県 宮川 古都路

原産地託送便のみかん山

注射器の話のなかで指しおわる

コンダクター炎の第九声揃う

藤井寺市 福元 みのる

百葉の長で病いが癒えるなら

スッポンとマムシと人蔘これでゆこ

喫煙が即肺ガンとつながらぬ

和泉市 岡井 やすお

間接税新型帽を被って来

ルール作り上手で守り下手な人

老大卒えん魔へ渡す証書出来

枚方市 二宮 山久

パートする妻の化粧が厚すぎる

恋一つ破れて大人になって行く

母の味出てきた妻も白髪増し

吹田市 園田 文子

カーレーサー紅一点の風をきる

吉良公もいい人だった黄金堤

カーキチのせがれの帰り月と待ち

女房より長い歴史を持つ仲間
都落ち二年で酒の腕をあげ
金になる話お前も亡者だな

箕面市 椎江清芳

寝屋川市
勝って酒負けても酒の味を知り
仲間うち誰かに逢える縄暖簾
流れ星今宵かぎりの未練とし

堀江光子

一、二本さぼるのもある蛸の足
芯のない男で秘書がうってつけ
数え唄一番だけは知っている

松原市 小池しげお

老人も老人多いなと思ひ
蟻でさえ争う性を持っている
うしろ指七十五日を耐えて生き

大阪市 中西兼治郎

絹の音させて娘も他人の妻
海外の心得を聞くフルムーン
一生の仕上げを飾るデスマスク

大阪市 吐田公一

バスをまつ雲の流れを見てあかず
鉄筆の芯から竜がおどりでる
寒そうな流れよ馬券売場へと

大阪市 大野武太

大阪市 鍛原千里

パンの耳つまらぬ話聞きたがる
市場竈高血圧の話など
イミテーション大事にしてます老母の指

大阪市 北山悟郎

医者通い老後の唯一の仕事かも
吊皮が男の価値を値ぶみする
喪服着て女貞淑にひき立てる

大阪市 松尾柳右子

寒椿竹馬の友の退院日

マンションに撞れているトンビ達

人寄ればどこか故障と五十路坂

大阪市 塩田新一郎

生駒山こんな近く見えて冬
ほっとけとほっとけな知って言い
道聞いて村の歴史を教えられ

大阪市 井上白峰

お茶漬が夢に出て来るパスポート
大作の野心を捨てぬベレー帽
謙遜の影に野心が見え隠れ

東大阪市 崎山美子

特売のチラシおばさん走らせる
羽ふとん明治の肌になじめない
花嫁の布団幸せそうな色

出雲市 吉岡きみえ

ふるさとの空が恋しいカニ便り

とことん落ちた男の人情味
亡母恋し母のころ知ったいま

出雲市 園山 よし子

健やかに老いて髪の毛淋しがり
針持つと何やらほつと女の座
雑草は強さの秘訣しやべらない

出雲市 石倉 芙佐子

出雲路の女としての数の内
火のような怒りでほどく糸糸玉
独り身の気儘は言わぬ木守柿

出雲市 小玉 満江

逃げたくても立止る迷い道
ごめんなさい亡き母と書く一行詩
青春よかえれ口笛吹いてみる

出雲市 竹治 ちかし

子の世界覗く眼鏡の度がきつい
妻と子の垣根の外に父は座し
傷口の深さ他人には見せぬ意地

富田林市 新開 千代女

性格に惚れて今年は金婚式
病人の前では顔色ほめておく
仲がよく昨夜の喧嘩うそのよう

富田林市 松本 今日子

一輪の花を飾っておく余白
着飾ったポーズに少し無理がある

かさこそと落葉の雀となる師走

唐津市 山口 高明

羨望の隣が明日離婚する

工作の時間を喰う肥後の守

産院のババは小さくかしこまり

唐津市 筒井 朴竜

土曜午後癌闘病之母看遺

幾許之余命也日限地藏詣

母病臥不帰黄泉路霜降夜

唐津市 浜本 ちよ

酒のため凡ての徳を失くす人

寄ればすぐ次の遊びのスケジュール

相槌と心は別に聞いておく

和歌山市 玉井 豊太

ちようちに釣り鐘娘は嫁く気

好きでいて歌の師匠の手に余り

おとなしく育って父と違う職

和歌山市 木本 朱夏

土壇場でまたハードルを跳びそこね

鉛筆の芯まで神経刺しに来る

嫁さんも欲しいと思う才女なり

和歌山市 青枝 鉄治

退職も配転もない福の神

周囲の目ちよつと気にしてジャンボくじ

相槌は打つが味方と限らない

和歌山市 山田高夫

おでん屋のおやじに嬉し国説
自己暗示かけて振子の捻子を巻く
数だけは減らせと医者も吐く煙

岸和田市 原 さよ子

言い過ぎて少し悔いあり帰り道
迷信よと笑われそうだが話しく
教え子に教えて貰う株のこと

岸和田市 芳地狸村

十二月喪中を知らせてくる葉書
職安で違う生き方教えられ
パチンコで女が遊ぶ均等法

竹原市 信本博子

パイプルが机の上にある安堵
方程式で愛の答は出て来ない
湯煙りの街で甘えてみたくなり

竹原市 古田太虚

美しく貧しく老いたいとも思
地獄極楽隣り合せている安堵
新しい日めくりがくる借金取りがくる

竹原市 石原淑子

お茶の間に米ソ会談居座って
生きてさえ居れば伴せ掴めそう
お前もか促成栽培コチヨウラン

高知県 中内朱坊

焼酎の湯割にせよとインシュリン

出荷する葱に三時を起こされる
夢の又夢で終った宝くじ

高知県 曾我部 裕

やれば出来るものと悟る妻の留守
おしずかに出来ないものか猫の恋
だとしても少し待たせは過ぎないか

米子市 光井玲子

みかんころころ団らんの仲間です
咲いてからあなたにあげるシクラメン
身内から逃がれて何故かVサイン

米子市 茂理高代

鳩笛を今は戦死の兄に吹く
木洩れ陽の好きな椿で控え目で
心まで盗んで咲いた冬ぼたん

米子市 川上より子

年を得て母の指紋の帯なじむ
愛しむ明日は身内となる蕾
手応えのない樹を揺する祈りかな

弘前市 斉藤 荔

花氷瘦せても祝辞なお続き
カボチャ煮る匂いに戦中まだ残り
ポーナスは税額だけを言うておく

弘前市 真喜内 實

過ちを秋に許したりんごの樹

神様に添え寝お願いして眠る
初詣で提灯好きな顔ばかり

岡山市 行吉 照路

妻乗せてセールス楽しき余生なり

助手席で老眼妻は地図拡げ

夕暮れにセールス手帳は白であり

岡山市 花田 たけ志

自分史もつまりは体よい自画自賛

小皺から見れば不らちな厚化粧

この頃は渡る世間に鬼だらけ

静岡市 渥美 弧秀

檜山の前売券を予約する

耳よりなニュースにプラン変えてみる

米寿の師囲む仲間の温い顔

静岡市 永倉 僕川

寝た切りのくらし仏の顔で居る

さりげないお世辞に痛い棘がある

サンマ焼く煙素直な換気扇

岡山市 直原 七面山

路郎忌へ雲を見ず

捨て猫に慕われて

娘を抱いて月を愛で

岡山市 矢内 寿恵子

ポランティア母と呼ばれている一日

黒髪に賭けた青春風化する

迷うもの両手に余る風の辻

豊中市 上田 登志実

日本も多民族国となる気配

筋書にのせられ踊っただけのこと

老夫婦しあわせねと手を握る

豊中市 一瀬 福一

淡雪の恋なら私も身に覚え

相槌をうったずるさは見逃せぬ

緊迫に雑兵ばかり来る皆

豊中市 辻川 慶子

初鏡今年の顔の眉をひく

箸袋ひと味違ふ旅の酒(有馬温泉)

羽根ぶとん軽さに夢が消えてゆく

鳥取県 林 露杖

一人旅二つ三つとワンカップ

夫唱婦随妻もヘルペス遂に病み

体操を欠かさず老いに立ち向う

鳥取県 さえき やえ

正月だ下駄の歯のよなブリを買へう

恋をした紙人形が炎えている

病気癒えタクアンをかむ泪かな

鳥根県 藤原 鈴江

赤い靴履いたペダルがはずみすぎ

一つ星私の心を捧げよう

外観はどうであらうと温い家

島根県 北川 民子

福寿草床に置かれて固くいる

涙腺がゆるくなつたかほととぎす

さりげなく白い山茶花燃えている

茨木市 井上 森生

飲む友と夢は秘湯と島めぐり

相性の謎をそのままフルムーン

旅好きの酒とグルメの血が騒ぐ

茨木市 堀 良江

猫も老い叱ることが減りました

手鏡に女ひとりが棲みついで

長台詞シェークスピアと年の暮

姫路市 中塚 遊峰

六十路なお見はてぬ夢を追いつづけ

怪我で知る十指それぞれ役目持ち

太陽の恵みを知らぬ水中花

姫路市 釣 遊光

傾いた心へ鈴がなりやまぬ

今年こそ夢を形に俺が新春

遠慮かと急かされ辛い猫舌で

岡山県 井上 柳五郎

叩きつつ渡る男へ長い橋

あすへまだ生きる欲もち寝たつきり

岡山県 荻野 鮫虎狼

新社長スマイルだけは認められ

ゴキブリに妻存在を認められ

大阪市 渡部 さと美

帰省子のゆけば人なかつるし柿

中年の衿を立てても冬の風

大阪市 寺井 東雲

新年を迎え気力を奮いたい

安らかな顔がコタツを囲んでる

米子市 金山 夕子

図書館に行けば火種が強くなる

叩いたらバケツの底が抜けちやつた

竹原市 岩本 笑子

内証話の好きな少女の長い髪

チクタクチクタク時計はきつと食いしんぼう

高知市 北川 竹萌

愛土より抜く大根の白い肌

何一つ買わず正月やつてくる

大阪市 宮下 とし

七人の敵と別れてうまい酒

立ち呑みの常連はよし泣き上戸

河内長野市 植村 崑代

門構えの立派にもローンついてあり

お経読む母のリズムは母のもの

和歌山県 新谷 忠昭

ノータイの暮しで長生きできるよう

フルムーン名刺に来てまた出合い

自選集

八木千代

イヤリングはずして帰るかずら橋
寒月が乗ったブランコ動かない

金井文秋

美しい朝よいのちをありがと
まいにちが初日で木戸を開けている
花束のその後を知っておりですか
額縁は外すわたしを飾るとき

トロイメライわたしの芝居小屋も幕

小出智子

お医者にも言い分がある葉づけ
歯並びがきれい入歯になってから
雑誌休刊人のところは飽きやすい
老人に遅くしてほし世の流れ
一病息災それならいいじゃないですか

尼緑之助

住みやすい町にしているたこ焼屋
前の人が帽子を脱いでくださらぬ
遠い日を思い出すのが癖になり
土曜日の子供の声が弾んでいる
待ち針の数をかぞえて冬籠り

月原宵明

遂に雪 律義な客のある寒さ
相続税ゼロ心配のない遺産
又一本必要悪の名の許に
どの国も政には左右あるマグマ
核廃よパフォーマンズの舞台裏

藤村メ女

湯豆腐でぬくめる親と子の絆
いずれ死ぬ事など言わず独り酒
止り木の自問自答は酔っている

飄々と雲水の行く師走風

書初めに真心こめた和の一字

チャリティーに八十路の姉と編む毛糸

書初めに日日好日と母の筆

福笹に大黒おたふく笑みたまう

正本水客

落ち着きのある緑が私を旅にする

瀬の音が旅の雨あし白くする

にび色のひと遠ざかる旅の闇

いち日いち日を旅の終りと思えとか

かげろうの果敢なくも群がり群がって

兎島与呂志

雪だるますこしくすんで雨になる

走り書しとく夫婦の鍵を持つ

終止符の噂の罨を知る女

余命あり足の痛みを持つ夫婦

下書きの嘘とも言えぬ行を詰め

黒川紫香

早春へ男一匹欠伸する

昆陽池の鳥爆音に馴れている

端数だけもろて節句の豆噛めぬ

自販機があつて煙草屋味気ない

天女かな席を譲って呉れました

市川鈴魚

漬物石ほどほどお人よしの父

矢面に立つと身内が怖くなる

自画自賛小さな石をけつてみる

爪かんで少女の丸い茹で玉子

軽い戯画で女がまたぐ水溜り

工藤甲吉

アメリカの日本いじめはヒスめいて

土一升金一升は嘘でなし

万歩計路傍の石と友になる

大っぴらに出来なくなつた煙草の輪

ほんとうのりんごの味は丸かじり

本田恵二朗

備忘録胸の小箱で生き続け

左肩いからず癖も亡父ゆずり

ゴルフ靴履くと十年若返り

天下泰平自称一流が勢揃い

台所嫁の鼻唄洩れこぼれ

大矢十郎

気配りのたびに財布の口開く

灯を消して寝ても明るい心の灯

嫁の爪洗濯板を何と見る

思う事叶い物腰柔らかい
やりくりをクリヤして聞く除夜の鐘

野村太茂津

甘い蜜柑と檸檬の調和考える

自己顕示強い檸檬の香が染みる

気位が高く調和難しい

頭越しに手を差しのべる瘦せている

南無三宝なめられていた頭越し

長野文庫

有難いことと父親ただ無言

出不精な友へ誘いの口を出し

あやまちを許す兄弟らしくなし

あきんどの笑みがこぼれるように出る

やわらかく言うて言い分通す気か

山内静水

今でこそそと口ぐせだった叔父

ひよんな気にされそう瞳に見つめられ

このへんでストップ勝手になさいませ

宿の傘この歳をよりそわせ

逆縁をしみじみ二人で聴くみ法

藤井明朗

新年のプランへやる気こころ満つ

ジョギングもお休みにする雪の道
風邪ひいてわが身大事にするも歳
里帰り素顔を見せて眠くなる

円高が少しうるおす暖房費

水粉千翁

清水の小径素顔の音で踏み

北山へお色直しの金閣寺

南天の柱孤高の夕佳亭

金色のこぼれ陽に映ゆ松の青

見真を仰ぎひれ伏す本願寺

米澤暁明

車いす夜が明けきって初もうで

東京の地価なら我が家いくらかな

初雪が雪見障子を上げさせる

見てくれと言わぬ嵯峨路へ心向く

路地裏にもう職人の音がない

橘高薫風

さんふらわあ号へ洋上初日の出

初空は広し石垣だけの城(原城趾)

うたせ湯に印結ばねど結跏趺坐

木山遠二氏へ

卒寿よく猫と心が通じ合い

同人吟

秀句鑑賞

—前月号から—

水粉千翁

落ちついた心へ石の貌が見え

錦織 文子

激動のまつただ中から解放されたときの心の状態を何のたらいもなく極めて端的にこのように表現したのだと思いますが、端的にしては「石の貌」という着想はたしかに前衛的です。しかしこの句はそれを着実な表現として鮮烈にその時の感情を言い得て至妙です。振り向いても振り向いても陽が落ちる

藤原 鈴江

実に川柳の究極に触れたうまい作品だと思いました。たまたまかけの表現から、陽が落ちるの座五が生きています。

落日に向き合った人間の心情は、それが如何なるときであろうとも切なるものがあると思えます。その感情がこのようにひと呼吸によつて言い表わされていると思えます。

雑草の耳に流れる川がある

澤田 千春

実にうまい川柳かなと脱帽しました。特に座五の「川がある」が句を引き締めておりまます。踏みじられ、見向きもされない雑草にしてはじめてかすかな音の所在を知り尽くしているのでしょうか。それは人間です。昇る陽にためらう事の無いように

林 荒介

川柳の第一の創作条件である感情の表現がこのようにして言い尽くされています。

晩闇を破る旭日に相対した時、人はその色に驚きます。その円熟さに鞭打たれます。そして昇天の勢いに圧せられます。そしてその心に自らを置きかえるのです。壮大です。なんやけど豆もするめもかめまする

藤田 頂留子

川柳におけるユーモアの条件とその位置はよくわかり切っています。最近の論調にも忘れ去られようとするかの如くユーモア作品の減少傾向に警鐘を打っていることもこれ又よく理解されます。しかしユーモアを説明することを忘れて笑いを強行しようとするユーモアのあることを考えることも大切なことだと思えます。時代の流れの中にユーモアも洗練されなければならぬことを知ることも大切だと思えます。ただ笑う。笑わせるユーモアを私は否定します。むしろ笑わせなくてもよいユーモア作品を私は求めます。

この句は何の変哲もない十七文字の含蓄あるユーモア作品だと私は思います。出だしの「なんやけど」という関西弁がこの句を強烈なものにしていると思えます。そしてそれが

謂うならばユーモアのすべてであると思うところに川柳としての価値観があるように思えます。

冬の蝶八ツ手の花にひとり言

山本 規不風

冬の蝶を作者は仮想としたのか、幻想としたのかは別として、川柳界にもよくこの蝶が現われる。その蝶が八ツ手の花に語りかけているというのです。それが仮想であれ、幻想であろうとそれはさておいて冬咲く白いこの花は、花仲間でも実に珍しい形態であります。手を広げたような大きな葉と白い小粒の花の集団と、それに冬の蝶のひとりごとという情景にはドラマがあるようです。

このような川柳もあってよいと思えます。

みんなが笑う古い時計が動いている

稲葉 冬葉

みんなが笑っている中でこの作者の目は何のかかわりもない古い時計に向つてその動いている状態を忘れないでいるということですが、この句はむしろこの笑いがこの古い時計にかかわりがあると見た方がよいのかも知れません。それは古い時計への軽蔑ではなくて尊敬でありましよう。動いている。がよろしいと思えました。

ふとん干す人にまつわる赤とんぼ

春城 年代

俳句ではありません。人にまつわる「が」そう言っております。ワンカットの中に赤とんぼというもう一人の人物が居ります。

川柳の群像

森田一一一

東野大八

「私は『新生』創刊号に於いて、無の中か

らは決して新らしきものの出現は見られない。一つのが出現する迄には幾多の人間の魂が或いは叫び、或いは喘ぎつつもつれ合っていることを忘れてはならない」と書いた。(中略)

今日経済問題における唯物史観が勢力を為しているのに徴しても、歴史は如何に重要視すべきであるかは明白な事実である。――が此処で忘れてはならないのは謂う処の歴史はすべて過去である。私達はこの過去を踏み台として現在から未来を築かなければならないのである。ここにおいてたった一つ革命というものが残されている。歴史を伝統を、そのまま継承するに耐えられない人間は、どうしてもこの革命に行くより外にはない」(『新生』

6号 大12・11森田一一一)

大正十年ごろから昭和十年ごろにかけ、川柳界を駆けぬけていった革新運動の光芒は、新興川柳の名において、一閃に過ぎなかつたが、その量感と迫力において、永久に川柳史上から忘却することはできない。

この輝やかしい新興川柳運動の旗手は森田一一一であった。彼が個人誌として名古屋在住の折に発刊した「新生」(大11・6)をもつてこう矢とする。田中五呂八が新興運動の川柳革新を唱えて発刊した「氷原」(大12・2)においても、正面切つて新興川柳の呼称を用いたのは、同誌第14号(大14・4)誌上における△新興川柳の序曲―明日の新作家に與ふ▽からである。「新生」の発刊の頃、大阪からは

川上日車、木村半文銭の「小康」が出現し、広島古屋夢村も主宰誌「千里十里」を「影像」と改題して新興川柳運動に呼応した。このほか「底」「影」「ほのほ」「千舟」「おほとり」「くろ土」各吟社がりく続と姿を現わしている。また「私は革新川柳家なり」と大正14年3月井上剣花坊も法政大学の川柳講演で堂々と宣言している。

だが、革新的川柳人は必ずしも新興川柳の旗の下に結集したわけではない。その両極は五呂八対一一一の生命主義と社会主義の激突である。「川柳人」182号(昭2・12)誌上において喜多一一一(鶴彬)は「僕らは何を為すべきや」の論題で次のように述べている。

「最近の新興川柳界は明らかな二つの傾向に分裂した。田中五呂八氏の主張する生命主義派、森田一一一氏が唱導する「社会主義派」がそれである。(中略)森田氏が川柳は芸術である前に社会批評でなければならない」とするのに対し田中氏は「芸術は何等の目的を含んではならない。芸術は芸術そのものを究極的目的とす。芸術は自我生命の率直なる表現であらばいい」とむくいる。そこに両者の思想裡の「社会意識」に天地の差があった」

昭和2年プロレタリア論争は、中央のマル

クス主義文学論争と雁行して続いている。

「五呂八、一二論争をきっかけにして新興川柳各誌が一斉にこの論争に加った。五呂八の陣営に半文銭、日車、夢村がつき、一二の陣営に鶴彬がつく。新興川柳派の分極です」
〔雪と炎のうた〕坂本幸四郎著

この両派の懐しいばかりの大論戦は「水原」
「川柳人」「影像」等の誌面狭しとばかりの華々しさであった。

一二は徳田秋声の許で厄介になったことがある。大正13年頃の秋声の随筆（文芸春秋）によると「郷里の金沢から来たとき私の処にもちつと居たことがあるが、その頃の投書家では出色の才子であった。もちろん今も才子である。悪魔主義の芸術家で作品も沢山あるけれど別に発表しようともしない」

新興川柳詩集（大14・4）に一二は序文を書いている。その中に、ある酒席で秋声に色紙を書いて貰ったら肯定は否定によって深められるVと書かれており、その文字で一種の魂の開眼をみたという風に書いている。いわばそれは論敵五呂八の生命主義への批判につながるとみただけであらう。

森田一二は明治25年10月9日金沢生れ。別号森田森の家、山村浩、生家は米問屋だが生

涯一國鉄職員として過した。学歴や家族的環境については不詳。少年期から文学に憧れ、いろんな作家との接触を持つとして、その一人に徳田秋声がいたことになる。この秋声が「悪魔主義の芸術家」とときに記した個処等から、狂気の天才といわれた島田清次郎や、その仲間生田長江らとも交友をもったといわれていることなどから、多分にニヒルな下層庶民救済の思想を彼等からうけつぎ、それがプロレ運動の闘士然たる川柳作家をつくりあげたと想像される。

「私が今日くど過ぎるほど無産派川柳家に對して言を構えるのは、敢て彼等の作家的存在理由までも否定しようとするのではない。それは今まで発表した抄論を読んでもらって判ることだと思ふ。殊に森田一二氏の苦悶など自分では最も理解している一人だと思つて

いる。然し同君等の理論が文芸の範圍を飛び越え、純理的な階級闘争や、実行のマルキシズムに走り（その点で森田君の立場は文壇的にみても一番急進的な左翼作家に数えられるであらう）然も、吾々の新興川柳を頭からやつつけようとする態度には、勢い引込んでいられないことになる」（「水原」26号巻頭論文付記・田中五呂八）

五呂八は一二と面接したことはない。しかしプロレ論争を実際面で顔つき合せて演じた相手に小林多喜二がいる。その多喜二が「戦旗」に発表した「一九二八年三月十五日」

は昭和3年3月15日の特高大検査における残酷な拷問の記録だが、五呂八は根が小樽新聞記者上りだけに、官憲の暴戻な弾圧ぶりには極めて敏感で、「水原」誌上では一切政治的なものにふれていない。昭和6年の「水原」休刊は、その当局の圧力に畏怖した形だ。昭和12年2月五呂八は43歳の若さで病没し、「水原」も翌年廃刊する。新興川柳の終焉である。

○朝顔のつる鉄窓へ伸びてやれ 一二
○新らしい花がロシアに咲き乱れ 一二
これらは昭和4年頃の作で、一二の最もエキサイトした頃のものだ。だが昭和の軍国主義はやがて左翼の一切の現象を根こそぎ払拭し去ってしまう。五呂八を失い抱えるべき柳誌のすべてを失った一二の、戦争後の動静はすべて空白のまま昭和54年9月11日老衰のため金沢で死去した。享年八十七歳。臨終の句

○冷たさは末期の水に尽きにけり 一二
参考文献・五呂八著「新興川柳論」「川柳人」「影像」合本ほか

★次回は「木下愛日」

誹風柳多留廿六篇研究 (三十四丁)

鈴木 黄・石田晋一・南 得二
小野真孝・本多正範・石田成佳
大屋六郎・八木敬一・多田 光

故岡田 甫

581 鉢巻にあやまって居る鯉壳

鈴木 眼にハ青葉山ほととぎす、とばかりに
鯉の刺身としゃれ込んだが、中毒をおこして
やたらと桜の皮をなめたが、いっこうに劇し
い頭痛はなおらない。鉢巻をまいてうなつて
いる。鯉を売った魚屋は鉢巻氏に平身低頭し
て謝罪せずばなるまい。

あす来たらぶてと桜の皮をなめ 五25

多田 贊。

582 納豆を春まてのはす泉岳寺

鈴木 寺の年礼には納豆を配った所もあり、

夏から拵えて、暮に曲物に入れ、年玉の準備
をするのだが、泉岳寺では義士の討入りが暮
にあつたので多忙をきわめ、その為年玉の準
備をするどころの騒ぎでない。従つて、主題
句のように年礼は翌年の春にのばしたろうと
いうところ。

年玉を寺は夏から捏ねまはし 拾一15

八木 「年礼」とあるが、せいほにも使つた
という。本句、せいほを春(正月)までのば
したと考えている。

多田 贊。

583 心中ウの前夜男のひざがぬれ

鈴木 廓内での心中事件は多かつたと思われ
る。虚無的な男女が最後のト晩をこの世の
名残りとはかりに抱き合うのだから、膝まで
びっしより濡れるのも当然であろう。
南 「男のひざがぬれ」の礎の解、どうも、
汗かバレによめる。本句は、女が泣いたので
あろう。膝にうつぶして。
八木 同。涙。
多田 同。

584 穴ばたの腰を卒塔婆へかける也

鈴木 「卒塔婆小町」を詠んだ句。小野小町
は平安前期の絶世の美女にして、すぐれた女

流歌人でもあったが、年老いて関寺の附近で乞食をしていたと伝えられている。

墓穴のかたわらにある卒塔婆に腰をかけている哀れな年老いた小町の姿を詠んだもの。

南||「穴端の腰」は所謂墓穴に入りかけた腰で、つまり死期近い高齢者の腰の謂ではなからうか。

老齡の小町が、場所は墓場のまさしく墓穴に半分入れた腰を、卒塔婆にかけたとの句意としますが。

多田||南説贊。

585 顔を見に四匁五分買て吸ひ

鈴木||『風俗志』の註には「煙草屋の看板娘の顔か」となっている。四匁五分は煙草の重さであらう。

この句から受ける感じは、「向う横丁の煙草屋の可愛い、看板娘……」の流行歌を想い出させる。

南||四匁五分わからず。

美しひ顔で四匁五分かけ
という類句もあるが。

八木||「四匁五分」は、「五匁星」があるのに、四匁五分と五分インチキをして煙草をはかるのであらう。そして客も半分はそれを承

知しながら、顔を見たさに量目不足の煙草を買って吸うのであらう。

多田||「美しひ顔で四匁五分かけ(一〇四二)

——雨譚註 たはこや——
とあるのと同類句か。評判の娘か、女房かであらう。

586 畜生にやおとりましたと乳を貰い

鈴木||哀れな乳貰いの句である。本句の場合は、妻に逃げられたのである。畜生よりも劣っていると逃げた女房をのしっている亭主が哀れな姿で乳貰いをしているところ。

石田成||贊。

女房に去られましたと抱歩行 九八四

八木||「畜生にやおとりました」という言い方は、乳呑み子を置き去りにして若い男と駆け落ちしたケースのように思う。

多田||贊。

587 むぐらもち時く／＼上へふみはつし

鈴木||これだけの句。もぐらは時々は地上にその姿を見せるが、江戸時代の人々はそれを「ふみはずした」と理解したのであらう。下へ「ふみはずす」のが一般だが、モグラは上へ「ふみはずす」訳となる面白さ。

南||上へ「ふみはずした」と理解したのではなく、川柳子独特の穿ちの表現であらう。

むぐらもち一寸上ハ地ごくなり 五六一五

八木||南氏のおつしやるように、趣向の句である。
多田||贊。

588 おまんまのおかつ定紋割て出し

鈴木||吉原では、箸箱・枕その他器具に男の定紋を付けて、男の気持を捉える風習がありその数で菓子や食事のおかずを出し合っていた。これを定紋割という。従って主題句のように定紋を付けたものを多数持っている女郎は一種のおろけ質として数多く銭を出さなければならぬ、ということである。

南||これは、箆筒に付けられた定紋かと思えます。傾城の箆筒に衣類が無く変わりに色々の食物や、時には炭や履物が入っているとの句もあるが、首題句の句意は、傾城の食事の御菜は箆筒の定紋を二つに割って出すとの句と思えます。

多田||贊。

『俳諧あづまからげ』 (下)

——上方句と江戸万句合の接点——

阿 達 義 雄

(柳多留五・7)

「おん出されました」と亭主抱いて来る

(柳多留七・26)

前に、湖月点の前句題として、「わけもないことばかりいわんす」という話体の前句題が出され、これに対する附句の中に、全部話体となった句の、

大胆と知って口説くが憎いかへ

お貌かたちよりお前の嘘が美しい

などが生まれ、その他の前句に附けられた句にも、

どふすればそしてお前の気に入るへ

「私わがの」といはれぬ櫛の有りどころ

などのあったのは、句の中に会話を写し、世話に砕く手段の一つとして留意すべきことであり、後の川柳点には、この手法が成長して次のようになった。

「又寄よって来きな」と出しなに一つやき

う。

次に夫婦を詠んだ句を二、三附記してみよう。

上戸でも下戸の女房を持ちたがり

——前句「心がけりくく」

大名も及ばぬ旅の夫婦づれ

——前句「こころよい事くく」

おもふ程腹の立てられぬ差し向かひ

——前句「ゆるしこそすれく」

次は子に嫁を貰ってやった後家の寂寥感を、嫁取よめとりってあじに淋さびしき後家の間

——前句「見ぬふりをするく」

(三)

湖月撰『あづまからげ』は、湖月が宝暦四年秋以来選評した万句合の勝句の中から、その前句附、冠句を抜萃して一書として刊行したものであつて、その前句題の傾向や句風から見ると、川柳点に極めて近く、その中には川柳点と並べてみても殆んど遜色のない句さえ見られる。

湖月点に於て、特に男女の愛慾方面を題材としたものが目立ってきたのは、今迄の作意的・観念的・外面的なものから、現実の人間の情意的方面に興味の中心が移ってきたことを語るものである。

この様に現実面に力点が置かれる反面、附句が前句題に巧みに附くことに意を用いたためか、その「笑い」も単なる滑稽に止まらず、対象を傍観的に、アイロニカルに眺めるようになって来てはいるが、未だ人の意表を衝く奇警な物の見方や、一捻り捻つたような趣向は少なく、内容から言つても繊細な穿ち、軽妙な洒落という所まで行かず、何となく鈍角的で、感情の線の太さが感じられる。

『あづまからげ』の中には上方句から採られた句の多いことは既に述べた処であるが、そ

の代表的な原句と、その出所を示してみると左のようである。

〔上方句に見える原句とその出所〕

○親は売り他人ハ買ふて可愛がる

〔出所〕『俳諧神楽歌(乾峰点)』

前句「おもへばうき世ア、うき世也」

●心中と身請とに明く二夕局

〔出所〕『有馬薬師堂御玉前奉納一万句集』

前句「うき世じや〜」

○親は売り他人は買ふて可愛がる

〔前句〕「ぜひもない事〜」

●心中と身請の座敷二夕間明

〔前句〕「うき世なりけり〜」

右の「親は売り他人は買ふて可愛がる」の句は、宝暦元年刊の京一陽堂和汐撰『俳諧からにしき』にも見えているから、この句は乾峰点又は和汐点のいずれかに由来するものであろう。

なお、湖月撰『あづまからげ』には、「片乳房にぎるが欲の出来はじめ」(前句は「ひっぱられけり」とあるが、この句の由来を調べてみると、初めは享保十四年、雲鼓撰『銀要』に見える――

片乳房にぎるが欲のはつ霞

〔前句〕「これから〜」

(京都)	享保十四年	雲鼓点	「片乳房にぎる」
(堺)	延享四年	李坡点	「片乳房にぎる」
(兵庫)	宝暦初年	泉流点	「心中と」
(京都)	宝暦元年	和汐点	「親は売り」
(京都)	宝暦二年	乾峰点	「親は売り」

宝暦五年刊
江戸湖月撰
『俳諧あづまからげ』

上図のようである。

なお、「俳諧あづまからげ」が、江戸の他評万句合から取り込んだ句は、宝暦八年、菊丈評万句合の「死に行く身にもよけるはぬかり道」と、宝暦十二年

という句を初発とし、更に延享四年、瓦竹堂李坡「明石人丸大明神三万句集」の中に、

片乳房にぎるが欲の初桜

〔前句〕「ほんにほに〜」

とあったものが、江戸の湖月点において

片乳房にぎるが欲の出来はじめ

〔前句〕「ひっぱられけり」

右のように、上方にあっては「初霞」「初桜」等の自然的なものが、江戸の湖月点に於て、人事的な「欲の出来はじめ」に改変されていることが知られよう。

湖月撰『あづまからげ』には、前述の様に京の雲鼓点、堺の李坡点などからの影響が認められるだけでなく、京の乾峰撰『俳諧神楽歌』や兵庫の泉流撰『有馬薬師奉納一万句集』からも、その句を取り込んでいることは前述した如くであり、以上の湖月撰『あづまからげ』と上方句との関係を一括して図示してみると

十一月廿五日開キ、如露評万句合の「提灯が消えて座頭に手を引かれ」の二句だけであるが、これはただ今の管見の範囲内のことで、今夜の精査によって、なお幾つかの句が発見されることであろう。

〔注〕

- (1) 「あづまからげ」とは、着物の裾をからげて帯にはさむこと、「(広辞苑)」
- (2) 「提灯が消えて」の句は、「柳多留拾遺」十篇にも見られるが、宝暦十二年の如露評万句合に見える句が先である。
- (3) 他評万句合……川柳評万句合以外の万句合を、研究者は他評万句合と称している。例えば湖月評万句合、如露評万句合、菊丈評万句合などは他評万句合の例である。



黒川紫香選

広島市 流 奈美子

羽交締めされたい程にある自由
愛想のいらぬ自販機だから好き
それなりの夢を描いている六十路
まだ喧嘩できる夫婦で気が若い
気取ってるポーズが冷える冬の景

長岡京市 木 本 如 洲

旧街道むかし話を繰り返す
長生きの秘訣を笑いながら酌ぐ
あのときが初恋と知る夢二の絵
カラフルな肌着に替えて逢いにゆく
かぶと虫と森で少年飢えている

今治市 野 村 京 子

咲き切れず愛を知らない水中花
そして秋少女の恋はクリスタル
晩秋へ女バズルがまだ組めぬ
落日へひとり影が残される
雨の日の多弁なオウム嫌われる

熊本県 大 川 幸 子

中吉の相性きつとこの程度
書店から悟った顔でドアを出る
ひと味ちがうおいしい女になりたくて
値切ったらほんとに負けた露店商
かたくなに心閉ざすか冬の雨

浜田市 中 尾 まゆみ

トンネルひとつどんな未来があるのかな
寒風のなかを転がる赤い毬
初恋が浮かぶあたりよ花畑
隅っここの火鉢は冬の歌が好き
心なごますエクボだなんてにくい人

名古屋市 藤 井 高 子

独楽が止ってハッと気が付く独楽の彩
花道へほろほろ祝電舞うている
始点終点ふるさとを呼ぶ寄りどころ
モノクローの絵にあなたかき焼いも屋
落書きも貰えず石の堀冷える

米子市 小村 正しい子
簡単な事が旨く言えない水の味
身内には井戸の深さの話など

黙示録として私は風に逢う
喪があげて山茶花が散る今朝の霜

甘酒を飲んで一人で冬仕度

鳥取県 田村 きみ子

春の絵に花をいっぱい植えましよう

消しゴムで消したい過去は一つだけ

言い訳が過ぎると爪を噛んでみる

お喋りなツバメが春を告げにくる

娘のくれたセータなのに淋しくて

佐賀県 寺中 三枝子

足腰の弱りを夫気にしだす

中国針打って私も更年期

読み深い敵がドリンク下げてくる

淋しくて鸚鵡とジャンケンしています

富山市 舟渡 杏花

ごり押し椅子に残っていた軌み

たつぷりの時間があつて金が無い

笑い袋師走の風に千切られる

白旗を数えてやおら立ち上る

野次馬の目へ円高がまだ続く

熊本市 宇野 昭代

歌ひとつ覚えて新年会へ行く

金賞の絵だから感心して眺め

ワンテンポ後れる顔がにくめない

時化する海港無口の日がつづき

家事下手でメカに強いのが取り柄

鳥取県 土橋 はるお

十本の指平等に笑わせる

普段着で慰められて泣きました

ロボットの骨の始末をしてやろう

たばこ屋に禁煙パイポが売つてある

ライバルが俺の弁当まで覗く

熊本市 永田 俊子

古本屋めがねの奥から人をよむ

休館の戸にたしなまれてるお人よし

筋書きのない紙芝居かも知れぬ一生

炬燵近くにももの置きもの書きもの思い

太陽にも火消壺にも母はなり
大阪市 上田 柳影

フアスナーが開いていますとは言えず

掴みどり妻の小さな手に譲る

オクターブ下げると喧嘩にはならず

杖になるかも知れぬから鍛えとく

気忙しい気持ちは何時の師走にも

出雲市 金森 知恵子

旅ごころ無限にひろがる時刻表

肩肘を張って四角に生きた亡父

いっそ見る夢ならでつかいくじを買う

クジ運も似てウマの合う嫁姑

鳶の親トビの子産んだまでのこと

尼崎市 児玉歌子

食べ頃の牡蠣が話の腰を折る

古傷の深さに気付く通り雨

姑を越す気負いがあつた妻の椅子

助け舟出した片手が火傷する

欲出した分だけ男下げている

京都市 木村たけし

貫一とお宮が濡れた波がしら

決め球をもたぬ悲しい折かばん

年金を頼る暮しに四季がある

漬ものの味を覚えて嫁にゆく

鳥取市 小谷美つき

寝不足の王さま椅子に愚痴を言う

翹びすぎた天狗の下駄の歯がこぼれ

愛されて千人力の意を得たり

好きな男のほうへと白い足のばす

千体の羅漢の中に君がいた

久留米市 鶴久 百万両

美しのおんなは恋を知っていた

ふぐ鍋のお毒味僕が買ってでる

雪おんなの呪詛が怖くて眠られぬ

喪主となるときぐうたらはよい

つぎはぎの愛情ですが仲はよい

ミンク半額春の息吹きがもうそこに

岐阜市 渡辺杏村

気の早いうぐいすが来る梅の枝

猫柳春の気配をキャッチする

自主トレで鍛えています草野球

年金でプレゼントするランドセル

ひらがながよめてうれしい孫の顔

おでん喰うおんなに秋の風情など

ふくいくと春の鏡は微笑する

七面鳥丸焼きにしてクリスチャン

そもそも間違いい好きになったこと

青信号続いて走らねばならず

ともだちの輪に一枚の戯画まじる

招かざる客を見送る冬の雨

四十年夫婦茶碗へ迷うてる

雪椿スケッチの指冷えてくる

遮断機の横でついている赤い毬

和歌山市 森 茜

どいてどいて低く飛んでいく鳥

ひきずった靴が疲れを告げてくる

畳屋の犬がたたみで日向ほこ

みんないい顔して聞いている法話

無造作ななりでもみじを見に出かけ

またしてもしぐれて傘に入れて貰う

守口市 森川 まさお

生え抜きの家並がつづく觀光地
親しみを覚えた山に煙立つ

京都市 松川芳子

味噌汁をこよなく愛す夫の膳

大声で喋り小声で母返事

物干で意識してます朝寝坊

名優が揃い踏みして十二月

出雲市 金村青湖

蕎麦の輪に飽食のゴミ増えてゆく

募金箱今年もここで呼びかける

港町ここもさびれた造船所

ぼたん鍋囲み総理の里も雪

吹田市 井上照子

几帳面すぎて孤独な顔になる

道問えば信号三つまだ遙か

御伽嘶鬼はやさしい顔である

夜半に聞く母の寝息にする安堵

熊本県 高野宵草

価値観の違い我が子と遠くなる

ふくれたら昇るほかないアドバルーン

爛瓶が討死したら座が乱れ

広告のない新聞はさみしかろ

尼崎市 森安夢之助

東大へ勇氣を出して受けてみる

暇だから噂まいたり仕入れたり

肩書きが重くあれから瘦せだした

サービスはほめられないが味の店

静岡市 久保きぬ

中流の糸くずがつく暮しむき

約束の小指がうずく淡い恋

子の疑問解いて話せる視野を持ち

エリートが決意のボタンはめ忘れ

佐賀市 江口万亀子

七福神異性が一人もてること

年金をいただくたびに有難う

父上の切る沢庵は数珠つなぎ

親の顔見たくなるよなニユールック

羽曳野市 吉川寿美

小走りで師走の風とすれ違う

年賀状みな夫々の貌でくる

直線を歩いてきつい向い風

物忘れまとも眼鏡とかくれんぼ

藤井寺市 高田美代子

くたびれた靴を磨いてああ夫婦

鈍行でいいよと母の目が笑う

金のいる話になると寝る狸

美人なら画にもなろうに泣き女

静岡県 蘭田 猿 杏

川柳塔句が載ったよとポチに言う

達筆もすぎると暗号めいてくる

むしろ旗農民の筆殴り書き

イヤリング横に揺らしていやと言う

寝屋川市 宮崎 菜月

見渡せばみんなお金で買ったもの

仕事着はいつも万歳して干され

行儀よく並ぶボプラはまる裸

のど仏並べて仰ぐ奈良仏

尼崎市 鈴木 良征

樽酒にどっぷりつかる勝ちいくさ

守備範囲の広い男でよくもてる

内密にして下さいと札の束

姥ざくらエアロピクスで狂い咲く

唐津市 相葉 あき

楚々とした真珠一つの首飾り

貴婦人を飾る舞台のガラス玉

銀髪になって話題の多い人

按分して親の負担を軽くする

熊本市 北川 一進

悪知恵を覚えてからの金使い

コーヒーを一人楽しむラジオの音

管理職なればなったであるノルマ

雨だれの音も違った旅の宿

兵庫県 東浦 砥代

眼を閉じて母には詫びることばかり

迷い箸昨夜の嘘が重たくて

芸のない風は一直線に吹く

兵庫県 奥野 テル

側に来て座る好意が背に温い

自惚れて三面鏡と対話する

招き猫内緒話を聞いている

きれいな事言つて野望のふところ手

米子市 足立 由美子

釘が錆び内緒話が漏れはじめ

陽の当る場所でもまっ赤な嘘を聞く

少年のような少女が振りまわす

忘れたと素直に言えぬ反抗期

西宮市 松本 一郎

魂胆があるからお説ごもつとも

耳よりな話は皆んな知つていた

いいことがあつて信号赤もよし

ペン胼胝がだんだん小さくなる余生

熊本市 黒田 緑

折り返し点はとつくに過ぎていた

馬鹿なこととして笑いあう夫婦仲

安住の空間シーツの白の中

パーティーのあとのインスタントわびし

東子市 小山 悠泉

待ちぼうけ未練を風に嗤われる

騙されてやる気子の嘘聞いてやる

原点へ戻れと岐路へ天の声

庭師の目に表情石の目鼻立ち

尼崎市 尾宮 弘治

明日の和を信じて廻す洗濯機

漬け茄子の色は直伝母の彩
お歳暮の指示を病妻から受ける
洗濯機五人家族が睦まじく

熊本県 岩切康子

粒揃い競争心をかき立てる
同僚を見舞う夜空に星一つ
冗談が伝わらなくて慌て出し
淋しくて山越え親の墓参り

旭川市 朝倉大柏

帰れないふるさとだから恋しがり
ふるさとの落葉静かに話好き
児の画布にぐんぐん伸びる豆の蔓
妥協せぬ会議見下ろしている時計

貝塚市 池田寿美子

結び目がやっとはどけた眩しい日
いい年が明けそうな宵第九聞く
明日の枝揺さぶってまで落葉掃く

爪木崎の想い出

潮騒に土手の水仙春を呼ぶ

尼崎市 的場十四郎

失恋を伝言板で知る無情
年金の財布が軽い年の暮れ
年末の忙しさ知らぬ猫の背
よく喋るガイドとゆれる能登の旅

吹田市 栗谷春子

封筒に貼りついている春の蝶

どうすればお気に入るやら夕しぐれ
孫の受験はいと軽やかに鈴鳴らす
足もとに流れがこぬと動けない

守口市 結城君子

忠魂碑の紅葉へ足をとめており
おあいそを済ませて月の道へ出る
長崎弁聞かぬチャンポン旨くなし
インド人のカレー屋へ行く雨の街

岡山県 富坂志重

芒野に何処か人恋う猫の声
落葉掃きお茶にしようと友の声
初霜に赤いホッペの男の子
思う様行かぬドラマを追い続け

西宮市 秋元てる

気のきいた土産はないが故郷の友
気難しい夫が猫の砂取りに
はんなりと京の言葉に化かされる
書き損じ賀状をくじが慰める

川西市 野村静雄

松茸は貰うものだという身分
運勢を逆に歩いて来た不運
雨ぼつりぼつり男を引き止める
相応の顔にうつっている鏡

和歌山市 山口三千子

ウインドに惹かれて踏んだ自動ドア
親の引くレールへすんなり子は乗らず

子の所へ行けば身分は居候
驚きは思わぬ人の手の温み

静岡市 安本孝平

絵の中ではしゃぐ妻の独り酒
主張した後で空虚な風にあう
手不足の声が大きい大晦日
木枯しに小銭ささやく服の中

奈良県 横井都姫子

共働き妻は急いでばかりいる
裏話聞きたくないのに聞かされる
再会へつるべ落しの陽が炎える
鉢植えが占領冬のうさぎ小屋

尼崎市 山田保蔵

安売日卵を買いに行かされる
京ことばきれいな人が越してくる
婆さんがチラシを見ては無駄を買う
凡人がだいそれたこと考える

鳥取県 太田幸枝

連れ糸 鳩派の母にほぐされる
還暦やそれから寡婦の花が咲き
気安めと思えどめくる伊勢ごよみ
心のすきに燃える火種と初恋と

尼崎市 木下義嗣

洛西の墓にもとうとう雪が降り
寒菊に思いを残し落葉焼く
見送って別れる言葉口に出ず

社長室和の掛軸の人情味

十和田市 阿部進

のんびりと茶漬食べてる粗大ゴミ
駅弁を蓋から食べて年齢がばれ
定年を労わる妻の薄化粧
お歳暮の地酒を下戸がもて余し

鳥取県 乾隆風

制服に決めると丸坊主にされる
ふたありにほんのり豆電球ともる
善人の句読点には素直です
ぼたん雪女の微熱まだつづく

和歌山市 田中輝子

ゆっくりと飲みたいコーヒーぬるすぎる
筆に頼るしかない誤解抱いている
日記にも書けない愛が私にも

尼崎市 吉永伊三郎

もうバック出来ない道を歩いている
寄り添うてくれる女あり松葉杖
加減してるとも知らずにお人好し
婿どのに父の期待が重すぎる
山男一番乗りが狼煙あげ

岡山県 千原理恵

今風に遺言状を書いておく
ふんわりとあなたまかせのアドバルン
吉報へ薄さ気になるのし袋

徳島市 宮武まつ女

ぬか漬の中へ投げ込む妻のぐち

八尾市 鷺見章

残業に葉袋とのど飴と

料金を気にし田舎へ長電話
縄とびがとても自慢の孫が居る
声だけが二階へ走る夕餉時

神官の一家総出の落葉掃き

マイホーム妻もバイトで忙しい
シグナル点滅かなしい事故を聞く地蔵
俵せが続き不安もつきまとう

親離れ子離れ出来ず長電話

鳥取県 西川和子

釣書には学歴だけが書いてある

娘が一人増えて春から姑になる

それからは二人で舟を漕いでいる

伊丹市 小熊江美

カメラにはポーズをとってくれる猿

二度三度誘われてみて気も動く

母親の事を持ち出すお説教

寝屋川市 内本さかえ

転勤の支度が重い左遷の地

寝返りを打って孤独な風に会い

足早に横目で通る社会鍋

滋賀県 安田志津

不断桜紅葉の中凜と咲き

神さまに背をむけたまま年もゆく

一ランク下げててくれる孫と住む

京都市 森川春子

列車くる窓すいていて安心し

色ぬって旅のスケッチ生きてくる

白足袋を脱げば体が軽くなり

静岡市 沢田きん

不束で来てしたたかの強い嫁
宅建のチラシ適わぬ夢を見る
行先は見えてて遠い田舎道

静岡市 諏訪志げ

運命の重さに耐えてる顔の皺

初耳にして受け流す風の向き

湯加減もよく風呂からの秋の月

十三日の金曜日が大不安だ
なつかしい大阪(二句)

広島県 森川抜智

キタミナミ

いつが夜更けでいつ夜明け

槽なき道頓堀は寂しかり

高槻市 津田スミ子

内職にあきてパートのペダル踏む

筆まめもワープロでくる世のうつり
用済みと悟る人形の目に出合う(加太)

明壁敏之

ポケットに小銭ばかりがはばきかし
電柱が消えて冷たい街になり

孫が来て私の予定狂わせる

熊本市 鶴田謹爾

ボナスの圏外に居てわれ久し

指ふれただけでときめくうぶな恋
無資源にまだ気がつかぬ使い捨て

のんびりと暮し苺ジャムが好き
陽だまりの陰で見守る親でいる

岡山県 福原悦子

エプロンを結んで妻の座を守る

合わす手に風も師走の一心寺
顔見世に酔うて冷たい街に出る

京都市 小林英子

クリスマスケーキ買ってる若いパパ

兵器庫 森脇和子

無器用で甘い言葉に行きづまる
反れたがる靴を磨いて送り出す

餅を焼く夫婦へ孫の初便り

寝屋川市 井上すみれ

喧騒を抜けて月しみじみと美しき

綴り方父は優しく母怖い

延着がやっときたバス回送で

坂かない仔犬四匹と寝ています
冬の蚊は殺せずそつと追払う

雨ざらしのてるてる坊主みじめだね

お隣を覗いて賽銭ほうり込む
病室の窓から鳩を手なずける

晩酌の追加に税がついてくる

大阪市 亀井円女

千社札斜めに貼って神様よ
裏道が好きで独りになりたがる

サングラス油断はしない眼で歩く

和の一字座敷に額が掛けてある

内緒事鍵の穴から洩れてくる

深海の魚になって暮したい

ストレスをせっせと溜める苦労性

二度の職終えて路傍の石となる

裏口で物を言います札の束

十二月に満期になるよう積みたてる

白菜を漬ける師走の忙中閑

赤いバラ一輪夫がくれました

パーマーをかけた私に気付かない

大阪狭山市 桜井莊次

尼崎市 中澤向西

枚方市 中山おさむ

小寺ギホウ

竹原市 古田比呂子

唐津市 菊地香代子

唐津市 菊地香代子

唐津市 菊地香代子

唐津市 菊地香代子

唐津市 菊地香代子

唐津市 菊地香代子

エンジンが止まると犬が目覚ます
母親を娘が見比べる参観日

岡山県 松本元江

張りついたように動かぬ冬の雲

孫二人いるから積木高く積み

きき耳を立てて聞いている春の音

島根県 今川三津江

あたたかい言葉を交す朝の駅

奥出雲ローカル線の早い冬

盆栽も一人前に冬ごもり

高槻市 芦田静江

小督塚秋はなやかに黄昏る

娘を出して月につぶやく一人言

金閣寺心預けて照らされる

尼崎市 佐藤美代子

なんとなくお人良しと信じてる

小正月袋小路からキネの音

芳じゆんな匂い噛み合うフルーツかご

青森県 永沢招人

木枯しが第九奏でる森を出る

スピード違反覚悟で走る歳の暮れ

債務者を避けても月は追って来る

静岡市 三浦つね

花束を両手に余る初舞台

愛情に甲乙はない紙おむつ

富士山の素顔の見える場所に住み

佐賀市 石田源吾

マイカーで安い卵を買いに行く

倅せはいいライバルに恵まれる

再婚の父を許せる娘に育ち

新発田市 上鈴木春枝

母として亡母の口癖真似ている

丁寧なことばで包みこむ本音

数えてる編み目へ無視の電話ベル

大阪市 吐田純子

仲人がほぐしかねてるもつれ糸

思い出がだんだん遠くなる故郷

帰省した息子と交わす酒の味

青森県 富士トキ

母居ます彼方に落ちる夕日見る

新築の屋根に皑々冬の月

腰も背も伸ばして籠にあやかろう

久留米市 中垣米之

書留です郵便さんは福の神

軒つたう氷雨の音のいと淋し

小姑の座に安住の野党サン

静岡市 杉山やす

耳掃除膝を枕に貸してやる

菊の花杖を頼りに立っている

とどめなく風に乗せられ散る落葉

豊中市 三宅つえ子

別居してうわさが先に走り出す

車椅子誰かが外に待っている
筆の立つ友を煽てて年賀状

和歌山市 田中みね

運命の出会いを境に火の女
とかなんとか言っても夫婦にある絆
今日の日を最後と決めて逢いに行く

呉市 蔵重成人

駐在も引き上げました過疎の村
食欲を起こしラーメン通り過ぎ
ネジ少しゆるんで居ます父の肩

鳥取県 山根八重

山茶花の紅は氷雨に叩かれる
路の臺春を迎えに顔を出す
おみくじを結んでふたり初詣で

藤井寺市 楠昭子

雑草も胸に抱かれる夢を見る
門構えだけでは見えぬ火の車
みの虫は枝落とされたとは知らず

藤井寺市 菊地繁男

行き違い伝言板が白けてる
ボケ封じせつせと青竹踏んでみる
コップ酒おでんのタコが大好きで

岡山県 清水悠貴女

限界をもう知りつくす足の裏
愛されて冬のいちごが赤く熟れ
梅ちらほら女の紅も早春譜

河内長野市 大西文次

小人の切符を子供離さない
内緒話知ってる壁を塗り替える
花が咲き出して慌てて水をやる

吹田市 西岡登

若者の太い腕から善意の血
好き好きとラストダンスで燃えている
墓口の銭を生かした楽しい日

唐津市 入江喜久夫

赤とんぼ露風は今も生きている
強精剤疲れがとれただけのこと
長生きをしてネと孫が電話する

新潟県 高野不二

失業手当貰うて働く気をなくし
粉骨砕心その割に出世せず
訳は知らないが大安の日にきめる

泉南市 板根流水

屋根の猫冬日をあびて欠伸する
丘に立ち自作自演の声あげる
日記帖買って内緒を書きつづる

富田林市 加藤ミツエ

押し花を季節の花で年賀状
のんびりと一人暮しの年の暮れ
すき鍋の中を割箸右左

静岡市 中川みつ

傘立は来た人みんな知っている

再会をせめて指切り欲しい人
子を叱るついでに姑も叱られる

岡山県 後安江山

大根の味噌汁うまし寒い朝
裏表こんがり焼いた餅の味
一日の反省湯舟で温める

唐津市 浜本治幸

屋台酒ママの古傷聞いてやる
口上手陰の部分が顔を出す
子の電話お母さんとは父を無視

大阪市 堀口欣一

灯の消えた故郷の町できくおけさ
健康な放屁一発年の春
いくなれば女ごころの惨酷さ

京都市 山脇正之

金閣寺拝観だけで日が暮れる
今の事今忘れてる老夫婦
遠慮なく大きな欠伸の出来る部屋

米子市 大田みさと

飾られたお菓子に蟻は寄りつかず
握り箸指のえくぼも必死です
夫婦箸なぜか私が先にちび

黒石市 相馬英三

鉛筆の芯が突然立ち止まり
消しゴムで消えない過去を持つ女
ストープもよいがこたつに味がある

女五人城崎の湯に気が揃い
横槍を入れて負担が重くなる
大胆に飾っておんな老いを消す

大阪府 今西静子

情ない自分を責めてなさけない
どう泳ぎ辿り着いても雑魚の域
ひとがよいだけではちよつと物足りぬ

倉敷市 田辺灸六

ゆっくりと苦もなく遍路のぼる坂
水炊きの鍋ですました昼の膳
ポランティアどの顔ぶれも元氣ある

和歌山県 森三枝子

懐に師走の風が通り抜け
嫁に来て姑の器にはまり込み
ストレスの積もった胸を誰が知る

鳥取県 木下芙葉

さらば地球別れと見れば美しき
異状無し言われたトタン不養生
降るような星よ姿を見せとくれ

摂津市 もちづき遊美

想い出をたどれば母の膝の上
軽い日も重い日もある朝の靴
習うより慣れて商売板につき

岡山県 後安ふさえ

蛍光灯取りかえるのも女です

愛媛県 西山えつ美

デパートを提げて女の満ちた顔
船長も本四架橋へただの人

山口県 高崎雀声

木に自由許され葉っぱ飛んでゆき
それなりの美が出来上がる美容室

誤字脱字あて字漢字にわからん字
一罰百戒その一罰に合う憂き目

愛媛県 石手武

法律の網を悪知恵潜り抜け
演壇のひとときわ光る話ぶり

大阪市 山北三三三

焼芋の値段に皮のもったいなさ
医者よりは信心せよと叔母が来る

親切な医師で見立ては今一つ
ほんのり熟れた林檎へ長い手が伸びる

鳥取県 乾喜与志

山茶花と日向ぼこして屠蘇を酌む
盛花添えて食卓を華やかに

羽曳野市 麻野幽玄

人生の一齣軍服着た青春
不養生主治医が先に逝き給う

吞ませたくない酒だけど切らされず
ふるさとを思い出させる茜雲

島根県 喜島ノブ

寒空に小さく青く尖る月
弾みすぎ毬はどこまで行つたやら

憧れの整形美人を夢にみる
忠告も耳に入らぬ乱れ髪

若づくり老眼鏡で老いが知れ
相性抜群今日も喧嘩になり候

お昼寝が得意肩こり知らぬ母
ポーナスの夢を銀行奪い去る

和歌山市 丸岩晏

ネクタイをゆるめ発想換えてみる
木枯しが泣く夜乳首が固くなる

手品の種が見えたから別れよう
目覚しが鳴っているよと起される

和歌山市 寺脇三倉

人気者下着の色を尋ねられ
そろばんも上手幹事の芸達者

落葉舞う終弘法の石畳
ちどり足終電だけは覚えてる

和泉市 中川楓

塩辛い料理女は怒ってる
妻の留守酒の肴はおいてある

奈良市 西川寿人

家売りませんかと失礼なピラ
水の音たしかに母は起きている

静岡市 浅子まつゑ

さわやかな結論を聞く大安日

大阪市 神保拓生

ネクタイにはつぴが似合う歳の市
自動ドア開きっぱなしの師走です

富田林市 大澤三四子

使われるうちが花よとこき使い
飾らない友の言葉がじんとくる

米子市 服部朗子

吊鏡へ一寸笑顔向けておく
カラフルな小物で飾る子の世界

佐賀市 古川一徳

しあわせは打込む仕事持っている
躓いてからは踏めない過疎の村

八尾市 椎尾公子

うなぎ焼く香のある先の舟下り
もの思い落葉を踏んで廻り道

泉佐野市 真崎浪速子

石鹼の匂う孫なり仁王立ち
豪雪禍くたくたですわ車中泊

鳥取県 西浦小鹿

慰めの言葉はいらぬ屋台酒
タンスには夫婦ゲンカの傷もある

静岡市 西村千代

妹から見れば頼りない兄の嫁
湯上りの電話乳房も聞いている

鳥取市 山田草人

力まずに今年は斜めに構えよう
一杯の寝酒が利いて外は雪

高石市 宮田純一

ここにこう置き替えてみても2DK
紅白へ家内が葱を刻む音

川西市 田中喜俊

故郷の地酒で友と夜を明かし
正月の行事をへらす老夫婦

豊中市 小林一夫

サヨナラの替わりに白い花もらう
人生ゲーム思えば怖い遊びなり

岡山县 牧野秀香

愛情に美事こたえて咲いた菊
愚痴こぼし帰る友の背秋の風

静岡市 滝花喜平

街角へ花束置いて事故現場
太陽の温み布団へたたみ込み

鳥取県 鈴木美ふみ子改め

コスモスが笑って送る戻り道
気掛りを一つ残して十二月

榎原市 西本保夫

放浪の旅に自由がありすぎる
言いたい事言わせてみたらとも思う

岸和田市 三輪通彦

古老の死また一人減る生き字引
即席が増えて包丁錆びてくる

和歌山県 田 中 隆 積

休息の上手下手が別れ道

友がいて師がいて勇氣湧いてくる

愛媛県 八 塚 三五島

旅は道づれ花の心は花が読む

ぐうたらポケツにあつた折れ煙草

田辺市 染 道 佳 明

しあわせの切符男がくれますか

よそ様が食べるメロンを買っている

島根県 菅 田 かつ子

今晚もまたつき合いか腹がたち

騙されなさるなと易者に騙される

大阪府 平 井 露 芳

生首のように並んだヘルメット

モデル撮影こつち向いてと未だ言えず

奈良市 井 上 大

ドラフトで未知数という人を買ひ

海を見て泣きそうになる孤児の顔

八戸市 島 田 昭 治

初孫の寢息大物らしく聞こえ

嘘つきはおそらく日記つけぬだろ

呉 市 岡 田 寿美礼

客帰り猫は何時もの場所かね

相撲好き陛下乗り出しご観覧

静岡市 片 平 静 代

負うた子に教えられてる赤信号

押入れの中にまだある捨て惜しみ

静岡市 大 石 た き

花束をかかえ先祖の墓詣り

約束をしてから後で後悔す

大阪市 島 路 太 郎

犬を飼う気になり野心捨てる気に

首振って路面電車が急ぐかな

大阪市 松 岡 久留美

落葉はく母の背に老いを見る

老夫婦炎ともえた過去もある

奈良市 米 田 恭 昌

赴任地で秋の夜長の一人酒

同窓会来なけりやよかつた孤独感

出雲市 高 橋 きよし

溜めてある落葉を回す師走風

老いてなおダブルベッドの温かさ

静岡市 青 柳 金 吾

近頃のやさしい妻に考える

異常なし病院を出て腹が空き

岡山県 土 居 ひでの

カエルコール残して帰らぬ人となり

許すより忘れてあげる思いやり

兵庫県 西 脇 富 美

とんびの輪じつと見守るアドバルン

青信号で渡っていても横車

岡山県 杉本 伊久栄

青森県 波 ただお

特売につられて無駄を買って来る
お年玉孫早々と予算立て

岡山県 伏見 すみれ

岡山県 池田 半仙

背なに陽をうけて豆むく菊日和
終点のない階段へ迷いこみ

岡山県 児玉 幸子

岡山県 平田 たけよ

紅葉に見事峯寺の秋の逝く
新聞のチラシへ師走せきたてる

唐津市 野田 旭恒

静岡市 丹羽 定次

降る雪を手に取り頬につけて見る
ながつ尻孫は二本もホーキ立て

静岡市 谷 紀代志

岡山県 江口 有一朗

新しい服に合わせて髪を変え
餅搗きを孫に見せたく日取りきめ

島根県 小田川 智重子

島根県 松本 聖子

躓いた膝っ子それから強くなり
押売りと妻のかけ合い聴いている

島根県 岩田 三和

米子市 新 正子

集会所あかるい壁で村おこし
餅を切る母の手つきの正確さ

和歌山市 根本 実

鳥取県 伊吹 富恵

風が押すから逢いにゆきます雪肩に
どちら見ても男が秤持っている

カサコソと熟女の肩に落葉舞う
勿体ないつかぬライターしまつとく

青森県 木村 喜峰

忘年会民謡唄って見直され
不況風凧も揚がらずお屠蘇飲む

奈良市 米田芳子

作業衣も鎮座まします博物館
古を御物に惚ぶガラス越し

今治市 渡邊伊津志

気弱さが茶碗の赤いのを好み
へソクリのあるばあちゃんをあわてない

大阪市 榊本落児

売店におばはん一人無人駅
埴輪の眼何か言いたいことがある

鳥取県 久野野草

歛洗いたまには赤い灯にも酔う
肩書に踏まれそれから夜叉になる

鳥取市 武田帆雀

怒り肩空気抵抗物とせず
メーカー希望価格とグルになっている

出雲市 久谷まこと

知恵の輪が親子の力あざ笑う
古い殻外した道を行く若さ

米子市 門脇晶子

夕ぐれて木の葉の裏を見てくらす
寒い風のつてはならぬ紙の舟

東大阪市 大平太一郎

水臭い世臭くない水買って飲む

嘘ついて目は嘘つけぬ人のよさ

流山市 神田治

妻だけは大事にしてる千鳥足
女房に飼ひ慣らされた塩加減

大和郡山市 渡部トキワ

月の末ラブレターほど待つ柳誌
探し物おりの猿にも似た姿

鳥取県 西村黙光

深酒を詩の心に叱られる
はずむ酒桃源郷へ特別車

鳥根県 加本義良

初孫のやつと覚えた握り箸
雪の日や本気に飲める友が欲し

豊中市 額田明吉

罫線に未練が残る乱高下
どもならん老いらくの旅高軒

大阪市 富岡温子

選挙戦意中の人を決めかねる
エアロピクス隣の足が細く見え

大阪市 新井朋子

ひさかかえ泣きたいような夜もある
みな他人そう考えて涙のむ

尼崎市 新井晶子

てんきんはどこにいくかもわからない
宿題はいやだいやだとやっている

尼崎市 新井晶子

◆ジュニアの部

(中二)

(小四)

水煙抄

秀句鑑賞

—前月号から

吉田笑女

陶枕夢見の悪い日が続く

田中好啓

頭寒足熱、熟睡出来る筈の陶枕をしながら
夢見の悪いのはきつとお疲れの溜り過ぎでは
ないでしょうか。気晴らしの旅行など如何で
すか。

あみだくじ先輩雨の中走る

舟渡杏花

くじ運の悪い先輩に当るあみだくじ。今日
また先輩走る雨の中。雨の中で句を引き立
ていますね。

足し算へいくつも指を用意する

永田俊子

十からの数は家族の指を借り。
自分達もそんな時代がありました。
いづらい事は私にまかす夫

大川幸子

広い世の中に同じような人も居る事を知り、
少し気持が晴れました。

いい子になりたいのか、ずるいのか。
その辺に軽い財布はほっとかれ

宇野昭代

万札の二、三枚も入る財布なら、まさかほ
つときはしないでしよう。また小遣いの催促
だと思えます。

出張のおこり一人の酒を酌ぐ

木村たけし

あくせくと働く月給とり。たまの出張費を
きりつめて飲む。一ぱいの酒に苦を忘れてい
る。

離婚届一枚乗せた島の舟

久保和友

幸せに暮していると信じていた娘が突然島
へ戻った。後を追うように離婚届を乗せた舟
が着く。

自己嫌悪、ごし洗う昼の風呂

上田柳影

ここが自分の短所と知りながら、うっかり
口をすべらせる。ごしごしと洗っても後のま
つりでしよう。

折りつかれ鶴折り馴れて冬の章

吉川寿美

朝夕の祈りも空しく快方の兆はまだ見えぬ。
折り馴れた鶴も沢山溜り病室の窓辺を飾って
いる。今年もまた冬の季節が近くなる。

妥協など自叙伝にない独裁者

相葉あき

どこにでもいる独裁者に弱い者は泣かされ

る。口惜しい思いを重ねながら従うしかない
労働者たち。

空白の箇所が随所にある日記

松本一郎

今年こそ最後まで日記をつけようと心に誓
ったのも束の間、空白の箇所が増えて来る。
何事も続ける事に意義があるのです。

よその子を叱ると鬼がとんでくる

鈴木良征

昔は他所の子も叱る勇氣を持っていた。叱
ると鬼がとんで来る。子の目にある時は鬼と
思える母親を別名ママごんと言っのです。

年金が少うし上って花を買う

森脇和子

今日は亡き人の命日だった。好きだった花
を供え年金の事も報告する。仏壇の灯りも消
えて今日終わる。

風呂の湯は溢れ読書の秋になる

玉井房子

もう少し少しと読み耽る間に風呂の湯は溢
れていた。そんな失敗を経験されたことも多
数の人は持つていらっしやるでしょうね。

木の風呂が白く乾いて気が和み

秋元てる

木の風呂は日本人の肌に合うそうだ。白く
乾いた風呂の湯に一日の疲れを癒され、生き
る喜びを最高に感ずるひと時である。

路郎賞

川柳塔賞

候補作品中間発表

自 62年9月号
至 62年12月号

路郎賞候補作品

正本水客

ていねいに二十四時間ずつ生きる

政岡日枝子

目も口も耳も達者で嫌われる

川島颯云児

献血車礼儀正しく動き出す

仁部 四郎

ひまわりの後ろ姿は隙だらけ

新家 完司

灯を消してただそれだけの夫婦なり

榎本 吐来

紅つけて欺すでないぞトンガラシ

土居 耕花

電話ボックスおんながひとりいて秋に

小島 蘭幸

慰めか一緒に歩いてくれる月

榊原 秀子

にんにくを効かせ歯医者へ仇討ちに

福井 桂香

ウエストもヒップも蜂にそっくりで

工藤 甲吉

北壁と名付けた石を庭にすえ
カルチャ―を渡り歩いて余生かな

奥谷 弘朗

盲人にそっと触れてく冬の蠅

稲葉 冬葉

缶切りがないから寝てる妻起こす

堀江 正朗

待ち合せ妻は他人の顔で来る

田中 叶

低迷期抜けよう入道雲が湧く

木本 朱夏

おせっかいを上目づかいで切りかえし

柴田英千子

言葉尻拾うまだまだ惚けてない

天正 千梢

ひとりでは生きてゆけないからふたり

福本 英子

これしきの傷が日に日に深くなる

土橋 螢

夫婦とは喧嘩するもの枯芒

西山 幸

夫婦とやまだ足跡をつくらうよ

大山 と金

ああ夫婦合言葉など持たぬのに

牛尾 緑良
楓楽

ほんとうは不倫へすこし揺れている

林 はつ絵

代りばんこにと忘れをするおない年

春城 年代

愛妻家だから絡んでみたくなり

佐藤 藤子

精いっぱいの嘘で流れを変えてみる

松原 寿子

粉骨砕心の父を笑うてやることだ

小島 蘭幸

優しい人と居るから大人にまだなれぬ

松本 文子

飛行機の中で借金思い出す

遠山 可住

ふるさととは鬼も仏もあたたかい

西出 楓楽

よつもった夫婦茶碗を拭いている

吉岡 美房

過去帖の折り目に亡父の眼が光る

春城武庫坊

金魚にも花にも託びる旅帰り

椎江 清芳

野村 太茂津

西田 柳宏子

嘘字でもないではないからラブレター

有働 芳仙

仏壇の母にまだまだ甘えてる

神夏磯道子

これからは黒は黒だと言つてやろ

藤田 泰子

妻がいるただそれだけで足る余生

川崎 秋女

還暦やこれから僕の青春さ

柳楽 鶴丸

敵味方おんなじ神に頼つてる

井上柳五郎

音大を出たこおろぎのオベラだな

林 瑞枝

一生に一つの嘘を貫けり

有働 芳仙

股のぞきして大空を好きになる

田中 亜弥

天高く百歳くつたくない笑顔

内芝登志代

真白な下着に今日も生きている

西岡 洛酔

黒川紫香

政治家のジャンケンを見た闇の中

有働 芳仙

散歩時間を犬が守っている憎さ

稲葉 冬葉

入院のおかげでメロンの味を知り

玉置 重人

札状は来たが戻らぬかした傘

宮崎シマ子

腑におちん顔で寝ている棺の中

谷垣 史好

手紙さえくれば母さん安堵する

内芝登志代

天の川悲しいときは美しい

土橋 螢

職のない靴もやっぱり減っている

松下たつみ

灰皿がないと話をしてくれぬ

波多野五葉庵

不意に来た女とまわる走馬灯

林 はつ絵

にんにくを効かせ歯医者へ仇討ちに

福井 桂香

間違いは最初のボタンのかけ違い

藤田 泰子

晩秋の蚊は残党でしたたかな

西出 楓楽

ワントッチの傘でさっさと出ていった

江原とみお

酔った時言えとは無茶な知恵を貸し

二宗 吟平

尺取虫の歩き疲れて枝になり

久家代仕男

七夕へまだ生臭い文字を書く

久保 正敏

ひまわりにカンラカンラと笑われた

新家 完司

嘘字でもないではないからラブレター

有働 芳仙

献血車礼儀正しく動き出す

仁部 四郎

家中の空気が動く探しもの

高橋千万里

アトリエのみかんころんだものでない

高橋 操子

白い花燃える言葉を持ち伝へる

福井 桂香

愛は果敢なくマラーは長すぎる

谷垣 史好

十二月二階に破れ太鼓居る

吉岡 美房

妻が持てばとどんどん上る奴唄

神夏磯道子

殺象と俺とくらべているらしい

江原とみお

橘高薫風

玄海の汐噴きこぼれサザエ焼け

浜本 義美

杖にする木なら一本植えてある

小出 智子

コスモスよお前土地ごと買われたぞ

大矢 十郎

川柳塔賞候補作品

高杉鬼遊

象の鼻長いと象は思わぬ

二ワトリに言うてはならぬ卵の値

江口万亀子

本当にほんとしてしょうねお月様

紙コップ酒の情をうすくする

河瀬 芳子

方円の器の中の水の鬱

吉川 一郎

「先生は狂わなかつたですか」愛

高田美代子

枝振りのいい木に縄が揺れている

神田 治

「人間」を続ける薬吞んでます

笠嶋恵美子

在るとこにない真夜中の盗み酒

藤井 高子

うら盆へお寺の義理も一つ済み

竹川 折荷

蟻と蟻内緒話をしてわかれ

沢田 きん

票のない村でデコボコ道のまま

樹本 露児

プリンゆらゆら男ごころを読んでいる

蔵重 成人

君注意したまえ豆腐にも角がある

永田 俊子

矢印の切れた所ではととする

上田 柳影

蒸し暑うて財布に銭がはいらない

田中 輝子

谷垣史好

蟻と蟻 内緒話をしてわかれ

新開で鼻をかんでる米寿かな

土橋はるお

相馬 英三

お手植は土を三べんかけるだけ
今に見て居れと雑巾掛けをする
君注意したまへ豆腐にも角がある

山田 保蔵
児玉 歌子

豆はとろ火でおとことおんな煮詰まりぬ

上田 柳影

懺悔する滝に白衣が透けている
キープした瓶に吞平と書いておく

笠嶋恵美子
小林 英子

方円の器の中の水の鬱

明壁 敏之

吹きだまり扁平足が寄って来る
ぶらぶらとしてたら列に組み込まれ

高田美代子
奈美子

美術館の前でとまった救急車
「先生は狂わなかったですか」愛

久保 和友

パチンコのキャラメルですが仏様

神田 治

宇野 昭代

小出 智子

そのうちに分ると父は気にしてす

上田 柳影

今に見て居れと雑巾掛けをする
返事ほしくて人形のへそ押してみる

児玉 歌子

手紙には書けないことを言うてはし

流 奈美子

さりながら明治大正遊び下手
じゃがいもの様にデコボコ生きて

宮崎 菜月
藤井 高子

足立由美子

耳掃除したら笑いが止まらない
一人身となって他人の多いこと
むずかしい本を隣の人が読む
滝を見る人のころもさまざまに

土橋はるお
井上すみれ
大川 幸子

考えている間にバラが咲きました

笠嶋恵美子

地つづきであればあの世へゆるゆると

岩本 笑子

孫抱いた顔は部下には見せられぬ

高杉 千歩

よその時計が鳴っているよその幸せ

加藤 明美

川底の石と人情ばなしする

永田 俊子

河内 天笑

差しのべた手が先生に届かない
今に見て居れと雑巾掛けをする
雑草は踏まれた靴をすぐ忘れ
ニワトリに言うてはならぬ卵の値

黒田 緑

児玉 歌子

魚井 円女

江口万亀子

岩田 三和

土橋はるお

野村 京子

高田美代子

宇野 昭代

岩本 笑子

ハイハイと聞いて父より強い母
ルール作ってナンセンスが続く
かくし味程の助言を母がくれ
考えている間にバラが咲きました

岩本 笑子

自己嫌悪ごしごし洗う昼の風呂
折りつかれ鶴折り馴れて冬の章
一人しか要らぬ伴侶が見つからぬ

上田 柳影
吉川 寿美

老人に用ないピラを戎橋

津村八重子

米食うてつんと長生きしてみせる

鈴木 良征

板尾 岳人

月見草遠い汽笛をきいて咲く
もう別れ話をする夏帽子
有耶無耶な返事が返るいわし雲
逆流を企んでいる川もあり
縄電車寂しがり屋が前うしろ
溜息を乗せれば沈む笹の舟
あきらめる事しか知らぬ水中花
捨て石のひとつふたつを置く余裕
炎を少し雨期にさらしているわたし

山根 八重

児玉 歌子

久保 和友

結城 君子

吉川 一郎

信本 博子

大川 幸子

河瀬 芳子

池 森子

木村たけし

朝倉 大柏

高田美代子

野村 京子

新 正子

豊

西岡

豊

よく喋る女を論ず山椒の実

西岡 豊

愛染帖

橘高薫風選

唐津市 仁部 四郎
 如月の陽を貯め込もつ日記帳
 如月の月に読ませる日記帳
 如月の雨は嫌いな日記帳

青森市 工藤 甲吉
 三界の万霊雪となつて舞い
 荒武者に似る鱈の顔北の貌

大阪市 渡部 さと美
 立つだけのポーズに素人との違い
 信号が青になるまで覚えていた

鳥取県 新家 完司
 お祭だ時計も少し酔いたまへ
 錫杖の音峠を越えて消えにけり

鳥取県 江原 とみお
 袈裟をつけると本ものに見えてくる
 乱という馬が一頭住みついた

羽曳野市 吉川 寿美
 長い風邪しみじみと冬しみじみと
 恋は草駄天いつ気にも開くジャンプ傘

和歌山市 木本 朱夏
 今日一日光ってましたよあ・な・た

落葉樹祈る形で佇ちつくす

大洲市 米沢 曉明

日曜大工喫茶へ出かけそれつきり
 枕木のような暮らしに甘んじる

鳥取市 広本 文子

わたしなど見向きもせず暮れる秋
 生身ですおてやわらかな眼差しを

堺市 山本 半銭

十二月ドラマいよいよ煮えつまる
 タレントが遠いわが子に似てる日よ

米子市 林 荒介

母の掌を離してからの雪催い
 ハンカチを干しては毒を抜いている

堺市 高橋 千万子

火気厳禁そこで二人は炎えている
 ばあちゃんの首が引っぱる急ぎ足

米子市 川上 より子

冬の間は花咲じいさん読んでいる
 綱引きの綱にひそかな意志がある

北海道 府栄野 香京

ほてりまだ醒めぬ出逢いの耳飾り
 ひたぶるに罪消すことく積る雪

新発田市 上鈴木 春枝

聞き上手かすかに揺らすイヤリング
 墓掃除自問自答を聞かせてる

名古屋市 藤井 高子

枕の下にいつもきれいな川がある
 冬の虹それがジョークであるにせよ

米子市 八木 千代

七十にアンバランスの美しさ

伊丹市 榎谷 寿馬

吹田市 栗谷 春子

蛇ひとつ神韻縹渺九十段
 守口市 森川 まさお

丁寧な客がもみじの茶店去る
 岡山県 土居 耕花

鯉程は単純でなし手術台
 鳥取県 土橋 螢

それからは灯を消してから聞くはなし
 米子市 政岡 日枝子

故郷に濡らした傘を干しに行く
 名古屋市 越村 枯梢

下書は嫌いプンヤのなれの果て
 大阪府 島路 太郎

花時計着せかえられて十二月
 正倉院展 奈良市 米田 恭昌

ガラス越し大宮人を覗きみる
 弘前市 波多野 五楽庵

ここからは奥の細道吹雪道
 今治市 月原 宵明

ライバルの真正面には席取らぬ
 鳥根県 榊原 秀子

あつさり宿命などいわせまい
 和歌山市 根本 実

風も彩さればそよよ初春の髪
 今治市 山田 宝保

俗眼に現じ給わず伎芸天
 宝塚市 丸山 よし津

強く強く巻いてもゆるむねじを持つ
 大阪市 山田 妙子

ネジ一つ落してからの医者通い
 唐津市 田口 虹汀

入念に表札を拭く年の暮

川西市

野村 静雄

ハイミスの理想相槌打ちかねる

唐津市

相葉 あき

正論を守り雑兵の列にいる

大和高田市

寺脇 三倉

鞠躬如として現役の前を行く

富田林市

田形 美緒

決断をしたのに迷う髪かたち

枚方市

宮川 珠笑

父さんに運がなかっただけと言う

弘前市

相馬 銀波

奥津溪気分は岡田茉莉子なり

町田市

竹内 紫鏡

父の忌に刈り終えた田大夕焼ける

兵庫県

吉田 明

孫たちが冬の胡座を温める

唐津市

入江 喜久夫

地藏通りに佇ち母の齡

和歌山市

神平 狂虎

無為無策晴れとだけ書く日記帳

大阪市

井上 白峰

肝心なところで親爺がソツポ向き

岸和田市

古野 ひで

田舎侍鉛筆ばかり尖らせる

唐津市

浜本 ちよ

均等法以来目立った紅の彩

愛媛県

藤原 無想

今の世の流れに添えぬもどかしさ

岸和田市

原 さよ子

忘年会忘れてならぬ事一つ

出雲市

久谷 まこと

年賀書く思い出人はうら若く

和歌山市

後藤 正子

ヌードショー入口だけを見て帰る

米子市

沢田 千春

落葉焚く煙りに木々の匂いあり

島根県

堀江 正朗

歩き続けてコツンと出逢う風の彩

奈良県

米田 芳子

慟哭の彼方に白い舟が出る

岡山県

松本 元江

失明も花と雪とが気にかかり

島根県

堀江 芳子

餓別を渡し最後の愚痴を聞き

鳥取市

小谷 美つ千

遺句集の素直にまるき春の詩

広島県

田村 新造

夫泣かすここはお国を何百里

島根県

小砂 白汀

美しい花に埋れて眠くなる

静岡市

渥美 弧秀

後継ぎが無いので枯れる島みかん

川西市

松本 ただし

乱数表にぎりしめてる病んでいる

米子市

新 正子

明日知らぬ身の間際まで常備菜

西宮市

西口 いわゑ

財テクの新聞女疲れてる

奈良市

井上 大

大山が見える範圍がふるさとだ

米子市

門脇 晶子

天才の抜けているのもそれらしい

西宮市

朝山 千世子

兜町の空気はすでに冬となり

平田市

久家 代仕男

うき巢にもたどれる岸があるだろう

弘前市

斉藤 昴

持病退散春よみがえる初詣い

西宮市

松本 一郎

石臼の坐る土間から亡父の声

米子市

田中 亜弥

白鳥純白国境誰つけた

唐津市

山口 高明

裏切りを許す打算を持っている

倉吉市

田中 八太郎

病室へ冬を運んだシクラメン

守口市

結城 君子

父兄会おとこ一匹隅に居る

鳥取県

武田 帆雀

百害と聞いて煙草の尚旨し

徳島市

宮武 まつ女

マネキンと私をくらべるからこまる

和歌山市

山川 克子

百歳以後一年の祖母の春

寝屋川市

岸野 あやめ

派手すぎる昔を連れてくる疲れ

尼崎市

春城 武庫坊

雑念に茶柱が来る四畳半

和泉市

西岡 洛醉

身体まだ本当でないお茶の味

見舞客の服でもわかる季節感
芦屋市 竹中綾珠

人間の匂いで悩み分かち合う
米子市 小村てい子

普段着も何やら光るものをもち
岡山県 伏見すみれ

実年の日記伏せ字が多くなる
佐賀市 石田源吾

ロングラン尽きぬ話題の凡夫婦
福岡市 吉川一郎

ゼスチュアがじょうずな嫁で恙無し
大阪市 大福留吉

焦点を教育に当てて子を守り
和歌山県 田中隆積

想い出は金木犀の匂いにも
姫路市 釣遊光

私の死にざま私見ときたい
島根県 船津重信

紙風船山の向うが見たくなる
米子市 金山夕子

遠いとも近いとも亡母の三回忌
和歌山県 福本英子

こんど逢うときは答えがいりそうだ
愛媛県 八塚三五島

定期便着いて我が家に灯がともる
和歌山県 前田美子

三猿或る日見たい聞きたい知りたい
大阪市 町田達子

不惑とかいともあつさり転職し
茨木市 堀良江

INF全廃条約調印

豊中市 田中正坊

核軍縮一歩踏み出す冬日和

米子市 林瑞枝

岩場からさざえの焼けている匂い
堺市 小西小雪

永観堂みかえり如来あたたかし
羽曳野市 麻野幽玄

飼主の都合で吠えて叱られる
和泉市 岡井やすお

LSIがジャンボ時代にもっている
米子市 光井玲子

疵口よ眠ってくれてありがと
大阪市 亀井円女

低うなつても通天閣は今も好き
八戸市 島田昭治

凡人の覚り顔してつらいもの
岡山県 山本玉恵

終電車罪のない顔のせて着く
吹田市 西岡豊

演芸のトップ頼むと持まれる
岡山県 江口有一朗

猫あわれ夜の散歩がやめられず
岡山市 川端柳子

六十路来ても可愛い愛ちやんで来るたより
豊中市 辻川慶子

初光白い障子の隙間から
和歌山県 丸若晏

鏡が歪んでるさんげの日の朝
藤井寺市 福元稔

大いなる遺産は親の生きざまだ
東大阪市 大平太郎

消しゴムで消えぬ汚点がひとつある
岡山県 土居ひでの

そろばんが合わぬ夜長の妻の愚痴
兵庫県 北川とみ子

床の間に飾っておきたい七五三
富田林市 浦田トシエ

それぞれに鍵一つずつ朝の靴
高石市 浅野房子

やるだけはやった敗者の夜が明ける
佐賀市 古川一徳

街角で迷えばタクシー寄ってくる
熊本県 高野宵草

お見舞へなす術もなく歯痒くて
笠岡市 松本忠三

投句先 千560
豊中市中桜塚三丁目13-15

橘高薫風宛(ハガキに3句)
* 豊中市中桜塚三丁目13-15

NHK川柳募集

課題「相談」 選者 森中恵美子

締切 2月10日

(ハガキに3句以内)

投句先

大阪市東区馬場町3-43

NHK大阪放送局「ふれあいラ

ジオセンター」川柳係

発表

2月28日(日)ラジオ第一放送

午前11時5分から

尚香のむ 八木千代選

心残りを互いの糧にして去ろう

和歌山 田中 輝子

昨日までの心残りが明日からの糧として、身や心に
つくことに気付いた人だけが書ける、力を抑えた作品
です。求め過ぎないで静かで、互いの糧というところ
にひそめた思いが強く伝わってきます。

誰にでも分けて上げて森の土

米子 政岡日枝子

分けて上げられるのは森のふところの深さでしょう
か。培ってきたことの自信でしょうか。にんげんが好
きな森の土。もしかしたら森も誰かへの恩返しかもしれ
ません。森のゆたかさは仏さまのようですね。川柳
といっしょですね。

一線に並んでひよいと振り返る

大阪 堀 いくの

オトコといつも海と比べているのです

佐賀 寺中三枝子

すぐ妥協するので相談してくれぬ

大阪 本間満津子

大好きな人が山から降りて来た

和歌山 細川 雅代

毀れやすい男の暦だと思っ

米子 青戸 田鶴

日記帳 斜めの線に立ち入るな

守口 結城 君子

帽子屋でわたし忘れていたことも

松原 佐藤 藤子

竹藪の生れ蹴しの恋をする

出雲 石倉美佐子

出来すぎと思う 自分で杭を打つ

堺 鈴木三千代

エンドマークをばちばち燃やしたとしても

和歌山 後藤 正子

秋の風 黒い噂を受け止める

寝屋川 稲葉 冬葉

鬼の面つけて来たのは鬼もどき

名古屋 藤井 高子

責め立ててとどのつまりの佗しかり

尼崎 春城 年代

咲いて散るそんな自然の繰り返し

米子 足立由美子

吾亦紅どの子も憎いはずがない

大阪 西出 楓楽

今はただ翔ぶ日のために縄をなう

高槻 河瀬 芳子

置手紙 鳩が遊びに来たらしい

米子 寺沢みどり

今日もひとりのさむさをうたうプログラム

和歌山 西山 幸

お姉ちゃんだから泣きたいのを我慢

西宮 奥田みつ子

先頭に立って踊りの手を忘れ

姫路 釣 遊光

乳房の揺れ 時に邪慳にしたくなる

広島 流 奈美子

肌布団なんとやさしい名前だろう

大阪 鍛原 千里

汁わんの重さを問うただけのこと

米子 川上より子

山茶花の朱は無口なり雪しきり

和歌山 松原 寿子

清らかに痩せて傘寿の命かな

吹田 栗谷 春子

毒少し飲まねば今を生きられぬ

米子 林 瑞枝

風の道まだ編みきれぬ放浪記

岡山 清水悠貴女

ポールペン凍って先が書けませぬ

倉吉 淡路ゆり子

この道を行けばおいしいケーキ屋さん

米子 新 正子

陽の匂い陽のやさしさを着る布団

姫路 丁坪サワ子

赤い羽根その後の行方聞きもらす

和歌山 福本 英子

羊羹を厚めに切って妥協する

大阪 上江洲勝子

折り紙の鶴よ翔ぶまでよごれるな

米子 石中 時子

ある時はドンキホーテになりたくて

貝塚 池田寿美子

何光年 今の不満のちっぽけさ

堺 松本はつ子

吳越同舟 船着場にはまだ遠い

一人ぼっちの私にして月走る

春の陽をどの袋にも貯めましよう

計算の無い人生で拾い猫

これしきの事で泣けない畳の目

明日の絵は目鏡を拭いてから見よう

天井があつてこの世は平和だな

鯨尺 老母の苦勞は計れない

紫式部雪を見るまで咲くという

きれいごとだけではすまぬ冬のバラ

人を赦せば赤い夕日がなおきれい

三度目の正直男からラブコール

私に釘打ちながら長い道

いろは書くとても優しい筆づかい

さてこれも一期一会だやむをえぬ

病弱に慣れて甘えが出てしまふ

水仙の演技可憐にしたたかに

雪が来るまでに日光浴しよう

水がめに水があふれてつもの思慕

ヒステリー玉溜めております喉仏

晴天が続き絵皿が褪せてくる

赤い靴まだかわいくて妊婦さん

ロビー華やか季節忘れた女たち

胃ぐすりを飲みのみ街に住んでいる

鼻先の紅おとしてもピエロです

羽曳野 吉川 寿美

青森 福士 トキ

米子 野坂 なみ

竹原 信本 博子

大阪 田中 弘子

岡山 灰原 泰子

米子 門脇 晶子

富田林 田形 美緒

鳥取 さえきやえ

和歌山 内芝登志代

米子 小村てい子

八尾 宮西 弥生

米子 光井 玲子

岡山 山本 玉恵

和歌山 山川 克子

松原 北野 久子

大阪 津守 柳伸

米子 菅井とも子

和歌山 木本 朱夏

寝屋川 宮崎 菜月

藤井寺 高田美代子

茨木 堀 良江

宝塚 丸山よし津

米子 石垣 花子

八尾 高杉 千歩

突きぬけた風を時には温める

午前五時月の情けに濡れてます

ロマンスが枯れたと毛皮買ってくる

自治会の役でよく着る黒い服

何時までも古いレールを子は踏まぬ

古里をこつぱり背負い駅に出る

美しい文字だけ書けと教えられ

四季のいとなみストープつけてホツとする

年忘れ 忘れてならぬ事ばかり

小猫あげますとおさない文字がゆれ

知名度は三つ続いたお葬式

嬉しくて苦手なことも引き受ける

鳩が啼くふとなつかしいものに逢う

夕空をひとりじめして枯葉燃す

よそゆきの顔だけうつつコンパクト

てのひらに泥を溜めて冬になる

真ん中が好き淋しがりやの女です

帯締める機会もなく黄昏れる

窓を開け風の話聞いてあげ

楽しみになるリハビリの一時間

来年の扉を叩くコウノトリ

米子 澤田 千春

岡山 松本 元江

堺 高橋千万子

寝屋川 平松かすみ

宝塚 吉田 笑女

倉吉 田中 亜弥

米子 茂理 高代

大阪 鈴木 節子

横浜 大橋よしゑ

西宮 秋元 てる

大阪 古川美津枝

奈良 横井津姫子

米子 服部 朗子

富田林 片岡智恵子

大阪 板東 倫子

大原 千原 理恵

出雲 園山多賀子

高石 浅野 房子

西宮 西口いわゑ

和歌山 田中 みね

宍道 松本 文子

ハガキに雑詠3句 毎月10日切

投句先 千833 米子市花園町一四

八木千代

62年度苗香の花賞



西山 幸

苗香の花のように
 思いがけない苗香の花賞をいただき、本当に
 ありがとうございます。
 「人間陶冶」という生涯の課題へ、今日までの
 貧しさを反省しています。奥深いこの道を、女
 を歩み続けてゆく為に、もつともつと勉強しな
 ければ、と思えばかりです。そして、苗香の花
 のように、慎ましく芳香を放つ句を願っていま
 す。
 今後共よろしくお導き下さいませ。

受賞のことば

62年度愛染帖賞



木山 遠二

昭和62年度（第一回）の愛染帖賞にわたしの
 句が選ばれたとの知らせを受けた時は、夢では
 ないかと思いました。
 特に第一回とのことがとても嬉しいです。
 89歳の老齡寝たきりのわたしにとつては川柳
 だけが生き甲斐であり唯一の楽しみです。
 むいて戴いた五句全部がわたしの最もうめば
 れのあったものだけに、とてもとても嬉しかっ
 た。
 ねたきり老人のたわ言とお聞き流してください。
 ありがとうございます。ありがとうございます。

柳歴

大正3年 川柳の道に入る
 大正12年から昭和22年 朝鮮
 在住のため中断
 昭和24年 1月、新山公民館
 川柳クラブ発足。引続き昭
 和30年3月、川柳並木会と
 して柳社結成、初代会長
 昭和33年 10月川柳塔社同人
 昭和43年 路郎賞受賞
 「似て居ない父に
 足音だけが似る」

苗香の花のように

柳歴

昭和50年頃より朝日和歌山柳
 壇で太茂津先生の手ほどき
 を受け、川柳わかやまへ入
 会。併せて七面句会で葉先
 生のご指導を受ける。
 昭和52年度川柳塔賞受賞
 昭和53年川柳塔社同人
 昭和58年度路郎賞受賞
 「歳月やゆるし合ふ
 より他はなし」

寒中お見舞い申し上げます

むらくも川柳会

〒699-13 島根県大原郡木次町里方八六八一三

藤井明朗

寒中お見舞い
申し上げます

古	古	岩	岩
田	田	本	本
比	太	笑	文
呂	虚	子	晴
子			

寒中お見舞い申し上げます

東大阪川柳同好会

川柳泉尾

会長 池田淑子
会員 一同

田中隆二川柳句集

『かぼちやばい』 A5判
百八十頁

定価 千五百円（送料三百円）

申込みは

〒583 羽曳野市羽曳ヶ丘西五丁目一の十七
田中隆二

天正千梢氏（奈良市）より

転宅記念として金一封拝受いたしました

川柳塔社

奥田みつ子氏（西宮市）より

亡母供養として金一封拝受いたしました

川柳塔社

節分

布施 幸子

幼いころ、節分の日には母が赤い布切れて私の髪を結わえ、小さな櫛を作ってくれるのが嬉しかった。「うまいこと、お化けになったわ」と聞いて、あのおそろしい化け者を連想し「ちがう、お化けやない」やつきになって抗議したのを憶えている。

昔は未婚、既婚の女性のヘア・スタイルが決まっていたが、節分の日に限ってはヤングミスやハイミスが桃割れを結って娘をよそおったり、ミスが丸髷姿で人妻に扮したりが許された。そんな変装を「お化け」というのだと知ったのはだいぶ後になってからである。

お化け、にはこんな由来があると聞いた。江戸時代の京の歌舞伎俳優、七代目片岡仁左衛門が、節分に鶴の吸物を食べたところ大当たりをとったので、縁起が良いと毎年のしてきたりにした。すると近所の娘さんたちが鶴の羽を貰いに行き挿すようになった。

やがて鶴の羽のカンザシがはやりだして、そこかしこにニセモノが出現したので、片岡家では定紋入りのカンザシを出すことにした。

人気役者から手渡されるカンザシほしさに娘たちは「節分詣りに行ってきます」と家を出ては片岡家へとまっしぐら。さすがに後めたいので、おこそ頭巾や面で顔をかくしたのが「お化け」の始まりだという。

近ごろはミス、ミセスの髪型の区別とてないが、節分には日本髪風にセットし、和服を着てふだんとは一変した娘さんらが、京の町を古風にいろどり、寺や神社にあふれる参詣客が底冷えの古都に活気をよんでいる。

花街の芸妓さんたちが豆をまく八坂神社、大護摩がたかれる狸谷不動尊、懸想文を売る須賀神社、山伏が集まる聖護院、厄よけ炮烙が売られ無言の狂言が演じられる壬生寺等々、さまざま趣向があるが、とくに吉田神社、平安神宮、鞍馬寺は古式にのっとった追儼式で名高い。

追儼は、紀元前三世紀ごろから古代中国に始まった厄よけ行事で、もともとは季節の変り目ごとにおこなわれていた。それが唐の時代に年越しの習俗となり、新春を迎える大みそかの行事としてわが国へ伝わった。

宮中行事となった追儼は、平安時代には「鬼

近畿文字放送作品募集

題「箱」 森中恵美子選

3句 締切 2月15日

ハガキに明記の上、左記へご投句下さい

〒540 大阪市東区谷町2丁目36

大手前ウサミビル3階

近畿文字放送 川柳係

やらい」ともい、宿直ガードマンたる大舎^{おとけ}八人が鬼征伐の主役、方相氏に扮した。中の一人は金色の四つ目が光るおそろしげな面をかぶり、黒衣に赤い裳を重ねた個性的な面をたちで、鉦と櫓を手にして先頭に立った。「追人」とよばれる鬼追討総司令官である。方相氏の後には多数の童子が家来として並び鬼やらいの開会式となる。

まず、陰陽師が呪文となえ、追人が儼声と称する大声をはりあげて鉦で櫓を打つと、従者はいっせいに桃の弓に葦の矢をつがえて鬼どもを追っばらう。

といつても、逃げまどう鬼は見あたらぬ。元来が鬼とは「隠^{かく}」であって姿が見えぬことを意味する。牛のツノをはやし、虎のプリー

フをはいた姿は「ウシトラの方角を鬼門」にすることからヒントを得た想像らしい。だから追儼式には鬼がいないのが正しいのであつて、この鬼なし追儼形式を忠実に伝えているのが鞍馬寺の節分会である。

ところが、平安神宮や吉田神社の鬼やらいにはカラフルな鬼どもが登場する。実は、鬼

美わしき風趣いっばいの

大八宅川柳屏風完成

(すべて短冊)

意識してどっかと坐るお元旦
酒かに行かされたのも佳き日なり
故郷よし氏神があり親があり
名園で浮世話をしてるなり
紫の椅子のうれいはわが愁い
竹を愛でる今朝すぎしそよ風よ
ひとこいしひとわずらわし波の音
新聞で折つても鶴のよい姿
ふれあいのあれからつづく五十年
目立たないように目をかけ人間味
俺よりも出世をしたと笑わせる
紙の雪紙の重さで落ちてくる

路郎 水府 伍建 紋太 薫風 露紅 栗 仙浪 天弓 万彩郎 薩城 濟明

なし追儼「ではなんともしたよりなく、こともあろうに鬼征伐の大將たる追人が鬼にまぢがえられたりして困るので、室町時代には鬼役登場のわかりやすい演出に変わったよつた。が、この風習もやがてすたれ、宮中でも豆まき中心の節分に移つていった。
「鬼は外、福は内」となつて、屋内に無断

街なかで駱駝北京の顔をする
〇〇〇半分からは横に引き
満州で男を売つた顔が寄り
わらじぬぐやくざ言葉も使つてサ
百発の百中胸に潮満ちる
親竹をしのぐ子竹の逞しき
すらすらと今日も嬉しい原稿紙
陽がさして雪の姿のうれしかり
逢う瀬には程よく高い蔵の窓

青電刀 茗八 夢詩朗 正夫 圭林 月南 岸柳 凡凡 大八

四つ折の白い屏風に老妻と小生の合作で旧臘仕上げ、新築四年目の本座敷に飾り、元旦の神仏に供えました。屏風が新しくも一つあるので、また色紙中心に作るつもりです。
(東野大八)

同居中の鬼を追いだす豆打ちの風俗は、室町時代以降しだいに一般行事として定着していった。(但し、「九鬼さん」というお宅などでは「鬼は内」と叫ぶそつである)
壬生寺では「節分」と題する豆打ちの鬼追い狂言が演じられる。

——節分の日、後家は神棚に灯明をあげ、椀に鱈の頭をさして門口におく。ところが箕笠をつけた鬼がやってきて、嫌いなはずの鱈を食べてしまい、後家をおびきだす。

後家は鬼と知つて逃げこむが、鬼は打出の小槌を持っていて、衣裳やら頭巾をとりだして変装、つまり節分のお化け姿で家の中へ入ってくる。そうして後家の喜びそつな上等の着物をプレゼントして酒盛りと相なるがやがて酔いつぶれてしまふ。

後家は打出の小槌をとりあげ、鬼をまるはだかにして豆をぶつけて追いはらう——
この狂言でみる鬼は、おつちよこちよいで情けないほどかわいらしい。それに対して人間、それも女の方が鬼をはるかに上回るキツさを持っているのかと、わが身に当てはめるにつけても嫌になつてしまふのである。

初歩教室

題一薬

阿萬萬的

二月号発表で課題が「薬」とくれば、当然風邪薬となる苦なのだが、作句された時が年末だったせいもあって

忘年会を努め肝臓薬飲む

(忘年会の後で飲んでる胃の薬)

忘年会胃薬持って二次会へ

(胃薬まで持ってつき合う三次会)

買い薬飲んでお酒を飲みつつ

百薬の長と口実つくる夫

(百薬の長だと笑って酒を酌み)

胃薬と風邪薬買う十二月

神農祭に力を入れる道修町

(神農祭虎と薬の道修町)

小旅行、カニすき等には胃腸薬のお世話になる事が多くて

追いつきのグルメが仇の胃腸薬

小旅行薬の袋は別に持つ

(胃の薬持ってグルメの旅に出る)

痛み止めお守りのよに持ち安堵

気安めの合い薬詰める旅靴

(気安めの薬も詰める旅靴)

日帰りに薬も持参の老いの母

(まっ先に薬も詰める母の旅)

フルムーンどちらも薬を供に連れ

フルムーン漢方薬もそっと入れ

旅の空薬入れたが飲み忘れ

若くなる薬買う旅友と行く

(若返る薬と空の旅に出る)

旅は旅でも野山歩きは

薬草を山野に探すピクニック

山歩き秋の七種薬草摘み

(薬草を摘む山歩き空の青)

薬草が出たついでにと言えば失礼だが

センブリの苦さも三日で舌に慣れ

センブリを飲んだ明治は達者です

(センブリを飲んで明治はまだ達者)

忘れずに飲み続けてる薬用酒

漢方薬飲んで老化へ歯止めかけ

薬草を飲んで一病余生もち

(一病息災漢方薬という余生)

毒だみが薬になるという話

薬草のお茶に馴染んで古稀の秋

(ゲンノシヨウウコお茶代りにして祖母達者)

直ぐ効かぬ薬も体によい薬

漢方を今も信じるのは明治

(明治生れ漢方薬だけ信じると

でもお医者さんにかかると

ポケットが膨らむ程の薬漬け

温子

喜代子

遊光

治

悦子

野草

秀香

秀香

ふき子

トキ

秀香

金吾

三千子

美恵子

小鹿

遊峰

太一郎

章久

紀代志

信頼度医師に委ねた薬漬け

薬漬け俺の五体は女医まかせ

飯よりも満腹する程薬くれ

コレクシオンみたいな父の薬袋

おはじきのように並べている薬

(おはじきのように錠剤並べて見)

だがこんな人もいて

老人は薬無料で捨てている

老人を大事にしすぎる薬漬け

薬漬けでもまだ未練のある浮世

(薬漬けでもまだまだ浮世にある未練)

薬漬けで生かされている高齢化

薬石の効が利いている長寿国

(新薬が効いてか日本は長寿国)

薬だけで生きてる母のいとおしく

だがこんな元気なお年寄りもいますよ

薬には世話にならぬと万歩計

姑は薬いらすのゲートボール

(ゲートボール薬いらすの顔が寄り)

でもねえ副作用に悩んでいる人も

几帳面に飲んだ薬の副作用

カラフルな薬にかくれた副作用

効き目より先に出て来る副作用

薬とて廃人つくることもある

だがねえ……それでも

薬害は聞いたが矢つ張り今日も飲み

薬好きか飲まぬと落着かず

気休めに毎日欠かさず飲む薬

売薬にはコマージュナルが付き物で

千鶴子

成明

繁男

治

みね子

保夫

サワ子

一郎

金吾

陽子

紀代志

ミツエ

勝美

美子

露芳

久留美

すみれ

一耕

八重子

効能書に嘘が無ければ医者も楽 円女
 飲むとすぐ効いてくるよなコーシヤル春 枝
 痩せ薬広告程に効きもせず みね子
 風邪薬ついタレント名口走る 太一郎
 コマーシヤル薬の顔がよく見える 瑞穂
 (タレントの顔で覚えた薬の名)
 コマーシヤル目薬の目はきれいです てる
 風邪引きの新薬は次々と出ているのに
 風邪引きは寝るのが薬と卵酒酒 勝美
 風邪を引き薬嫌じやとっどん食べ 成明
 (熱いっどんで頑固に風邪を治す父)
 名医ではないが店薬よく売れる 隆雄
 (コーシヤル程は効かない風邪薬)
 薬にしよか医者かと足とどめ 野草
 (売薬にしておく師走の忙しさ)
 風邪引きの薬をかかえ二ヶ日 ミツエ
 (風邪引きの薬も買うとく大晦日)
 置き薬と言えば富士の……懐しいねえ
 置き薬富士山説りも置いて去に 八重子
 置き薬が取り持つ縁で恋芽生え みね
 (薬売りお茶をよばれて話好き)
 風船で泣く子を騙す富士の薬 トキ
 薬売り先に子供を機嫌とり 瑞穂
 (子供等と先ず仲好しの薬売り)
 押し手の力が重い置き薬 路子
 置き薬の便りさ需要上廻る 重信
 薬箱カッターパンだけ早く済み 美恵子
 (カッターパンだけ早く減つた薬箱)
 何よりもよく効くものにお母さんの睡が

坊やの瘤治る薬は母の唾 八重子
 三歳児何より良く効く母の唾 志重
 (チチンブイ何よりも効く母の唾)
 病床で折る鶴折る薬紙 温子
 薬包紙癌病棟の千羽鶴 遊峰
 薬包紙ベッドで鶴に変身し 遊峰
 (薬包紙で鶴折る窓のシクラメン)
 だが最近薬包紙も見かけなくて 小鹿
 点滴で命をつなぐ詩人です 明吉
 点滴のまどろこしさに動悸うち
 私なら下五を、午後の雨、ぐらいに
 昔銭湯の隅にあった薬湯が最近復活して 繁男
 よく効くと街で聞いた薬風呂
 (よく効くとランドン泡風呂薬風呂)
 薬湯につかって過去のロマン追う 三千子
 薬湯にひたつて幸せ今日暮れ 三津江
 (薬湯で年寄同士のうまが合い)
 そしてお年寄にはこんな……
 ポケ封じの薬に代る寺詣り 純子
 ポケなおす薬もほしい昨日今日 悦子
 頭へのこれも薬よ句に挑む しんじ
 (ポケ防止の薬と駄句を詠み続け)
 薬にも毒にもならぬ」という句が遊光、志
 洋、円女さんとありましたが割愛しました。
 ここで薬よりよく効く愛の言葉を少々
 良薬と知ったお小言姑の死後 サワ子
 子育てのこれも薬とする 美恵子
 治つたらハワイへ行こうと言う薬 正子

温かい言葉が薬 老いの坂 一耕
 ともあれ家伝秘薬はだんだん影が薄くなり
 陀羅尼助高野の土産と函隣 明吉
 何もかも化学家伝の薬消え 重信
 (宣伝に負けて陀羅尼助影うすく)
 では何時ものように、もろもろの薬を
 制癌剤癌と知らせず打つつらさ 露芳
 無器量な果実自負する無農薬 千鶴子
 飢える国あるというのに瘦せ薬 みね
 立つて注す目薬ふらつく齢になり 三三三
 薬局で同年配の同病者 晏
 新薬が出る度受難のモルモット 三津江
 薬局が家族の持病喋らせる すみれ
 再会を喜ぶ友の手に薬 つえ子
 薬までつい徳用を買って来る 美子
 農薬に虫も負けずと強くなる 正之
 さて私の乱筆によるお薬、少しは参考にな
 りましたかね。では又来月もよろしく。

題「顔」 2月10日締切(4月号発表)

ハガキに5句以内

宛先 千598 泉佐野市中庄一〇八一—九九

阿萬萬的

負担

石川 侃流洞 選

子に負担かけぬつもりの方歩計
子に負担かけぬ願いをして生きる
肥えずして足に負担がかかりすぎ
足腰に負担がかかる老いの坂
機械化に農家の負担きびすぎ
耕作で減反負担の金がのしかかり
豊地整理負担の金がのしかかり
応分のご負担ねがう村祭り
仕舞風呂今日の負担を母終り
みな笑顔負担が負担にならず済む
もうけ過ぎ重い負担の日本丸
自己負担増えると医院空いてくる
家紋守る負担女の背が軋む
恍惚へ負担が重い嫁の肩
祖母の手が支えて呉れた共稼ぎ
ホステスの姉が貢いでいる学資
子宝と思えば負担にならぬ肩
四角四面肩が負担で凝ってくる
片肌を脱げば負担がのしかかる
おだてられあげくの寄付の負担額
肝臓の疲れ暮れから松の内
負担する話へ議事が進まない

たず子
元江
義美
白峰
テロ
有一郎
秀峰
枯梢
洛醉
太一郎
三和
サワ子
玉恵
遊光
旭恒
正敏
ただし

セロ負担だから足並よく揃い
長男でかぶる負担の荷が重い
伝統芸負担の重い家業継ぐ
税負担平等感に遠くいる
継ぐ家があつて税金考える
地価狂乱遺産が負担になる時勢
割勘の端数を肩書負担する
右ひだり負担は同じヤジロペー
学資値上げ又切りつめる暮しの灯
家計簿にローン大きな負担なり
顔出ただけで二次会ツケがくる
発言はよそう負担が見えてくる
沈黙が重い負担になる空気
段畑が扁平足にしてしまい
年金に負担が重い慶弔費

弘朗
軒太楼
正之
奈美子
美代子
知恵子
白浜子
京子
悠泉
兼治郎
新造
三倉
大柏
宵明
正坊

同情が負担にもなる母子家庭
全額負担子等に甘えてフルムーン
神様も負担が重い春の絵馬
縄電車負担は妻の背にかかる
一蓮托生罪の負担をわかち合う

幸一
みね
優
砥代
三五島
鉄治

胃に負担かける話は明日にする
地
度を越えた好意負担となってくる
天
十字架を背負い続けてまだ峠
軸
苦も楽もともに分け合いい仲間

霜

稲田 豊作 選

霜の来ぬうちにハサミのみかん取り
霜が降り干し大根を白くする
霜解けて生々のぞく落のとう
離れ住む母を氣遣う今朝の霜
登校道舗装で霜の詩がない
掃き寄せて煙が真直ぐ霜の朝
霜焼けへ母の手編が温かい
頭髮の霜が氣品を醸しだす
百度石母は素足で霜を踏み
霜枯れへ店も息つくポーナス期
霜の朝葉は死んだ振りをして
霜枯れの時期バーゲンで切り抜ける
霜の朝りんごの頬っぺの白い息
初霜へゲートボールも焚火する
小鳥ども押ししくら饅頭霜の朝
鬢に霜見せてこの子も苦勞性
憎火とろとろ民話の温い霜の宿
初霜へはじけたままの庭柘榴
エンジンの機嫌が悪い霜の朝
半農に嫁ぎ霜焼手がかゆい
霜柱踏んで跳ねてるランドセル
霜踏んでポストに走る恋手紙

さと美
小鹿
元江
テロ
雅風
勝美
公一
有一郎
清芳
達子
新造
克子
保夫
重信
高子
三五島
遊峰
白峰
夢醉
ちかし
市雄

路 集

一時限終つて出れば霜は消え やすお
 霜風に老人会の 糶拾い 豊
 霜焼けてダイヤの指輪不満そう みね
 霜降りる雀はえさが見当らず しげお
 霜柱リンゴ益々赤くなる 富恵
 ジョギングの人影が減る霜の朝 素身郎
 霜柱軍靴で踏んだ青春譜 正坊
 一ト霜が来て水炊きの味になり 可住
 星月夜始発の車庫の白い霜 重人
 霜困い故郷に早い冬が来る 雀踊子
 地下足袋の底が冷たい霜の道 白溪子
 尼さんの足跡だけが消える霜 玉恵
 雪に似て雪より寒い霜の朝 幸一
 霜の下春がのぞいた露の臺 悠泉
 霜の朝神社の鈴がよく響く 弘朗

霜の道ハンコのように押して行く 繁男
 アロエよごめん初霜にしてやられ 暁明
 霜焼けの頬モンゴルの元気な子 倫子
 霜降りの肉とゆこうかポーナス日 みのる
 びんほつの霜気にかかる二度の縁 旭恒

霜柱踏むと聞こえて来る軍歌 規不風
 霜枯れの野に解き放つ早春の駒 寿美
 地虫みな無事に潜った頃に霜 本蔭棒
 霜の庭老父の棒術気合鋭し 軸

飾る

山下みつる 選

雲上の龍を飾って新春を待つ 純子
 初孫へ飾る雛だん値踏みする 秀峰
 飾り気のない人柄へ親が惚れ 鉄治
 自分史を飾るに他人の彩も借り 大柏
 戦中の怨みを晴らすダイヤです あやめ
 着飾った七つ参りに艶がある 遊光
 気掛りな事は済ませた注連飾り 美代子
 身を飾りおろそかにする台所 克子
 着飾って来たのに誰もみてくれぬ 佳雲
 ライバルを今追悼文で飾り立て 優
 嫁ぐ娘へ父は言葉飾らない 正敏
 一揆あと首塚飾る彼岸花 朴竜
 床飾り打出の小槌肘を張り ちよ
 中身ない政策飾る美辞麗句 正坊
 身を飾るとかく噂がつきまとう 寿美
 飾られた馬が不自由な不自由な 雅風
 傷跡を見せぬ絵皿を飾ろうか テル
 飾らない人柄春の風を呼ぶ 杏村
 売られゆく悲しき猫の子も飾り 可住
 人徳の飾りは菊に囲まれて 洛醉
 飾らない顔寄合つてうまい酒 豊
 口下手で飾らぬ人を愛しぬく 理恵

飾られて造花己を見失い さかえ
 紛飾は許そう父の武勇談 源吾
 不本意に飾る笑顔と読み取られ 弘朗
 焼酎が多い貧しい飾り窓 新造
 付添が満艦飾で来る見合 倫子
 飾り気のない女教師の弾む息 高夫
 飾らない妻で多くの友を呼び ちかし
 飾っても鏡は妥協してくれぬ 砥代
 引き際を飾る言葉は置いてある 清芳
 飾らない母は木綿が良く似合う 典子
 飾り気のない人柄は騙せない 規不風
 着飾った後姿を値踏みされ 重人
 ひかえめな飾りが似合う寡婦の春 本蔭棒
 着飾って心の痛む飢がある 雄々

荷飾りに親の苦勞がにじみでる 白峰
 壁飾り般若と菩薩対峙する 枯梢
 一輪を飾り茶の友招んである 知恵子
 飾ろうとするから裏が透けて見え 雀踊子
 飾らない真心芯につきささる 三五島

曆あと一枚となり松飾る 虹汀
 ふる里へ飾る錦の糸つむぐ 玉恵
 一瞬を見事に飾る流れ星 勝美
 借り物の衣裳で飾る披露宴 軸

柳界展覧

集録一敏・武庫坊

全国規模の大会の予定。

大会内容等、詳細は後報。

選者は左の通り

去来川巨城（兵庫）石原伯

峰（広島）海地大破（高知）

大野風柳（新潟）大森風来

子（岡山）小林由多香（鳥

取）小松原爽介（兵庫）斎

藤大雄（北海道）佐藤正敏

（東京）田口麦彦（熊本）

西尾栞（大阪）森中恵美子

（大阪）

★昭和63年花久忌（柳多留

の版元、花屋久次郎を偲ぶ）

日時 2月11日（祝）13時

会場 東岳寺（東京都足立

区伊興町前沼1210

電話（899）3790

会費 八百円

宿題 各題3句締切14時半

晴れる 神田仙之助選

慣れる 萩原 柳絮選

切れる 関根 木九選

席題2題・献句1句

主催 川柳人協会

★札幌川柳社創立30周年記

念川柳大会

日時 4月29日（祝）9時半

会場 ホテルあかしや（札

幌巾中央区南12条西

1丁目）

宿題一部（事前投句・各題

2句）

「芸」 時実 新子選

「線」 須田 尚美選

「流」 斎藤 大雄選

宿題二部（出席者のみ各題

2句締切11時半）

「起」 中谷 道子選

「承」 石川 富司選

「転」 谷川 渥子選

「結」 藤谷怠民愚選

特別課題（事前投句2句）

「愛」（選者5名に同じ

句が行くよう書くこと）

投句 宿題一部と特別課題

については、各題別紙に

作品2句、住所・氏名・

雅号明記の上、投句料一

千円（切手不可）を添え

3月10日必着厳守

Q&A 斎藤大雄と時実新

子との対談

当日会費 二千元

祝賀会費 三千元（希望者）

発表 川柳さっぽろ7月号

連絡先 〒0669 江別市文

京台四六一一六 藤谷怠

木山遠二氏（笠岡市）より

卒寿記念として金一封拝受いたしました

川柳塔社

は、92名が参加、盛会であ

った。

★「川柳たけはら」誌1月

号によれば、12月15日、N

HKラジオ東京が竹原の学

生の川柳を取材。15人の竹

の子達、とてもにぎやかで

楽しい録音風景だった由。

★川柳ふうもん吟社は、11

月上旬の車中川柳大会特集

号「瀬戸内と吉備路の旅」

を発行。

★同吟社は、「第6回没句川

柳供養大会」号を発行。

▽句集発刊△

★番傘の重鎮、島根県川柳

協会理事長 柴田午朗氏の

第四句集「空鉄砲」が刊行。

A5判一九五頁一色刷

頒価千五百円（送料三百円）

発行所〒690松江市南田町49

島根県川柳協会

★田中隆二氏（本社理事）

の句集「かばちやばい」

★川柳新京都創立十周年記
念大会
とき 6月12日（日）
ところ 葆光ビル7F大ホ
ール

京都市中京区室町通御池
（地下鉄御池駅下車すぐ）
夕切 11時30分

「雑詠」福光二郎・村井見
也子 共選

「花壇」石部 明選

「小町」井上虎風選

「ランク」大西泰世選

「抱く」樋口 仁選

「峰」山岸竜清選

「仲間」古谷恭一選

各題2句 会費千円

★弓削川柳社創立40周年記

念第40回西日本川柳大会

9月3日（土）4日（日）両日、

A5判一八〇頁、定価千五百円(送料三百円)申込み

は下3羽曳野市羽曳ヶ丘西

五丁目一の一十七 田中隆二

★川柳泉尾(大阪市立勤労

婦人センター内)は、創立

三周年記念句集「川柳泉尾

III」を発売。

▽同人消息△

★東野大八氏(本社相談役)

「柳宴」誌1月号に「火竜

の皇帝」と題して執筆。

★西出楓楽氏(大阪市・理

事)NHK学園刊行「川柳

春秋」第8号に「二代目は

野次馬嫁」と題し執筆。

★久家代仕男氏(平田市・

理事)「川柳いずも」誌の

秀句抄を担当。

★本田恵二郎氏(倉敷市・

本社参事)

★「松江番傘」1月号に、

「新風土記文芸編川柳」の記

事を再録。林荒介・林瑞枝

のおしどり作家と茂理高代

氏を顔写真入り一ページ記

事で紹介。

★河内天笑氏(堺市・常任

理事)「ねぶた」12月号・

すいせん句抄に執筆。

★大山と金氏(綾瀬市)

昨年12月永眠された。80歳

▽お便り△

★尼緑之助氏(いずも川柳

会主宰・本社参事)は、11

月23日、島根県より県芸術

文化発足20周年を記念して

功労者表彰をされた。

★本田恵二郎氏(倉敷市・

本社参事)

新同人紹介

河原 惠美子

薫風・白汀・清泉・はるみ推薦

久谷 まこと

緑之助・独仙・よし子推薦

「児島郵便局に「川柳ボス

ト」が設置されて五ヵ月、

投句がどんどんふえ続けて

いますが、12月に岡山県立

児島高校にも風流な川柳ポ

ストが設置されました。ど

う進展するか、興味万点で

眺めています」

★二宗吟平氏(岡山県・本

社理事)

「理事に新任されて感激し

ています。御指導のほどを」

★竹中綾珠氏(芦屋市)

「12月12日退院し、リハビ

リだけが仕事の日々を送っ

ています」

★朝倉大柏氏(旭川市)

「明けましておめでとござ

います。今年もよろしく

お願いします。曇り時々

雪、晴れ間もあります」と

いう子報が毎日です」

▽訂正△

■1月号44P3行目

とび跳ねる牛に

大地の陽の匂い

寒中お見舞い申し上げます

植山 武助 林 春栄

狭間 希久志 高橋 よし子

宮園 射月芳 島崎 富志子

芳地 狸村 古野 ひで

庄司 佳生 清野 こう

真崎 浪速子 原 さよ子

金崎 ゆづる 吉水 照江

赤塚 楽天 藪野 けい子

岩滝 圭一 神藤 歌子

三輪 通彦 池田 寿美子

岩佐 ダン吉 真崎 加代子

富田 みのる 高橋 幸代

福浦 勝晴 高橋 操子

岸和田川柳会

事務所 岸和田市土生町一九八九一八

高橋 操子内

電話 〇七二四(二三)〇〇四九

藤村の女川柳句集

「ともしび」発刊記念

本社 一月句会

一月七日(木) 午後六時

メンズフアツションセンター

戊辰の新春うららかに明け、藤村の女川柳句集「ともしび」発刊記念と、おめでた二重の一月句会。会場は早々と満席の状況。毎月このくらいの出席を本年は期待したいものだ。定期開会。恒例の月間賞杯永久保持者(西山幸)、本社句会全出席者(37名)の表彰のあと句集発刊を祝う祝電が披露され、次いで愛染帖賞、茴香の花賞の第一回受賞者の表彰花束贈呈と、華やかな雰囲気盛り上げる。おはなしはメ女さんを「お母さん」と呼ぶ黒川紫香氏。戦前から戦後へ離婚や五人の子の育児といろいろ苦労されてきたメ女さんの句には芯の強い生活の匂いが漂っている、と句集「ともしび」から父の座、母の櫛、母鳥子鳥「花に風」から「ふるさと」船出「各項目毎に句を鑑賞、喜寿を迎えられたが、これ

からも暮らしの中の句を作りつづけてほしいと結ばれた。

初出席は小池しげお(松原)、松井かなめ(和歌山)、田中みね(和歌山)の三氏。

今月の月間賞は板尾岳人氏が獲得。

(S)

祝電拝受(敬称略)

大原川柳社・きやらぼく一同・東野大八・堀江正朗、芳子・八木千代・米澤暁明・中原胤人・小林妻子

(進行)天笑(受付)月子
(記録)金太・射月芳・山久

出席者―季柳子・柳影・白溪子・笛生・佳秋・萬的・凡九郎・水客・英子・幸・狸村・登志代・太茂津・庸佑・メ女・眉水・勝晴・紫香・智子・春蘭・喜風・杜的・みね・かなめ・千秀・登志実・千代三・重人・作二郎・颯云児・隆二・天笑・月子・白峰・典子・薰風・池田寿美子・形水・正坊・悦郎・しげお・金太・白兎・章久・英王子・規不風・あいき・柳宏子・勝美・冬葉・美房・東雲・幹斎・敏射月芳・たつお・文秋・三男・柳伸・小路・はつ絵・みつ子・いわゑ・山久・鬼遊・洋敏・頂留子・栞・弥生・史好・寿美・昭子・岳人・美代子・楓楽・度・タン吉・美智子・亜成・吐来・雀踊子・一二三・吸江・藤子・寿子

席題「ともしび」 中田 たつお 選

落ち武者の村にホテルの灯が赤い
ともしびを求め駆け込む直指庵
ともしびを目標にする北の熊
終列車出たらし駅の灯が消える
ともしびは豆電球で喪に服し
その一言で胸に灯りがつきました
ともしびがゆっくりゆれて外は雪
何を追う漁火小雪舞い始め
見栄も気負いもなくともしびが揺れる
雪しんしん逆縁の灯が揺れている
母子してともしび明日の糧とする
ともしびが消える心の友が逝く
無影灯のちの重さみつめおり
雪おんな待つともしびは消されない
受験子の灯が消え母の灯も消える
京の灯はとろとろ五色豆転ぶ
ともしびの向うで揺れている昔
部屋中のともしび点しひとりいる
ライバルの灯し火がまだ点いている
ともしびが雪の下から洩れてくる
ともしびが消えてさみしい炭坑の街
ともしびへ母の願いがなくなる
ポケットにともしびがあり汽車に乗る
ともしびに愛の波長が深くなる
灯台がともると風い海になる
ともしびを大切にまで冬籠り
秘仏への暗い一灯春遠り
ともしびが揺れ正月の菜をきざむ
隅々へ善人の灯の薄明り

太茂津 寿美子 東雲 杜的 重人 いわゑ 狸村 笛生 白兎 みつ子 月子 正坊 みつ子 千秀 三男 萬的 美代子 美智子 水客 颯云児 雀踊子 天笑 女 幸 智子 勝美 勝美 作二郎 勝美

足元を照らすともしびだけで満つ
 灯を点すことで始まる寡婦の朝
 棧橋の雨ともしびが遠くなる
 ご先祖の声をともしびからもらう
 灯を消して私も寝ます仏さま
 いつ来ても温い灯がある母の部屋
 ともしびは仏縁母の歳数う
 ともしびが点滅風に病んでいる
 ともしびのうしろに母の瞳がだぶる
 沖に出るともしび風を恋しがる
 島の灯にまだ父母がいる安堵
 ともしびが裁く不幸の罪いくつ

席題「村」

山添眉水選

村起こし草履草鞋を教えます
 過疎の村おまわりさんも不在がち
 駐在さんも来資村の運動会
 村の話をするとすこし弱くなる
 都落ちわが生い立ちの村寒し
 三ヶ日だけ賑やかだった過疎の村
 村は春七草粥が煮えている
 もう消えた村にわたしの過去がある
 文化財の保存に汲々してる村
 年金で自適村から出たがらず
 過疎の村花嫁さんの来るニュース
 日の丸を憎む読谷村の風
 酪農の村へ清楚なお嫁の荷
 寒村というところにも人が住む
 目的もなく青年が村をでる

三男 英子 柳伸 規不風 太茂津 英子 作二郎 はつ絵 天笑 岳人 吐来 たつお
 幸 佳秋 三男 白溪子 いわゑ たつお 小路 登志実 度

名物の一つを種に村おこし
 一年に一度はきつと帰る村
 氏神とお寺と村の地図がある
 トントンと吊橋駆ける村の子等
 台詞違えてヤンヤ湧く村芝居
 この村をまだ出たことのない白寿
 村長の子も新人類の本に凝り
 村一番の牛を育てた三代目
 国道に村を汚した排気ガス
 村の土踏んで元氣を取り戻す
 この村だけは大人りの忠治劇
 仰天は村に信号ついていた
 こうのとりが久しく飛んで来ない村
 廃校が丘に残っただけの村
 どの家も親せきばかりの村であり
 村人にびよこんと頭下げられる
 米下がける噂に寒い村の風
 村はずれの地蔵に椿濃く咲かず
 かずら橋渡れば土葬の村がある
 減反で村の心が失われ
 村捨てる朝もきつちり歯を磨く
 村人も牛も同んなじ水が好き
 村おこししばらく様子みていよう
 村長の同じ苗字がたんといふ
 海女の村それぞれ海の歳をとる
 正月の村は新車で混んでいる
 村おこし一本杉が見つめてる
 井戸水がうまいこの村離れまい
 わが村は今でも汽車が汽車を待つ

射月芳 智子 笛生 女 千代三 紫香 喜風 藤子 喜風 規不風 千代三 典子 楓楽 三男 紫生 紫香 重人 作二郎 正坊 洋敏 月子 しげお 天笑 射月芳 作二郎 天笑 みつ子 佳秋 度

農民もあの手この手で村おこし
 兼題「花形」
 入社時は花形産業だったのに
 裏方の苦勞花形しっている
 花形は今も昔も富士の山
 花形の子役が泣かす旅一座
 辰巳島田も老いて時代の波に消え
 三ヶ日花形にされ児は帰る
 花形になりすましてるオイラン草
 花形が倒れて不入りになる芝居
 花形が幾度もめつた斬りにあう
 花形と騒がれていてひとりぼち
 叩かれて花形力士背をすくめ
 花形の落日へ元の妻の愛
 SLが花形だった頃の恋い
 花形も太鼓を叩く旅役者
 花形より脇役にいる好きな女
 潮時を知る花形に沸く拍手
 花形になる夢捨てた馬の脚
 うちの花形芳紀三歳にて候
 ダメ親父だけと吾が家のスターです
 花形の素顔は地味な親孝行
 花形はサーカス小屋の檻の中
 花形になつても路地に住んでいる
 花形の夫を持って疲れ切る
 祝宴に花形選手のかくし芸
 花形にまだ内縁のままの妻
 花形を支えひっそり福寿草

眉水 度 山久 みつ子 新造 幸一 美代子 あいき 綾珠 太茂津 美智子 新造 亜成 笛生 千代三 三男 喜風 颯云児 いわゑ みつ子 英壬子 美代子 正坊 月子 かなめ たつお 柳伸

声の花形亡母はテープに生きつつく
 村芝居花形だけに金が降る
 老花形杉村春子は衰えす
 花形になると自分を見失う
 花形の影が寂しい貌をする
 花形になつて重荷背負わされ
 花形の北の訛りがとても好き
 山茶花を花形にして冬の庭
 花形もお茶汲みをする楽屋裏
 花形が泣かせる芝居してくれる
 花形の過去は言わない佗び住居
 花形も話せば長い過去をもち
 生々流転いま花形で立つ舞台
 花形も素うどんすするどき廻り
 無名から一躍花形納税者

兼題「矢」 福本英子選

口出しをするたび矢傷増えて行く
 三本の矢がそれぞれの意志をもち
 味方から矢が飛んできたあわてよう
 キスマーク一種の毒矢かも知れぬ
 恋の矢に当たつた男病んでいる
 矢印の終点鬼が待つていた
 ふるさとを忘れた日から矢が錆びる
 矢の尽きた男を濡らす淀の雨
 矢印の道は私を駄目にする
 矢印はあるが開かない非常口
 標的が時々変る息子の矢
 流れ矢の傷は他人に見せられぬ

規不風	紫香	眉水	雀踊子	大茂津	隆二	しげお	耕花	寿子	冬葉	美房	智子	三男	千秀	千女	頂留子	鬼遊	庸佑	幹齊	いわゑ	いわゑ	作二郎	たつお	ダン吉	杜的	月子	三男		
矢印に時々陥し穴がある	一の矢も二の矢も恋に届かない	間違つて立つかも知れぬ白羽の矢	キュービットの手元狂つた矢に当たり	鎗矢を響かせ果立つ児を送る	火の矢などとかぬ位置に椅子をおく	矢印に叛くときつく火傷する	矢車カラカラそろそろあんよ出来る頃	年金の暮しに矢だま底をつく	八方破れの構えでいつも矢は持たぬ	愛の矢はずれてばかりまだひとり	自叙伝の伏字辺りに矢が刺さる	春までは待てぬ白羽の矢を放つ	拔擢の背なに嫉妬の矢が刺さる	矢面に立ちたがっている悪女	煩惱にいつも小さい矢がささる	矢印が休んで行けと峠茶屋	アドバイス無視して不覚の矢を受ける	標的があと一本の矢をわらう	二の矢には未練な文がついてある	三本の矢を束ねても敵わない	ピエロも勝負師一本の矢は持っている	矢面の傷はわたしの勲章だ	札束の裏に矢印書いてある	矢も盾もたまらず母の膝ぬらす	風はわたしにいつも無色の矢を放つ	意気揚々破魔矢と父の肩車	流れ矢のごときに当りたくはない	のすこし外す白羽の憎らしさ
洋敏	一二三	美代子	博子	荒介	智子	風云児	みつ子	白峰	太茂津	昭子	美代子	藤子	風云児	朧	新造	新造	幸	佳秋	水客	天笑	三男	杜的	妻代	千代	規不風	笛生	英子	

第十二回全日本川柳大会

日時 昭和63年6月12日午前10時
 会場 千葉ニューパークホテル別館
 (千葉市港七―三・京葉線千葉港)

駅前

宿題第一部(事前投句5月10日締め切り)

- 「野心」 白井 花戦選
- 「花」 志水 剣人選
- 「酒」 森 紫苑莊選

※3・5×18センチメートルの句箋に一枚に一句記入し、千五四二大阪市南区谷町七丁目一―三九新谷町第二ビル二〇六号「日本川柳協会大会係」あてに送って下さい。

宿題第二部(当日出句)

- 「ロビー」 黒川 紫香選
- 「書く」 佐藤 良子選
- 「答」 玉野可川人選
- 「夜明け」 猿田 寒坊選

句数 第一部・二部共2句吐
 第一部投句料 千円(振替口座：大阪七―三五七五)

主催 日本川柳協会

老地獄壇

締切毎月25日。必ず原稿用紙使用のこと。
作品は雅号も含めて20字まで。
担当・玉置重人

担当・玉置重人

翠洋会

中西兼治郎報

北風にいちよう吹雪の御堂筋
ミニスカート尖端はいて寒くない
顔見世は老母の意欲を来年へ
金かねと金が仇の金が好き
お供えを済ませて今日も忘年会
十五夜にがまん胸がふつと切れ
鳥めぐりいつかどこかで見たような
お隣の歳暮預る判ばかり
匙投げた医者が患者に嘘を言う
カーテンを開け早春の香を入れる
げんまん頃は仲間が多かった
兼六園見事な松の雪囲い
鍋もの煮えるのとつれて盛り上がり
金箔の並ぶが如く並び待つ
バックミラー今日のお客は話し好き
寒空の行列それは宝くじ
叱るまいわたしもあつた若い頃
忙しいのちと思つ砂時計

西宮北川柳会

松本 一郎報
柳右子

兼治郎 兼治郎
さと美 美津枝
君子 文子
良江 佳秋
東雲 照子
宏子 仙吉郎
光子 綾子
みつ子 登志実
いつを 鬼遊

初孫の片手片手にある祈り
教育勅語片手で鞭をもつていた
悪筆は亡父の右手の血が流れ
ぼろぼろの地図を片手に生き延びる
ああ歳月十二月八日を没にする
一匹のペット葬る冬の真婦
冬こもり雪沓一足干してある
メモをした横へお菓子を置いて出る
蕎麦ばうろ語尾があるい京訛り
川底の歳月石をまるくする
妻入院案外器用にネギささむ
人混みに追われて寒い暮れの街
左手が未練な握手たしなめる
疵を持つ片手も絶え間なく動く
菓子を肴に飲めるからややこしい
歳月やお湯も溢れたままの毬
人情もお湯も溢れる街の風呂
歳月が経っても母は美しい
歳月の中に子が居り孫が居る
露天風呂桜透かして飛驒の雪
歳月の絵皿に残す彩一つ
歳月がきれいな涙にしてくれる
過疎守る老母にきびしい雪おろし
歳月がくれた幸せ嘘のよう
竹割れの音も秘湯の雪あかり
菓子折りの長い話を聞いている
道ならぬ恋に吹雪が舞い狂う
歳月をささむ柱と住むひとり
赴任地は雪が深いと二三行
犬の糞拾いつ散歩の距離が伸び
ライバルといずれ握手をする片手

千津子 千津子
しげお 武庫坊
武庫坊 武庫坊
風云児 風云児
和友 和友
光代 光代
眉水 眉水
きよ子 正坊
正坊 正坊
はつ絵 静子
静子 笑女
笑女 佳秋
佳秋 嘉矩
嘉矩 伊三郎
伊三郎 英子
英子 陽露子
陽露子 一郎
一郎 紀雄
紀雄 杜的
杜的 園歩
園歩 よし津
よし津 柳伸
柳伸 いわゑ
いわゑ 年代
年代 春子
春子 みち子
みち子 青珠
青珠 園芳子
園芳子 園芳子

親切が過ぎて善人煙たがれ
耐えぬいた歳月老母も重かるう
歳月の流れ止めたいときもある
五色豆コロコロ京に春近く
問わず語りの身の上ばなし雪が舞う
歳月の変化で遺書もかき換える
別れかねばならぬ運命の雪明かり
学校から帰ると雪が解けていた
雪やこんこん母のない子の子守歌
片手だけで昔の唄を弾いてみる
女の襟に降るあたたかい雪である
仏像の片手はする人をまち
歳月や養老院の顔で逢う
歳月のとどかぬとこにいる女
花の名を沢山知っていてひとり
パイプルを否定しているその片手
落葉舞う還らぬ夢の永久に生き
灰皿も別れ話は嫌だろうな
生命線みだれ気になる片手でず
呑みに来て先月分を置いてゆき
照準がビタリと北を指している
どこに住んでも税務署が迫ってくる
釣れたかと釣れない時はよく聞かれ
たこ焼がが好きで並んで照れており
針一本落したばかり這いまわる
この手鍋片手で下げて来た女房
見る電話聞くより早いフアクシミリ
捨て猫と話の出来る孫の顔
母の手に見事なセーター編めてゆく
来年はいつもと違う竜の夢
思い出のタンゴに優しいシャンデリア

柳影 柳影
保蔵 保蔵
萬的 萬的
惠美子 惠美子
よ志子 よ志子
三笑子 三笑子
白溪子 白溪子
正一 正一
香子 香子
水声 水声
定人 定人
花村 花村
伊升 伊升
みつ子 みつ子
天樹 天樹
千世子 千世子
千秀 千秀
ノブ ノブ
曲人手 曲人手
良征 良征
俊子 俊子
六郎太 六郎太
万亀子 万亀子
茂坊 茂坊
文夫 文夫
善太郎 善太郎
紫春 紫春
森生 森生
博子 博子

片手上げ恋の別れを知る夜更け
拾い手のないアルミ貨が光つてる
子算内済めば二次会もつ決まり
筆不精先へ進めずお茶にする
歳月が洋酒の味を丸くする
妻の忌にふと歳月を丸くする

高槻川柳サークル卯の花
西雲街が素顔を覗かせる
街で見た美人はお金貸した人
ふるさとへ帰ろう街は病んでいる
帰って来た街角餃子の匂いする
Uターン見捨てた街がなつかしい
終点の街で行き場のない孤独
好きな人が住んでる街の灯がぬくい
この街の此処シューシャンボーイ居た処

鶴亀の袱沙の下の御受書
赤い羽根小さな善意の領収書
領収書女将だまって無地をくれ
親が子にひとます書かす領収書
くやみ述べてから葬儀屋の領収書
むらまつり候文の領収書
色街に捨てられていた領収書
夫には見せぬ毛皮の領収書
領収書頭割りして旅終る
詐欺だとは思いたくない領収書
領収書白紙で貰う悪いヤツ
成績が上がらず上司に責められる
責められた涙が登格拒否をする
口答え母の無口に責められる

山久
御前
一進
一退
紫香
芳仙
正彦
多賀子
御芳子
越子
千枝子
佐志子
杜的
庸佑
里子
草木
春風
とある
秀男
静江
恵美子
英子
風云児
外吉
永次
曲ん手
花代子
関芳子

下心あるから貴女を責めている
お互いの落ち度を責めて寒くなる
責任をとって会社を辞めました
受話器から予感どおり責めてくる
月末の財布を責める妻の愚痴
土壇場になれば涙が責めてくる
落ちるなと責める手順を刑事読む
影法師紅葉の道を追つてくる
豊かさで落穂を拾う姿消え
神無月神話の神もピクニック
父の忌や床に一句と酒の膳
わだかまり見えぬ写真の嫁姑
困ります腹の立つ日と立たぬ日と
好き嫌い多い夫で困ります
戦争も夜汽車も遠くなりました
巢立つ子へ見えぬように紐をつけ
早朝の犬うちの門柱好きらしい
もめている夫婦寄せ鍋食べている
故郷のなまりが好きで客が増え
砂ほりり出物を探す御縁日
松茸の香りだけするお吸物
お歳暮を二人でえらぶ若夫婦
今日からは天下晴れての無職なり
恋をした数で女になりました
肩書がとれた男の日向はこ
モノトーン冬のお寺の冬の詩
あくびしたのはひとりで港まだ眠る
仏心も消えて人生柿を食う
発止発止と闇を叩いているばかり
人がみな立派に見えてたそがれる
海老フライぐらいでいばることはない

輝夫
百合子
陽露子
洋子
如洲
紫香
栄子
泰弘
満喜
森生
光代
悦水
眉夫
暢子
冬葉
房子
節子
武茂
彰一
逸子
享女
メ秋
佳秋
萬的
作一郎
真笑
年代
鬼遊

かたちだけ鉦を叩いている反省
わかってりやいと何にも言わぬ父
斬られ役決めてドラマが回り出す
先決を後に回して出た被害
捨て鉢になれば上司に睨まれる
捨てる鉢にたぐらうもそっぽ向く
美容院出て人混みの中に消え
雑踏ははずれて涙こぼれ出す
肩書がないと手軽にあしらわれ
クレジット手軽に使いツケに泣く
反省も意志の弱さの鉄格子
反省をする気にならなげんだ月
生きたくば先ず働けと釜ヶ崎
胴上げへ油断をさせるのが先決
捨て鉢に単車が群れて闇を行く
捨て鉢になれば世間に風がない
雑踏を職のないのが闊歩する
手軽さに負けて落ち込む蟻地獄
反省がまたもトンネルから出火
住民の意志先決と民主主義
捨てる鉢を晒すと恥が深くなる
橋筋はしづきが強い病みあがり
雑踏へ私も溶けて行く一人
手軽さに深みにはまっていくローン
手軽さへなまけ心が首を出す
人老いてはじめて道を振り返る
先決にまっただがかる母の舟
秋の柄先ずパトロンを口説かねば
捨て鉢で進んだ道に陽があたる

駒つなぎ柳会
里
小路報
美津枝
寿人
国公
しんじ
雅風
幸男
眉水
比沙胡
曲ん手
新造
好子
甘平
章平
規不風
柳右子
東雲
博子
悟郎
正一
憲太郎
善美
勝美
潔
文秋
庸佑
度
壯之助
冬葉
信治
浩一郎

ややくそを優しく朝の陽が包む
雑踏に紛れて妻と手をつなぐ
雑踏をきざみシグナル無表情
妻の知恵手軽なウソで切り抜ける
芸の無い女手軽に脱ぐと言う
親不孝ばかりだった父の通夜
生き残る地球へ核を考へる
雑踏に住んで純情さが欠ける
雑踏のだあれも事件気付かない
手軽さともたりのなさの販売機
捨て鉢になった女の力瘤
友情の輪に捨て鉢が溶けてゆく
雑踏にしよばんと若いブラカード

柳宏子
重人
頂留子
月子
素灯
笛生
千代三
天笑
幸治
喜代治
柳伸
小路

子に夢が消えて近頃孫自慢
責任がないから孫の数自慢
孫三人笑い袋を提げて来た
仏壇の菓子へ鳴らした孫の鐘
孫の顔祖母似と言われ尚可愛い
孫のあと追って夜店をかけ回り
孫も早や先生になり我老いる
ひい孫の泣き声聞けぬ老いの耳
ひい孫願かない国体へ
日曜の孫達稲刈り当てにされ
この爺も孫の嫁入り見たくなり
孫情け初サラリーのプレゼント
内孫に肩持ちたいが角が立つ

鬼遊報
泰成
英一
友一
重善
龍襄
トシエ
道子
春子
恵以子
その
シマ子
章子
公子
百子
はる

八尾市公民館柳教室 高杉
悪友の一人は生活必需品
落ちこんでほんと友が見えて来る
一周忌過ぎて茶飲みの友ができ
旧友とタイムスリップして一夜
忘れてた友から選挙頼まれる
幼な名で呼ばれる故郷の秋祭
相も変らず友の便りは孫のこと
ゆきひらをさげて見舞いに来てくれる
友だちは一人もいない受験生
友だちの愚痴を黙って聴いてやり
泣かされた相手の友の名をいわず
冷蔵庫勝手に開ける友と飲み
悪友も時には仏様に見え
友だちのおのろけを聴くにこり酒
ああ言えはこう言う友を今日も待ち
義理人情演歌地でゆく友がいる

鬼遊報
高速度の前でベルトをたしかめる
面倒なシートベルトに助けられ
軽く見たシートベルトに救われる
折角のチャンスに迷う気の弱さ
チャンス到来何をしているかたつむり
チャンスだとささやく天の声を聞く
窺外れヤングの走る暴走車
可能性秘めてヤングの塾通い
思想論ヤング時にはむきになり
傷を持つヤングに着いむきになり
席ゆするヤングの瞳澄んでいる
松茸の値段も知らぬ病み上り
松茸がすき通っていた碗の中
すただけ貰って松茸買にくい
松茸を買って女へ後指

南海川柳
廣井季柳子報
一進
庸美
庸佑
圭水
曲ん手
真砂
重之
しづ子
覚然坊
悦郎
重人
凡子
季柳子
志華子
千万子

子に夢が消えて近頃孫自慢
責任がないから孫の数自慢
孫三人笑い袋を提げて来た
仏壇の菓子へ鳴らした孫の鐘
孫の顔祖母似と言われ尚可愛い
孫のあと追って夜店をかけ回り
孫も早や先生になり我老いる
ひい孫の泣き声聞けぬ老いの耳
ひい孫願かない国体へ
日曜の孫達稲刈り当てにされ
この爺も孫の嫁入り見たくなり
孫情け初サラリーのプレゼント
内孫に肩持ちたいが角が立つ

行楽に縁もなかつた母の指
倉吉川柳会
渡辺
善句報
康子

我が田にも水が引けるか竹下君
曆やせ師走の風が吹いて来る
栄転の裏でひそかに紐を引く
曆には俺の死ぬ日が書いてない
引き際のよい会長で惜しまれる
引退の曆江川の肩になぞ
新しい曆に発奮だけはする
時雨れると女曆をかけかえる
旧曆も復活しそつれ口調
十二月になると眼つれか怪しくなる
行楽の秋へ仲間の雨男
辞書引いて漢詩の意味にふと迷う
行楽地とまちがえました人焼場
十二月せめて笑顔を忘れまい
行楽地大阪弁と九州弁
引金の用意はいつも出来ている
鬼と和し仏と和した行楽地
トナカイの肉喰い過ぎた十二月
行楽先の地藏カメラに入れてくる
十二月氏神様も忙しい
掃き寄せる花のむくろよ十二月
綱引きの相手は神に決まるとる
会者定難行楽地の靴の跡
十二月八日ハワイへハネムーン
この世へはちよつと丸見に寄つただけ
一月の曆はぜんまいよく曆
野遊びに行つたつもり握り飯

豊作
進一
たみ
和江
行江
珍顔
一眺
鶴翁
文古
健太郎
八恵子
みつる

池
富柳会
森子報
義雄
優
曲ん手

時々は孫王様の座を占める
和尚さんお経も走るお盆月
ぼっかりと胸に大穴ぼくの恋
大穴を追って浮世があと僅か
万一の一大穴あけられる
管理職集めて和尚特訓し
王様の椅子は張替えなどしない
和尚のサミット平和の祈り深うする
手切金だんだん女を貝にする
生ぐさと呼ばれ頼りになる和尚
大穴を当てて故郷遠くする
満ち足りた暮しに王様失語症
今日だけは文化祭にしてくれる酒

静枝 花子 伊庭 勇 田中 勇
庄次 昭水 文次 維久子
柳太 美房 岳人 花梢
森子 愛論報 勝美 滋啓
比沙胡 正坊 度 作二郎
信太郎 白兔 アキラ 普吾
百合枝 美子 頂留子 章久
孤舟 悦郎 重郎

堀川柳会十二月句会 河内 月子報
二番まで唄うて喉が恥をかき
檀山を駆けると鬼に叱られる
亡母に逢う望みが見える墓の裏
標の向って駆けるのは男
争いびつたらあかんぞと狼煙上げておく
どの種になるから残さない
どの絵馬も大きな望み持ちすぎる
ひと言を残していつも掃りはる
残留孤兒いくさの傷を見せに来る
喉仏酒の匂いに動き出す
酔う程に狼煙を上げる不平組
喉笛は虚々実々の芸をする
人間になりたい望みもつ狸
残り火と云うて程よく燃えている
自由化に狼煙上げたい過疎の鎌
雲つかむような望みは親ゆずり
再建の狼煙を上げたJR
望みだけ大きく持てと教えられ
一票が欲しくて喉をからしめる
残業がなくてこたえた台所
鳥たちが狼煙をあける造成地
残るのは命だろうか預金帳
大それた望みで神を笑わせる
十二月今年も悔いが残ります
鶴彬の上げた狼煙を忘れまい
喉仏だけが女になり切れず
喉から手出そうな話持つてくる
残り火はいつか火を噴く恐れ持つ
と忘れが喉のあたりでじれったい
喉に骨ひっつけたまま早寝する

白漢子 風云児 岳人 金太
頂留子 泰子 鬼遊 凡九郎
新造 曲ん手 信博 秋風
妻子 博子 妻 道女
真柳 金三郎 素灯 かりん
半銭 小雪 春香 榊楓
紀美女 東雲 月子

出た物は残さず食べる悪い癖
三幸川柳教室 桜井 千秀報
ヒットすりゃ続々編で泥鎗追う
三日坊主返上してから欲が出る
以下次号それから先を推理する
出血をつづけ倒れぬパチンコ屋
職安へつづき不況を吹き溜める
寝た切りが気をもんでいる雨つづき
あすの日へ続く時計のねじを巻く
人生を模索しつつ黄昏る
ひとり羽化母の祈りはまだつづく
感情のするどき童年かも知れず 中北幸子
竜が抱く珠は真心かもしれぬ 桂香
暮近し竜彫るノミが徹夜する 金一

佳句地10選 (前月号から)

神夏磯道子選

中心で指揮棒をふる水すまし 君子
気が急いでいるのにゆっくり物言う 博泉
妻の背へいつも無言でありがとう 素灯
脱さらのうとん屋鉢に凝りすぎる みつ子
つまずいた石と話がしたくなり いわゑ
人形の生命を入れる細い筆鬨 芳子
ハンカチに小さな夢を折りたたむ 風云児
来年も生きるつもりの花の種 正坊
沈黙の中から椎の実がはじく 登美也
敬遠のボール投げるも処世術 倫子

竜だつてきつと持つてる母の顔
昔ばなし竜を信じている瞳
日なたほ小さな竜巻かけ抜ける
ジェット機におかぶ取られた昇り竜
駅前で拾った恋と添い遂げる
発車時刻せまってパチンコよく入り
またもとの駅前に来て地図を見る
駅前で錦を飾る大銀杏
駅前で自転車あるじ待つて濡れ
改札に待ち人ついに見えず秋
故里の駅に稲穂のにおい満ち
駅前に帰つてこない縄電車
盆踊り駅員さんも出て踊る
ジョギングを兼ねて見送る駅の前
駅前の放置自転車にも主張
骨壺を小袖に包む雪しぐれ
骨盤の広さで妻の座を守る

美子 カツミ 重次 智水庵
みね 邦郎 正好 護
和子 晏 上西幸子 朱夏
かなめ 定子 鉄治 千秀 靖子
小西 雄々報 亜弥 独歩 節枝 日枝子
由多香 玲子 雅水 荒介 長三 千代 朗子 洋子 かつみ

鈴なりのみかん夕陽がほめ称え
すばらしいジョークに包む含み針
あやとりの橋を渡つてきた出逢い
褒賞を運のうてなに飾つても
表彰を受けてもやっぱり平社員
芋蔓で身内をつなぐ選挙前
川柳ささやま 脇田 米朝報
花恋いし蜜の甘さへ誘われる
考えの甘さ突かれて黙りこみ
妻の掌に甘えて古稀に辿りつく
甘酒も生姜程よく母の味
夜もすがら母は遠くの子を想い
鉄窓の夜星に母を恋う懺悔
夜なべする嫁へ湯加減ととのえる
あの笑顔あの声浮かぶ通夜の席
掛け声で苦勞大根安く売り
大根を漬けて今年をしめくくる
大根と叱られみがいた舞扇
大根の器量には勝てぬ粧つても
直線の道で時々それたがる
道しるべ右か左か迷いおり
道ならぬ恋におぼれた崖つづち
ローマ字も知らねば困る道しるべ
川柳藤井寺 赤木 和子報
丹精の菊ほめてから無心言つ
齡取ればロボットに似た歩き方
共白髪私あなたの風車
どんな夢抱いているのか膝の猫
父よりも高い樹になれ千歳飴
定年のないロボットのうす笑い
ロボットに押しつぶされる日がくるぞ

千春 与根一 瑞枝 紫映 鶴丸 雄々
可住 ひか平 とみ子 愛子 米朝 百合子
ヒサ子 靖子 越山 貞子 ゆう也
和子 はる江 金之助 まさの
志洋 きよし ときお スミ 美代子 吸江 つかこ

明日にまた夢ありそんな余命持つ
胎動に父となる耳そつと当て
松茸を喰うだけかいて店を出る
ロボットがケラケラ笑う日の恐怖
テレビ又きょうさん松茸見せてくれ
穴のないちくわロボットのストライキ
松茸は頂く物と決めている
交代の根まわしうまい新総理
松茸の赤字をうめる鯖鱈
何もかも日本に見られた露天風呂
国際犯日本も一流国となる
ロボットに叱られている交叉点
黒幕の指図でロボット動き出し
古代史が土の下から語りかけ
家ではロボット妻の意のまま動いてる
ロボットに朝のコーヒー注がれる
熟成したワインでありたい我が余生
霧ヶ峰真綿の霧にある孤独
新総裁お金集めのうまい人
どうしても勝てぬ相手の歩が笑う
押入れにみんな押込む不意の客
門限を破りたくなる好きな人
耳栓をしても地球の軋む音
手鏡に留守の不満のありつたけ
ポーターを貰つて退めるか決めており
乗つてくる風の便り待ちつつつけ
衣裳箱女の夢を折りたたみ
あほらしい誰にも言えぬ夢を見た
やるせない夢の余情を抱きしめる
良い夢を見させてくれた遠い人
女ゆかしや髪がいのちであった頃

三郎 治秀 本蔭 与呂志 繁男 伴子 祐二 婦美枝 敦子 みのる 末一 かな女
うめ 和美 雅美 初枝 清心 喜道 ふゆ 昭子 美房 正枝 正人 かよ 美佐 秋園 秀伸 和子

久世川柳クラブ

二宗 吟平報

順番が狂い長生き悲しませ
 欲しかった子供心を子にあたえ
 親芋が畑の隅で忘れられ
 花と住む余生に虹の橋をかけ
 子を庇う愛の深きよ母の傘
 するそくに伸びたへちまのすねた顔
 深い傷生きて耐えぬくと根生
 むくむくと落葉もち上げ並ぶ松茸
 稲刈りを十九号に邪魔をされ
 祭寿司郵送します母の味
 恋をする度に紫陽花色を変え
 赤い羽根胸に善意の輪を広げ
 明暗に馴れて人生苦にならず
 臭い程嚙があつて結ばれる
 臭いとは思つてみたが又つられ
 几帳面過ぎて挨拶水臭い
 瓦斯臭い急ぎあちこち開けはなし
 学習に追われどしで遊ばれず
 じいちゃんも料理を習う時代が来
 習つてもオウムで朝も晩もない
 又一つ習うて古希の趣味が増え
 売られ行く牛に涙のえさをやり
 売り言葉聞かぬふりして子をあやす
 田圃売るその日仏壇そつと閉め
 心意気売つて秤はピンとはね
 郷土売る桃売り娘駅に立ち
 上向いて咲いた日雨に叩かれる
 打吹川柳会 江原とみお報

つた子 千代女 ふさえ 山人 山恒 英子 樂山 勝子 半仙 定山 禅心 伊久栄 種人 虞人 旭泉 光水 邦人 知代子 美恵子 吟平 甫正 雅紅 静香 あき子 さわえ 秀香 賀平 弘報 堂

和を保つ妻の才覚だけ光り
 三方に握手するには手が足りず
 泣かされたおとんは一番親思い
 消火器の説明書が長すぎる
 安楽死かならずできる本を読む
 豊作を授けて神は恨まれる
 米価どうあれ豊作の秋祭
 艶っぽい話に爺も耳を立て
 目薬を二滴そこから老いはじめ
 想い出の渦へ浮いたり沈んだり
 正論を阻止する拍手多数決
 ゲーム機の指まえ競う細い腕
 ひとりではないよ千羽の鶴がいる
 よこしまな心に太い杭を打ち
 仁徳は石碑となつて慕われる
 ワンテンポおくれて汽笛鳴らす母
 ゴールインへ銭のかからぬ線をひく
 むらくも川柳会 藤井 明報

孝美 柳風 雀踊子 たつみ 雄々 紫映 道郎 梅苗 早苗 規仔 吉朗 宗光 日枝子 亮二 巡歩 幸子 とみお 明報

本気だと言えど不安まだ消えず
 誘われて気乗り卓球腕が鳴る
 国訛り気楽に話す野良婦り
 菊人形傘寿記念に仕立上げ
 一年中苦労かさねて出来た菊
 役退いて余生気楽な庭いじり
 秋日和気乗りいそいで靴を履く
 気乗りせぬ彼女乗り気にした服
 庭先にならんだ菊が友を呼ぶ
 野菊咲く娘の在所へ祭り客
 娘の縁談まず両親が大乗り気
 菊香り影あてやかにお茶の席
 友誘う気楽で出掛ける趣味の会
 娘は三十気楽な父も焦りだす
 やさしきで心の扉開けておく
 思いやり優しさ心の宝とし
 やさしさを花に托して老いの道
 賑やかが好きで祭りの音頭とる
 気がねなく本音出てくる同窓会
 気がねなく内輪話もできる友
 どの顔も優しく見える地藏さん
 二、三日本気で見たら阿呆らしき
 その調子天まで届けボクの風
 負けられぬ孫と将棋の差し向い
 読み書きへほとほと年を知らされる
 佐川川柳 赤川 菊野報

武衛 ナツエ 緑水 蚊雪 峰雪 克子 三津江 ふみ女 梅園 幸子 清祥 よし美 昌子 由郎 保子 ふうさえ 昭子 節枝 八重子 正朗 芳子 明朗 みどり 憲一 天花 由記 暁耕 十面子

仕事着の親の背をみて子は育ち
 定年が仕事の鬼の牙を抜く
 現実はそのかそくかと猪口を汲み
 振り出しに戻れば幾らでもある仕事
 定年の仕事に未練多過ぎる
 爪染めた指も仕事に生きる指
 太陽を一人じめして野良仕事

川柳高知

母さんが領いている安堵感
 待つ人の居る幸せな膳を盛る
 ウィンドの姉妹を止める秋の彩
 茶柱が立って男の苦笑い
 翔んでいる女に合わぬ台所
 CMをまねて手料理若いママ
 齢が邪魔求人細々小商い
 広告も出来ず細々小商い
 広告のように効かない風邪薬
 CMの効果社運が動き出し
 広告が秋だ冬だと言ってくる
 反応がほしい女の泣き落とし
 反応のふい男で物足らず
 反応がまだ現れぬラブコール
 切り札をさげて男と差し向い

川柳塔唐津支部

如月の風にはためく日記帳
 この雪も喪服で見れば寒かろう
 噴火する島でも里の灯は恋し
 秋祭り今年も廻る奉賀帳
 銀髪になつて話題の多い人
 立ち話帽子で聞いている秋とんぼ
 激痛を押しても行かねばならぬ用

川竹

春枝
 俊子
 和広
 良久子
 幸泉
 玲
 功
 竹萌
 佳風
 嘉代
 節子
 菊野
 朱坊
 松風

久保

松風
 正敏報
 四郎
 虹汀
 高明
 朴竜
 あき
 旭恒
 花代

松風報

お気の毒訪問客に妻不在
 ヘルスメーター秋の私に嘘を言つ
 性格はどうあれ女の丸い膝
 静岡市川柳塔同好会
 永倉
 僕川報
 香代子
 正敏
 孤秀
 金吾
 紀次志
 定平
 孝平
 やす
 たま
 たき
 志げ
 つね
 千代
 きん
 きぬ
 みつ
 まつゑ
 静代
 喜平
 僕川

吉川

松風
 正敏報
 四郎
 虹汀
 高明
 朴竜
 あき
 旭恒
 花代

僕川報

余生とはこんなものかと孫を抱く
 世話好きはどこかでにくまれ損をする
 悔いも乗る手順狂つた膳の上
 縦横の見えない糸に生かされる
 追善釜嬉し悲しの花が咲く
 熟年は火の粉をかぶる恋もして
 人生双六この世はゲームの終りなし
 人生もゲームにくらべりやおもしろい
 目の色が変わつてしまふ掛ゲーム
 ゲーム機が百円玉を食べている
 一生のゲームと思つ夫婦仲
 天秤にかけて打算を考える
 川柳泉尾
 吉川
 寿美報
 トミ子
 途子
 美子
 光子
 白水
 弘子
 満州子
 美津子
 寿美

吉川

松風
 正敏報
 四郎
 虹汀
 高明
 朴竜
 あき
 旭恒
 花代

杜的報

シマ子
 三世
 三千代
 昭子
 美南子
 義一
 素子
 悦子
 淑子
 美代子
 シメ子

松川

松川
 杜的報
 ただし
 幸
 達子
 芳子
 武庫坊
 年代
 花代子
 美穂

生まじめに数揃つてる普茶料理

三百の樹齡に坐して寿をもらう

海越えて灯りが消えぬ黄葉山

昔むかし教わりし名ぞ万福寺

布袋さんのお腹にころろ預けたし

禪寺に人間臭き布袋尊

ひとり座す禪寺でく風私語

医者よりも一番知っている自覚

かも知れぬ自覚でよかつた検診日

自覚した日から友情深くなる

二度づとめ自覚の髭が邪魔をする

さあ二十歳十指に棲んでくる自覚

自覚せぬ子がかたくなに背を向ける

天職と自覚している菜葉服

頼られる柱と自覚した禁酒

赤トンボ故郷の土になる心算

見おさめの捻り人手に渡る土

パンの世も瑞穂の国に穂がたれる

米価はどうあれ捻りの秋祭

恋実りそうなムードがあるベンチ

じつぱりに捻ればよいと子を信じ

栄

(小)英子

はつ絵

楓

正坊

和友

陽露子

巨詩

(備)英子

静江

美智子

倫子

風云児

満津子

水客

春子

佳秋

道子

白浜子

光子

紫香

欠茶碗でよし野仏に花がある

わかあゆ川柳会

幕あいの科白は人に聞かされぬ

押しのけて幕を引くなどときとされる

レーガンも出雲弁には音をあげる

踊いたままでおれるか意地がある

やんわりとシルバー族へバスガイド

幕張つて手品師人を愚弄する

日が昇る今日のドラマの幕があき

九十四で逝きたる祖母の銀髪よ

躰いたぐらいで平気な若さです

手ごたえがあつたあつたよ隠し球

手ごたえは空しさ残す平手打ち

手ごたえを計るまき餌を気かけぬ

躰いたところで聞いたシンフォニー

矢面にたつて手ごたえのないピエロ

相生の続篇幕がまだ下りず

躰いたときも大空青かつた

川柳塔きやらばく

待合室病人同志で手を握り

童心にかえり十迄知る同志

杜的

松本はるみ報

はるみ

聖子

一男

紫朗

悦良

世似

ヒデ子

天痴人

かつ子

民子

智恵子

鈴江

恵美子

蒼流

清泉

白汀

八重子

朗子

正子

ちらばつた同志いつでも集まれる

一枚の旗を大事にする仲間

風を掴んで同志帰つて来てくれた

裏山に同志とうめる軍資金

葉が落ちてからの同志で裏切れぬ

岸和田川柳会

入口は狭いが温い我が住まい

呑み足りた笑顔に乳の香が匂う

帰宅した途端に匂う夜のメニユー

鶴橋の匂い働く人の街である

紅白の暮入口に陽がおどる

入口があつて出口のないあの世

太古への色香が匂う飛鳥人

入口にシエパードがいる怖い家

酒とろり人生語る老いふたり

羨望の花道人生狂わせる

人生の重さの外の釜が崎

修羅越えた過去が滲んだ母の背

蔭日向無い人生を子にゆずる

発想を変えても行先不透明

エッセイを閉じて浮世のうらおもて

ふみ

荒介

日枝子

登栄

千代

武助報

希久志

ゆう

ダン吉

一弥

狸村

浪速子

勝晴

初太郎

ひで

加代子

武助

甘平

白光子

通彦

寿美子

栄

英子

楓

正坊

和友

陽露子

巨詩

静江

美智子

倫子

風云児

満津子

水客

春子

佳秋

道子

白浜子

光子

紫香

飛鳥

紅陽

政岡日枝子報

八重子

朗子

正子

御前

惠子

夕子

花子

やえ

玲子

亜弥

てい子

瑞枝

八尾市民川柳会

飯田

悦郎報

美千子

雀踊子

定子

律子

飛鳥

裏方の窓は小さ目にしておこ
自由のある裏方で趣味に生き
裏方で終った父を笑うまい
風当り裏方として受けておく
手帳から益々妻の猜疑心
裏方が降らせる雪の舞う舞台
裏方の才ある企画で社が映える
どさくさの中で一ぶく吸う煙草
どさくさにまぎれて義理を一つ欠き
どさくさに紛れ唇盗まれる
どさくさの中で拾った落し物
どん底を救った妻の時間給
あんたはん今日も出雲時間だね
新婚の夫婦で時間が不足する
時間割ゆつくり老いの旅日記

川柳化粧槽

植村客遊子報

博子 静江 昭二 かつみ きみえ 静恵 日出子 幸子 舞吉 与根一 鶴丸 長三 巡歩 風子 叮紅

亡母の忌に枕並べて三姉妹
孫にまで借りを残して病むつらさ
豪雨禍へ知らん顔して月冴える
物干しの一番てっぺんベアのシャツ
恥じらいを覗かせている露天風呂
聴障川柳 稲田 豊作
さよならの声もどかぬ風の駅
やがて我も娑婆よさよなら極楽へ
瀬戸の橋出来てさよなら連絡船
左様なら再会のない左様なら
除夜の鐘が鳴るよ兎の年さよなら
片想い何んにも言えずさよなら
サヨナラが辛くて見送り出来ませぬ
さよなら机に書いた指文字
信じ合う二人の目と目さよなら
さよならしてから伝言思い出し
肉体はさよならしても盞生さる
級友の葬儀しめやか左様なら
南大阪川柳会 中川 滋雀報
魚匂う町明け暮れを冬にする
ラッシュに明け暮れ蜂が疲れてる
雪山に明け暮れ祈る人の登山
關病のあけくれ秋が走り過ぎ
明け暮れのカラスの声を意識する
振り払う火の粉係わり深くなる
かわりがあるので実る耳になる
係わりが出来そう拾ったイニシャル
後悔をして係わりの紐ほどく
係わりはない雑踏にひとりいる
ささやいてくれる人なし猫を抱く
ささやかれそれから肩をたたかれる

みね子 信夫 永楽 和子 客遊子 豊作 鶴翁 文古 一眺 健太郎 柳香 進一 八恵子 たみ 鉄火 三香 作二郎 慶三 喜風 新造 勝美 柳伸 雀踊子 滋雀 智子 重人 藤子

魂胆のあるささやきを真に受ける
寝たきりの母がささやく隠し場所
ささやきに弱い女の泣きばくろ
ささやきの甘さに酔った赤ワイン
ささやきの中に釘打つ語尾があり
大層な話聞いとく左耳
豊作
済んでもたホラ大層な事やない
背水の陣大層なことを言う
大層な見舞客来たガンを言う
大層に言うから話に角がたつ
大層な御殿でラーメン食べている
週刊誌大層に書く記事で売り
大層な手術でやつと歩けそう
仲直り酒がまわってまたもつれ
手打式固い笑いのまま終る
その裏でまだ煙ってる仲直り
仲直りするど帰りが遅くなる
子の喧嘩飯を食うたらもう忘れ
損得を計算すくで仲直り
川柳わかやま 神平 狂虎報
忠告が誤解招いた身の不徳
元氣よく回る静かな独楽の芯
習慣を尊ぶ姑の艶布巾

庸久 頂留子 寿美 覺然坊 楓 凡九郎 曲ん手 公一 晴風 ハル子 三恵子 綾珠 柳宏子 正紀 しんじ 久子 善信 文秋 武雄 信子 美智子

谷垣史好氏(松原市)より
亡母供養として
金一封拝受いたしました
川柳塔社

素晴しいライバルばかり招かれる
招待状少し企み見え隠れ
招いとこまさか手ぶらで来ないだろ
友達を招き夫が先に酔う
鐘の音が招くと村の子が帰る
アメリカでホームシックの招き猫
ひとり住む老いを隣の風呂が招ぶ
幸運を招かず朱竹色褪せる
招かれては僕の影だらう
手招きをされて兜の緒を締める
招くより招かぬ方が先に来る
客招くチラシに嘘が多すぎる
間魔からの招待状はまだ着かぬ
招待状義理と御世辞の重さかな
束の間の夢グラビアが招く夜
工場誘致招かぬ公書つれて来る
腕利きを招き暖簾が新しい
福招く苦の手相がうたい出す
招かれた席でリボンの荷が重く
かけ声の元氣へ鯛がそり返る
すばらしい夕陽明日へ元氣わく
来世紀背負う元氣な呱呱の声
飲む話とたんに元氣出る男
元氣者ために看板外したい
口ばかり元氣で指図する炬燵
お元氣でよろしますナをどない聞く
この元氣極楽までも続けたい
心配の一つに妻が元氣すぎ
習慣とは稀いわたしの靴の減り
習慣の違う二人を結ぶ愛
習慣を破る小さな矢を放つ

克子 千寿子 正博 紫香 緑良 笑女 白光子 信秋 三男 柳宏子 輝子 忠 恭子 光代 萬的 豊太 公芳子 裕美 紀美女 登志代 三枝子 結実 太茂津 凡九郎 瑞穂 鬼遊 忠雄 三千代 栄美子

習慣を覚えて嫁は胡座かく
午後三時無性にコーヒー欲しくなる
保育所で昼寝の習慣もろてくる
返盆という習慣にかしまり
川柳はびきの
田中 隆二報
口出しをマイベースの子に叱られる
あの世でも金があるのか溜めている
横車押せぬスクラム組んでいる
退屈な人が荷物と背負い込む
一呼吸してベルを押す門構え
披露宴うらぎり者の貌はない
冗談の出ない会議に肩がこり
深呼吸少し焦りをしずめよう
正露丸減らず茶の間今日も無事
ちぐはぐな皿に誤算の客ひとり
楠公さんまだ生きてる観心寺
りんご箱あけて信濃の香にひたる
笑われる人になりたい漫才師
悪友がまた背の口背の口
肉体をフアツション化するボディビル
子の嘘をつきとめもせず賞めている
定年に晴耕雨読というお世辞
親馬鹿を子馬鹿を庇う交差点
宅急便夫婦喧嘩の荷が届き
不覚にも誘いの隙に乗せられる
菊枯れて一期一会の人形師
女ぬきお湯とお酒の旅に出る
比べてる比べられてる七五三
柿熟れて飢を知らないモズの声
初出勤安全ベルトで引締める
物置ききのスキー気になる雪予報

政一 杜的 照子 天彦 三千代 満洲子 弘子 与呂志 ケイ子 比沙子 末一 昭子 蛙声 正隆 義美子 健三 忠宏 昇 繁男 重人 優 みつる シメ子 伴子 清子 悦子

母でこそ入れてくださる宅急便 隅谷義
正論が秋の天へとつき抜ける 美子
女関を入れれば呆つけた眼がね猿 吐来
乗越しの切符はくれぬ十二月 隆二
最後まで食いついて行く遺産分け 胡村
立ち話罪な話の花が咲く 敦子
陰口を赤提灯は語らない ダン吉
働き盛りの男の野心が燃えている 寿美
エレベーターたった一人で落ちつかず 石橋義一
ふたりきり止めて置きたいエレベーター 和子
ひやかしの客も拒まぬエレベーター トミ子
和解への言葉を探る熱いお茶 淳一
三次会茶漬で締める名幹事 希代司
肝心な処でお茶をにごす人 淑子
陰口に挑戦してる赤い服 美津子
職場見学働く父は見直され 白水
お茶だけと止めて長居の客となり 志津
ゆっくりと啜る番茶であらうとも 一屯

豊中もくせい川柳会 田中 正坊報
茶を出して聞く耳になるいい話 紫香
筆ペンに敬語は忘れられてゆく 佳秋
ダルマの目たつぷり筆が墨含む 白淡子
筆塚にお詫びとおく母の筆 房子
写経一卷果たし静かに筆洗う とく子
友の文達筆すぎて親しめず 隆
床柱光らせ母の冬ごもり きく子
少年の夢が光っている聖樹 武庫坊
不器用な男が汗を光らせる つえ子
お茶席の妻は他人のよつな顔 正坊

被写体の花に光が邪魔をする
 手の当たるとこだけ光る百度石
 目に見えぬけど光ってる母の背
 親の目にそれぞれ光る子のしぐさ
 シャンプーの泡から眉を浮かび出す
 うますぎる話に眉をなでてみる
 よく眉の動く男にだまされた
 周平の武骨な眉が会う時雨
 風雪に耐えた襟で白造る
 十二月三つ違いの兄さんと
 北風に立てば集まる募金箱
 孫たちに私の年金ゆすられる
 悪夢から消したい男現われる
 先立たれ相続税が追いかける
 クリスマス靴下置いて子が眠る
 再会の余韻が残るレモンティー
 定年のない母さんの煮ころがし
 粕汁のだしはやっぱり蛙にしよ
 美しく老いれればやっぱり金がいる
 坊さんにはつぼつ挨拶とこうか
 いずも川柳会 吉岡きみえ報

美祿子 萬の杜 慶子 作二郎 博史 明 洋子 眉水 薫風 曲ん手 市雄 よし子 登代子 典子 諷云児 富子 英子 福一 登志実 水煙 久代 治 翠星 満江 河南 昭二

一億が呼んで還らぬ北の島
 女一人灰皿のいる友を呼ぶ
 先生と呼ばれ記憶の幼子を探し
 呼ぶ前に一人で泣けと母が来る
 春を呼ぶ花とやミモザ買うて来る
 ポケットのこぶしは亡母を呼び続け
 鍋物を射止めた自慢モタン鍋
 鍋物は焦げて話が煮詰まらぬ
 旧交を温め合った鍋の夜
 自在釣民話も吊す故郷の鍋
 日銭追う父を待つてる鍋料理
 すき焼きの匂う団地の灯が丸い
 霜一夜二夜鍋物の味汗の味
 鍋物を囲むお猪口は唄が好き
 鍋物に思わず過ぎた猪口の数
 鍋の肉二浪に寄せた母の数
 白黒が明日をねらってちゃんこ鍋
 温めてあたたためて待つ二人鍋
 鍋好きな父へ陰膳北の海
 太つ腹縮めてたつ年に立ち向う
 初孫の笑顔に襟締め直す
 ポーナスもローンが締める年の暮
 締めくくる長老がいて座が和む
 帯締めで鬼千匹の座にすわる
 じわじわと家のローンが締めて来る
 片チビのまま締めくくる父の靴
 締められたドアが気になる人事室
 日記帳今年の彩で締めくくる
 招かれて今日のはめてたい帯締め
 行間に思慕したためて封締める
 言っただけは言って今年を締めくくる

桜水 重昭 智子 南風 智恵子 文子 孝太郎 壽美 多賀子 律子 三代 草丘 草 千草 美磯 ノブ 江雲 鐘童 リチエ 紋次郎 弁次郎 一葉 青湖 多津老 勝子 勝子 勝子 勝子 房子 和子 美代子

靴ひもを締めて作戦練り直す
 帯締めた位置で消えないものを抱く
 花道を飾る男の尾氈骨
 飾らない農夫を飾る夕陽さす
 飾り気がなくて男は愛を抱く
 退官の花道飾るフィナーレ
 飾り気がないからぞつこん惚れました
 うわだけ飾って奥は底知れず
 ネットレス昔も埴輪首飾り
 ぼけ初め飾る言葉も見失い
 飾り気を見じんも見せぬ底力
 イエスでもノーでも揺れる耳飾り
 着飾った母の後れ毛老いている
 ポイントを両の乳房に刺しゅう編む
 門松はきれいに飾り社不況
 着飾って女の見栄が燃えはじめ
 これはどう大きく飾る付け黒子
 川柳たけはら 森井 菁居報

久栄 桂子 叮紅 ちかし 流石 代仕男 巡歩 嘉寿恵 信春 しま子 為一郎 幸一 まこと きみえ 独仙 芳正 緑之助 幼千枝 小二史 小二昌 小三裕次郎 小五由博 小四品美 小四晴美 中一純平 中四視幸 中二亜貴子 菁居 不朽 勲

返し忘れたご恩を似た方見ておもう
 急ぐから車に乗らず歩くとす
 ワンマンと言われ思われ悔いはない
 生きている証なりけりもの忘れ
 幸せは逢者で金婚迎えられ
 主張すれば肩に重味がのしかかる
 米櫃が満ちて平和な女の譜
 あれこれと欲ばりすぎて多忙なり
 孫が来る布団を干して掃除して
 施せば施しが降ってくる
 クラス会生徒に還る師の言葉
 天高く妻が作った旬の味
 思わず両手でいただく川柳誌
 鯉の町津和野の鯉は肥満体
 あたたい土になりたい落葉の譜
 秋茄子の彩が目に沁むカラシ漬け
 いま正に狙上の鯉となるらん
 若い訃へただやるせなく栗をむく
 ワープロの孫の手紙の他人めき
 名硯の証と墨の色が言う
 ひとり旅大きな自信持ち帰り
 わたくしが少うし見えて来て四十
 ファミコンに秋の童話が見当らぬ
 趣味多忙洗濯物は編みつづけ
 幸せの糸を夫婦で編みつづけ
 この人も哀しい荷物一つさげ
 思うことあつて医学書くつてみる
 三角点まだみつからず六十よ
 忍従の証しか母の座りだこ
 生き方を問う日溜りのやじろへえ
 あかるい母の溜息一つ見えてしまふ

英 詩
 天石庵
 静 水
 清水
 ヤスエ
 喜美子
 静 佳
 千年枝
 喜久恵
 浪 子
 雪 子
 俊 夫
 麻 代
 千里
 静 風
 君 枝
 八重美
 栄 恵
 ふさ枝
 太 虚
 節 夫
 蘭 幸
 白 狐
 房 子
 比呂子
 笑 子
 満 子
 政 己
 博 子
 令 子
 淑 子

平和公園いくさは知らぬ若い群れ
 箒目に自己満足をして終える
 鹿が角切られて今年も秋深む
 自然体で生きて秘訣をよく聞かれ
 尼崎おはま川柳会 上田 佳秋報
 色気だす妻のパジャマが気にかかる
 パジャマ着た油断が見える娘の寝相
 一言に深い心が深い策
 昼行燈敵を欺く深い策
 渡された軽い財布に四苦八苦
 病室でひそかにハミング宮津節
 外食も財布の中身でメニューかえ
 新人類財布の中味はカードだけ
 煩惱が一層絆を深くする
 煩惱を払う女の乱れ髪
 賽銭の箱に注連張る大晦日
 トロ箱にネギ植えている兎小屋
 箱入りの娘にしておく娘だるま
 提灯箱家紋を付けて語りかけ
 宝石箱に女の嘘がつまってる
 骨箱を抱え故郷の駅に佇つ
 電話しただけで無沙汰の義理がすみ
 ステイックの金賞光る年の暮れ
 年賀書く今年一人の友が消え
 ある時は阿呆で生きる利口もの
 追いかけてほしいともてぬ奴が言う
 女房とケンカした夜も風呂にゆく
 尼崎いくしま川柳会 上田 佳秋報
 知る権利女房は米を研いでいる
 石蹴つて恋の傷みを知る孤独
 知つてからひとりよがりをもと恥じる

貞 子
 一 路
 新 造
 シゲヨ
 定 人
 よしつぐ
 貞之助
 貞 男
 江 美
 清 太
 敏 之
 貞 吉
 す み
 歌 子
 弘 治
 昌 子
 向 西
 いわお
 武庫坊
 紫 香
 た か
 十四郎
 美 代
 佳 秋
 保 蔵
 牧 郎
 伊三郎
 正 一
 嘉 矩

真実を知っているから喋れない
 少年のニキビはすでに恋を知る
 聞き役に廻り姑と仲がよい
 大役が済んで目出度い足袋を脱ぐ
 悪役の顔晴ればれと菊を着る
 役役いてやたら名刺をだしたがり
 脇腹の妻があればこれ指図する
 童話劇少女さびしい役ばかり
 幼な子が祈るそばには影一つ
 星に折ればひとつひとつが温かい
 ぬくい雲の下に祈念の絵馬ひとつ
 鈴鳴らす祈り素顔のわたしです
 合わす掌にホント祈りがありますか
 一瞬の油断に人生狂いだす
 ビエロにも油断があつた冬の風
 ひと振りの塩で目覚める茄子の彩
 塩加減利かして女ひとり住む
 夢を追う顔はいつでも輝いて
 母の目に追われて嘘がけつますき
 追いついたところで矢印見失う
 蠅追うて場末の屋台何か煮え
 わが庭の菊ためらう花鋏
 浪の花意氣弾ためる勝力士
 腰掛けて依怙地に飯膳しています
 タテのことヨコにもせずで嵩だかい
 今年こそその日記も白いまま閉じる
 片付いた筈の話をねり返す
 人知れず悪をたくらむ青い空
 赤色が好きな男で気がよわい
 紙風船と冬をくすり屋持つてる
 秋風が吹いて計算ばかりする

定 人
 かすみ
 みち子
 白溪子
 一 郎
 山 久
 曲 手
 園 歩
 美代子
 美智子
 静 夢
 佳 秋
 凡九郎
 風云児
 萬 的
 柳 影
 年 代
 柳 芳
 杜 的
 紫 香
 春 子
 英 子
 芳 子
 保 蔵
 梨 枝
 貞 子
 美代子
 郁 栄
 作 二
 歌 子

2 月 各 地 句 会 案 内

	日 / 時 及 び 題	会 場 と 投 句 先
尼 崎 いくしま	5日(金) 午後1時半より 占う・視野・自由吟	サンシビック尼崎 阪神電車尼崎下車南西徒歩3分 〒661 尼崎市南清水11番1号 田淵定人 句会費 300円 投句料 60円切手3枚
堺川柳会	7日(日) 午後1時より 表札・ひ弱・暇(ひま)・ひとり	堺総合福祉会館 南海高野線堺東駅下車堺市役所西入ル 〒593 堺市堀上緑町2-9-2 河内天笑
西宮北口	8日(月) 午後1時より 明るい・婚約・自由吟	西宮市中央公民館 阪急神戸線西宮北口駅南出口歩5分 〒661 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代 句会費 300円 投句料 60円切手4枚
八尾市民 川柳会	10日(水) 夕6時より こころ・一瞬・続く・話	八尾市立労働会館(山本) 近鉄山本駅すぐ 〒581 八尾市弓削町南2-141 飯田悦郎
川柳塔 まつえ	13日(土) 午後1時半より 漫画・雑学・鬼	慈雲寺 松江市和田見町 〒690 松江市雑賀町1686 恒松町紅 句会費 300円 投句料 300円(60円切手可)
川柳 わかやま	14日(日) 午後1時より 風邪・立春・逃げる	和歌山県民文化会館 4F 〒640 和歌山市駕町15 野村太茂津 句会費 300円 投句料 60円切手3枚
もくせい 川柳会	15日(月) 午後1時より 朝・恥・とぼとぼ・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急宝塚線曾根下車東南歩5分 〒561 豊中市島江町1丁目3番5-801 田中正坊
高槻川柳 サークル 卯の花	18日(木) 午後1時より 辻・器用・地球・自由吟	高槻市民会館302号室 阪急電車高槻下車歩5分 〒569 高槻市宮田町3-8-8 川島風云児 句会費 500円 投句料 200円(60円切手3枚と20円切手1枚) 各題2句
南海電鉄 川柳部	18日(木) 夕6時より トンネル・イヤホン・ガイド	南海会館ビル内南海電鉄本社地下食堂 南海・近鉄・地下鉄各難波駅下車高島屋東南角 〒542 大阪市南区難波5丁目1番60号 南海電気鉄道(株) (川柳部) 不動産管理部管理課 廣井李雄 句会費 無料 投句料 60円切手1枚
富柳会	18日(木) 午後1時より 恋人・後悔・豪遊	富田林市中央公民館 〒584 富田林市南大伴353 池 森子
南大阪 川柳会	19日(金) 夕6時より 悲鳴・見計らう・居心地・理解	寺田町高松会館 JR環状線寺田町駅南100米 〒544 大阪市生野区生野西1-5-2 金井文秋 句会費 500円 投句料 180円(郵券可)
川柳 ねやがわ	21日(日) 正午より 勇気・大安・言いわけ・自由吟	寝屋川市立総合センター4階 寝屋川市駅下車京阪バス総合センター前下車 〒572 寝屋川市春日町9-9 高田博泉 句会費 500円 投句料 60円切手3枚
駒つなぎ 川柳会	22日(月) 夕6時より 落ち着く・冷える・太っ腹・片隅	寺田町高松会館 JR環状線寺田町駅南口下車 南へ1丁3筋目左へ駅より歩3分 〒545 大阪市阿倍野区天王寺町北1-3-11 津守柳伸
川柳 東大阪	27日(土) 夕6時より 寒い・運命・おまけ・針	東大阪市社会教育センター2階 近鉄布施駅北へ5分長堂小学校隣 〒577 東大阪市菱屋西5-6-23 桑原喜風 句会費 500円 投句料 60円切手3枚

★特に記載なき場合 句会費 500円、投句料 300円(郵券可)、各題3句以内

原稿送り先(〆切・毎月20日 予め決定している場合は何ヵ月分でも結構です)

〒597 貝塚市地藏堂53番地の5-1-401号 宮園射月芳

●募 集●

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
★水煙抄欄の投句は一般誌友の方です。

課題吟 (5句)	「肌(膚)」	「遊ぶ」	「的」
永倉 僕川 選	林 瑞枝 選	福浦 勝晴 選	

四月号発表 (2月15日締切)

★愛染帖・茴香の花・課題吟は同人・誌友を限らず。

課題吟 (5句)	「袋」	「緑」	「足」
松下 たつみ 選	田中 隆二 選	春城 年代 選	

五月号発表 (3月15日締切)

2月の常任理事会は1日(月)

定価 五百円(送料50円)
半年分 三千二百円(送料共)
一年分 六千三百円(送料共)

昭和六十三年一月二十五日印刷
昭和六十三年二月一日発行

編集兼 西尾 巖
印刷所 藤原 童心 社
〒545 大阪市阿倍野区三木町二一〇一六
ウエムラ第2ビル202号室
発行所 川柳塔社
電話 (三六九)一六九一四番
振替口座大阪 813336八番

本社2月句会

日時 二月八日(月) 午後六時
会場 メンズファッションセンター7階
東区内本町一丁目 電話 06・941・1918
地下鉄谷町4丁目下車(2番出口)交差点西南角

兼題 「念入り」 野村 太茂 津
「食後」 宮口 笛生 選
「切符」 岩本 雀踊子 選
「歴史」 西田 柳宏子 選

席題 二題 当日発表 各題三句以内厳守

会費 五百円

★投句は柳箋(4cm×19cm)に一葉一句。
各業毎に裏面に必ず氏名明記。
投句料 300円(60円切手5枚)同封のこと。

川 柳 塔 社

3月の兼題 「省略」「餞章」
「余裕」「勲章」

3月の本社句会は7日(月)

『夜市川柳』募集

第9回 「きもの」 津守 柳伸 選

3句・締切 2月末日

第10回 「時計」 板尾 岳人 選

締切 3月末日

投句先 〒593 堺市堀上緑町二一九一

河内 天笑 方
堺川 柳 会

編集後記

☆床の間の木枯庵の山口響子の「海に出て木枯庵るところなし」から路郎先生との「俺に似よ」に替えて九州への旅に出た。別府に着く直前の洋上から美しい初日の出を拝む。夕刻、岡城趾の登り口で、ぼったり田中正坊夫妻と会う。翌日の新幹線も小倉から同じ列車だった。☆体調がも一つ思わしくないので今年は地方の会への出席を極力制限しようと思っているにも拘らず、十日の岡山県川柳大会へ岳父・天笑両君と同行した。地元

の邑久町をはじめ、竹原、米子、弓削、大原、玉島の仲間と逢え。二日に、青の洞門から小倉へ向うバスの中でラジオの新春川柳大会を聞き、山内静水氏の声をなつかしんだのだが、その顔にも会えたわけである。☆朝日新聞紙上で今年に入ってから山添眉水氏の文章、亀山恭太氏の顔写真入りの記事、時実新子女史の記事などたて続けに掲載された

川柳界は勢いのある一年になりそうな気配である。☆時実新子句集「有夫恋」は初版の一万部が四日間で書店から無くなったとある。早くから第三刷の発行も決ったという凄さだ。装丁に川柳の文字のないのが不満だと言えば、友人は、不倫川柳が川柳のイメーシになると迷惑で、川柳の二字の無い方がよいと言う。「柳界の反逆者」と新聞にもあるのは、そういう点も含まれているようだ。☆中村白影子句集事件といえるいざこざが、新子女史にまつわって起ったことがあった。遺句集が、結果としては盗作呼ばわりをされたので人を鞭打つ形になったのだが、その時に女史のやさしさと頑固さを見せつけられた。「鬼と暮らして鬼のふんどし洗いおり」川柳の句集が何万、何十万冊と売れることはめでたい。☆西出楓葉さんに「サラダ記念日」を贈られたお返しに、私は「有夫恋」を送った。鬼遊さんも宣伝これ努

めておられるそう。☆皆さんもどうか読んであげて下さい。(薫)▼如月や江下北川作江太鼓「これは川柳でんでんとりあげてもらった句である。二月になると、昭和七年当時を連想する。古いと言えは確かに古い。しかしこの上海事変が尾を曳いて世界大戦へと進展した第一幕に当るのである。▼いまさら戦後でもあるまいと思わないで欲しい。竹下内閣の初年度予算政府案に、軍人恩給資格者らへの慰労事業のための基金(二〇〇億円)の初年度積立金として一五億円計上されている。同じ予算案に、防衛費として三兆七千余億円が上っている。巷間やかましいGNP比一%の枠は、既成事実として完全に踏みこたれている。破るための枠なら設ける必要はない。▼数字は読者にとって煩わしい限りであるが、この余りにも大きな隔たりを知っ

てもらうために書かざるを得ない。戦後四十二年も経った戦さの後始末もできない国が何の防衛予算だ。他国を刺激する軍備の拡張よりも、平和憲法に基く他の方面に活用する考えができないだろうか。▼整備新幹線も結構だが、採算がとれるのだろうか、責任のないのがよってたかって国鉄の二の舞にならんことを願う。軍人恩給資格者の一人として二十年先の慰労事業などやってもらいたくない。世直しへ妻を連れだす投票日(き)☆旧臘二十五日の朝刊に、文部省の教育課程審議会が二年四カ月にわたる審議のまとめを文部大臣に答申した、という記事が載った。今回の教育課程の全面見直しの中で最も大きな変化は高校の社会科を分割して地歴科と公民科を設けることだろう。私など戦中派にとっては、懐しいもの、もの悲しい「公民」の授業が、またぞろ復活しそうである。☆当時、中学の「公民」で何を教わったのか、全く憶えがない。ただ新任の帝大出の若い先生が、よく授業を脱線し、文学・芸国の話をしてくれたくらいである。☆公民とは、広辞苑によれば、①私有を許されぬ国家(天皇)の人民。律令制における良民。②国政に参与する地位における国民、市民。とある。むつかしい定義はともかく、昔の公民科が聖戦完遂のための思想統制を目的としたものであることは疑いない。☆おもしろいことに、同じ朝刊の同じ紙面に、北鮮に抑留中の第十八富士山丸の船長、機関長に労働教化十五年の判決、という記事があり、その中で朝鮮中央通信が「わが国に対するスパイ行為を系統的に行い、日本情報機関の指令を受けてわが国の公民をら致した」と報道している。☆いすれにせよ、何かしら全体主義の匂う、気味悪い言葉ではある。(史)

昭和四十二年一月九日 第三種純粋酒類認可
 昭和六十二年一月二十五日 印刷
 昭和六十二年二月一日発行（毎月一日発行）

菊正宗

伝統の味を贈りものに……



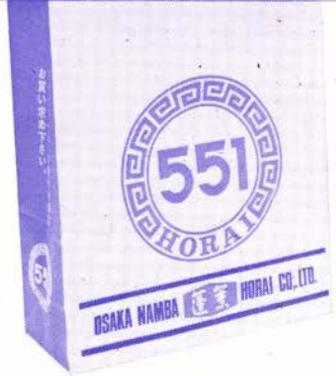
料理がいきる
 辛口の本格派

日本酒で乾杯!

神戸・灘
 菊正宗酒造株式会社

ボリュームたっぷり・スタミナ満点!!

豚饅・焼売・焼餃子



なんば戎橋筋本店
 その他有名百貨店でどうぞ



TEL641-0551